

*lost ~ wing*

III

~ 傷ついた愛の羽根 ~



*kai.*

*Illustrated by: maimu=maimu (DOGURAMAGURO)*

## Products

---

◇All story making & written by K a i .A

◇Illusted by DOGURAMAGURO

lost wing～傷ついた愛の羽根～(I) . . . 《第1～11章》

⇒⇒<http://p.booklog.jp/book/50676>

lost wing～傷ついた愛の羽根～(II) 《第12～22章》

⇒⇒<http://p.booklog.jp/book/51983>

## Intoroduction

---

### —登場人物紹介—

#### 翼(24)

...本編の主人公。一見冷淡な性格で人付き合いが苦手だが、基本的に素直。ある事情で、自分自身を証明するためにホストへの道を歩み始める。元会社員。

#### 羽月(19)

...もう一人の主人公。明るく元気で、誰とでも仲良くなれる。**186センチ**の高い身長と金髪・京都訛りが特徴。ある人物との再開を目的で上京を決意。

#### 愛菜(25)

...美と品性を兼ね備えたカリスマキャバクラ嬢。天馬とは独立前からの付き合いで、【**Club Pegasus**】の常連。翼とある人物の面影を重ねている。

#### 天馬(27)

...カリスマ性溢れる【**Club Pegasus**】代表取締役社長。厳しいが従業員思いで、翼や羽月の成長を見守る。

#### 翔悟(22)

...【**Club Pegasus**】の**No.1**ホスト。容姿端麗で、何でも自分が一番でないと気が済まない性格。

#### 光星(25)

...【**Club Pegasus**】**No.2**ホスト。黒い長髪が特徴。非常に攻撃的で傲慢な性格。後輩や新人に高圧的。

#### 由宇(20)

...【**Club Pegasus**】**No.3**ホスト。明るい短髪が特徴。冷静で非常にドライな性格。

#### 佐伯(28)

...【**Club Pegasus**】の店長。翼たち新人ホストを厳しく指導する。

#### 美空(19)

...母親とともに小料理屋で働く心優しい少女。とあることが原因で声が出ない。

梨麻(22)

...【Club Pegasus】の新規の客。服装は派手だが、性格はおとなしめ。風俗で働く。

紗恵(25)

...かつての翼の恋人。かつてのOLとしての面影はなく、風俗嬢に転身している。

聖(28)

...歌舞伎町ホストクラブ【Club Unicornis】のNo.1プレイヤー。かつての天馬のライバルで、その人脈とカリスマ性は彼以上ともいわれるほど。

翌朝、翼は目覚めた。

ジャケットすらまだ羽織り、壁に寄り掛かり座ったまま寝ていたことに薄々と気付き始めていた彼には、真っ白な一枚の毛布がかけられていた。

『そうか、俺はあのまんまここで……』

泣き付く美空をあやしてる内にいつの間にか寝ていたことをようやく意識した翼は、今いる部屋に美空の姿がないことに気が付く。

「美空ちゃん、どこに？」

翼はまだ眠気の残る目を擦り、重く感じる身体をゆっくりと立ち上がらせた。

周りを見渡すとが人の気配は無く、カーテンの隙間から零れる日の光だけが部屋の中をわずかに照らしている。

「ん？」

その時、彼の嗅覚を温かみのある香ばしさがふんわりと刺激する。

「一階の方からか」

翼はそのほのかな匂いを辿るように、ゆっくりと一階への階段をおりていった。

「あっ」

階段をおりきると、翼はハッとした。

そこには、昨日とは違う私服に着替え、その上にエプロンを纏っていた美空の姿があった。彼女は、キッチンを目の前にテキパキと調理をしていたのだった。

「美空ちゃん」

翼が声をかけると、美空は彼の姿に気付きペコリと頭を下げる。

『オハヨウゴザイマス、翼サン。狭イ所デスガ、眠レマシタカ？』

美空が手話でそう言うと、翼はコクリとうなずく。

「気付いたらすっかり寝ちゃってたよ。毛布、かけてくれたんだね、ありがとう」

『イエエ』

「こんな朝早く、料理作ってるのかい？」

『朝ゴハンデス。タイシタモノハナイデスケド、ヨカッタラ翼サンニ食ベテ欲シクテ』

「朝ごはん、俺に？」

美空は顔をほんのり赤らめながらうなずくと、それ以上は何も言わなかった。

「じゃあ...いただきちゃおうかな。よく考えたら、昨夜何も食べてないからお腹減ったし！」

翼が笑いながらそう言うと、美空はそのつぶらな瞳を大きくしながらペコペコと頭を下げる。

『ゴメンナサイ！私ノセイデ翼サンニマデ迷惑カケチャッテ』

「いってそんな、俺だって昨夜はそれどこじゃなかったし.....美空ちゃんが今元気なら、それでいいよ」

『翼サン.....』

「さっ、美空ちゃんも一緒に食べよ。二階まで味噌汁のいい匂いがしてきたから楽しみだよ」

翼がそう言うと、美空は泣きそうな顔を柔らかい笑顔へと変える。

そんな彼女の表情が、今の翼にどこか懐かしい感覚を与えていた。

「いただきますっ」

翼は手を合わせながらそう言うと、早速お椀の中の味噌汁を口に運んだ。

「はあ〜.....」

翼のため息に近い声に、テーブルの向かいにいる美空は緊張の面持ちを示す。

『ドウカ、シマシタカ？』

「あーいや...すごい落ち着くなぁと思って、美空ちゃんが作った味噌汁」

『.....??』

「すごい美味しいよ」

翼がそう言うと、美空は満面の笑みを零した。

『嬉シイ、翼サンニソウ言ッテモラッテ』

「いや、美空ちゃんホントに上手だよ料理」

熱々の豆腐の味噌汁に、焼鮭・おひたしなどのオーソドックスな和朝食を、翼は美味しそうに頬張っていった。

そんな彼の姿が、美空には嬉しくてたまらなかった。

『！』

その時美空は、突然店のキッチンへと向かっていった。

すると、彼女は何かの料理を乗せた一皿を持ってすぐに戻ってきた。

「美空ちゃん、どうした？」

『コレ、ヨカッタラ味見シテミテ下サイ』

美空が持ってきた小皿には、一つの小さなロールキャベツの姿があった。

「ロールキャベツ……これも、美空ちゃんが？」

『オ母サン程上手クナイケド…ゼヒ翼サンニ食ベテ欲シクテ』

美空の手話を一通り見終わると、翼は小皿にあるそれをじっと見つめた。

『ロールキャベツ……。オフクロも得意げによく作ってたっけな』

翼は箸を止めながら、神妙な顔つきでそれをただ見続けていた。

『翼サン……？』

「あっ……」

『ロールキャベツ、嫌イデシタカ？』

「あ、ううん。いただきます」

翼は気を取り直して、ロールキャベツに箸をつけた。

箸で摘んで簡単にふわりと割れたそれからは、優しいコンソメの香りがふんわりと舞う。

翼は箸でかけらをひと摘みすると、それを口へと運んだ。

『オフクロのに……似てる』

翼は心の中でそうつぶやいた。

「美味しい。美味しいよ美空ちゃん」

翼が顔を上げ美空を見ながらそう言うと、彼女はニッコリとほほ笑んでいた。

30分後ー

朝食を終えた翼と美空は、食後がてらの茶をたしなんでいた。

「ごちそうさまでした。ありがとう美空ちゃん」

『イエ、コチラコソ。翼サン、昨日ハ……』

「んっ？」

『昨日ハ、ホントスイマセンデシタ。愛菜サンモ一緒ダッタノニ』

「いや、気にしないでいいよ。愛菜もそこんところはわかってくれるさ」

『マタ来テクダサイネ。今度ハ羽月サンモ一緒ニ』

「あ、ああ。じゃあ、俺はそろそろ行くね」

翼が腰を上げて立ち上がると、美空はスッと彼の腕をつかんだ。

「美空ちゃん？」

華奢な手で翼の腕をつかむ彼女の表情は、不安さに充ちていた。

『……』

何も言わず、ただキュッと自分の腕を両手で握る彼女を見て、翼は口を開いた。

「美空ちゃん、何かあったらすぐに俺のケータイに連絡するんだ。仕事で出れないかもしれないけど、何かあったらすぐに知らせてくれよ」

『ソナナ……。私、翼サンノタメニ指名モデキナイノニ』

「そんなこといいから。とにかく、何かあったらすぐに言うんだ。いいね」

美空がうなずいたことを確認すると、翼はどこか安心したように彼女のもとを離れていった。

『アリガトウ、翼サン』

美空は手を振りながら去っていく翼の姿を、切なそうな表情で見送っていた。  
そんな彼女の姿を、すぐそばにいたチョコは不思議そうに見つめていた。

『美空ちゃん……か。ごはん、おいしかったなあ』

翼は心の中でふと彼女のことをつぶやいていた。

朝になってすっかり明るくなった歌舞伎町を翼は歩いていく。

そんな彼の目の届かないところに一足のヒールが落ちていることなど、もちろん眠気もある彼自身気付くはずもなかった。

数日後ー

翼は、美空とメールで連絡を取り合いながらも、【**Club Pegasus**】での仕事の毎日を順調に続けていた。

美空自身も少しずつ立ち直っていることに、彼自身もどこか安堵感に胸を撫で下ろしていた。

『美空ちゃんは、もう大丈夫だな。後でまた、お店に食事でも行ってみよう』

翼は店に向かう途中、ケータイを見ながら安心のため息をつく。

しかし彼には気掛かりなことが一つあった。

「愛菜……一体どうしたんだろう？」

翼は不思議そうに思わずつぶやいた。

先日の美空の家での件で先に帰っていったから、愛菜にいくら連絡をとっても、彼女からの連絡はそれ以降パツタリと途絶えていた。

愛菜の性格上、彼女が子供じみた嫉妬などで連絡を絶っているとは、翼はどうしても思えなかった。

『こんなに長く連絡が無いのは初めてだ』

翼はどこか妙な胸騒ぎを覚え始めていた。

そう考えているときに、彼の目の前にはもうすでに【Pegasus】のビルがあった。

エレベーターの前には、ドアが開くのを待っている一人の長身で金髪のホストの姿があった。

「羽月？」

翼は後ろ姿のそのホストに声をかける。

ホストはわずかに肩をビクッとさせながら、離れた後方にいるを翼のことをゆっくりと振り返った。

「翼くん……」

「やっぱり羽月だったか、おはよう」

「お……おはよう」

翼の挨拶に対して、羽月は今日もどこかよそよそしく応じる。

昨日今日で始まったことでないにしろ、翼にとって彼の急な態度の変化はやっぱり気になるものだった。

二人はそんな噛み合わない状態でエレベーターの中へと入っていく。

ドアが閉じて、店のある4Fへとたどり着くまでが、今の翼と羽月には妙に長く感じられた。

「……」

「……」

二人とも特に言葉を発しようとはしなかった。

羽月はもちろん、翼も相手は何らかの理由で今の自分をどこか拒否しているだろうことは、わかっていた。

気がつくとエレベーターのドアは開き、【Pegasus】の白を基調に彩られた綺麗なデザインのドアが姿を現す。

「羽月っ」

翼がとっとと店の中に入ろうとする羽月に声をかけた。

「……何や？」

羽月も振り向かずとも小声で反応する。

「君が最近俺に対して何でそんな感じなのか気になるけど、それが君の意思なら俺は何も言わない。ただ、一つ聞いてもいいか？」

翼がそう言うと、羽月はピタリと止まりながらもゆっくりとうなずく。

「どうしたんや、一体」

「こんなこと君に聞くこと自体違うんだろうが……愛菜のこと知らないか？」

「……」

翼がそう尋ねると、羽月は数秒ほど無言になった後に答えた。

「……知らんよ、俺は。てか何やねん、自分のお客ちゃうの？」

「ああ。そうなんだけど、最近連絡が不自然なほどパツタリ途絶えてな。何かおかしいと思って。もしかしたら親しい羽月か社長なら知ってるんじゃないかって思ったんだけど」

「そんなん、水商売しとうたら珍しいことでも何でもないやん。何か愛菜さんに切られるようなことでもしてしまったんちゃうの!？」

羽月は、まるで言い捨てるかのようなきつい口調を翼にぶつけた。

そんな彼の態度に、翼は目をまるくして驚く。

「羽月……」

「自分がしでかしたミスを人のせいにするなんて、男として最低やで!てかな、こんなんがウチの**No.1**やと思うと恥ずかしゅうてかなわんわ!お客の管理くらい、自分でちゃんとしいや!」

羽月はそう言い放つと、ドアを強引に開け店の中へとツカツカ入っていった。

『あいつ、一体どうしちゃったんだ……』

翼は店の奥に足速に消えていく羽月の後ろ姿を、ただ茫然と見つめていた。

「よう、No.1の翼くん」

「??」

立ちすくむ翼の後ろから、どこか謀ったように光星が姿を現した。

「光星さん」

「どうしたんだよ、こんな入り口の前でボーーーーッとして？」

「別に、何でも」

「ふーんそうかあ。何でもないならいいけど、No.1なんだからもっとしゃんとしてくださいよねえ」

ニヤニヤしながら言い放つ光星に対し、翼はムツとするのを表情に出さないように努める。しかし、翼もそれでは終わらなかった。

「そうですね.....気をつけますよ。あ、でも光星さん」

「あっ??」

「人の心配したり後輩いびりに精を出すくらいなら、伸び悩んでるご自分の心配されたらどうですか？」

翼が冷静かつ鋭く言い放つと、光星は眉毛をピクリと吊り上げた。

「な、何だと.....？」

「自分のこともままならない人に、余計なお世話はされたくないのよね。それじゃ」

翼は光星にそう言い放つと、ピッとその場から店の中へと入っていった。

『翼の野郎め.....今に見てやがれ!』

光星は、彼の後ろ姿を目で追いながら、不敵な笑みを浮かべていた。

「今日も一日やるぞっ！！」

天馬のひと声で、今日も【Club Pegasus】の営業の狼煙は上がった。

ホスト達が各々散らばる中、翼は一人事務所へ向かう天馬のところへと足を運んだ。

「おう翼、どうした？」

「社長、変なことをお伺いしますが……」

「何だ、あらたまって？」

「社長のところに、愛菜から何か連絡はありませんか？」

「愛菜からの連絡？無いぞそんなのは。何かあったのか？」

「いえ、これといって。ただ、何日も応答がないのは珍しかったので」

翼が俯きながら答えると、天馬は彼の背中を軽く叩く。

「社長？」

「翼、お前は今うちのNo.1なんだ。ハッキリ言うが、それは自己管理の範囲だぞ？それはしっかりとやらないと、他の奴に示しがつかないだろう」

「はい、すみません。……でもそうなんですがー」

「愛菜は人気キャバクラ店のカリスマって言われ続けてるキャバ嬢だ。いつもお前やうちのことに構ってるほど暇でもないんだぞ。しばらく、様子を見てみる」

「……はい。失礼します」

翼は、そう言いながら一礼すると天馬のもとから去っていった。

『愛菜からの連絡がない……??』

あのように翼に言い返したものの、天馬の中でも不思議と巻き起こる妙な胸騒ぎは止まることはなかった。

そんな時だった。

「♪♪♪♪♪～」

天馬のすぐ手元にある固定電話が、ひとつの着信を知らせる。

「もしもし、【Club Pegasus】ですがー」

一方ー

翼たちホストは、今日も来客した女性たちに楽しく接していた。

「ねえ～、翼くんは彼女いるのお？」

「いや、いませんよ。どうしてですか？」

「だってえ、そんな綺麗な顔してて、しかも**No.1**だったら女の子が放っておかないでしょ？」

「いえいえ、これがモテないんですよねえ」

「嘘ばっかー。でも、好きな子くらいいるんでしょ？」

「好きな子ねえ……さあどうでしょっ！」

「何それ～気になるう～。最近の翼くん何かいぢわるだよお」

「あれ、美優ちゃんまだ飲み足りないねえ」

「もおーう☆」

**No.1**としての自覚も少しずつ出てきたのもあるのか、翼の接客もいつの間にかしっとりとした落ち着いた着きを持つようになっていた。

「翼、ちょっと」

「はい。ごめん美優ちゃん、ちょっと出てくるね」

「ぶう～」

翼は美優に「ゴメン」と目で合図しながら、佐伯の指示通り席を立った。

「翼、あちらだ」

「はいっ」

「こないだ新規でいらした人みたいだが、今日はお一人でのご来店だ」

指示されたテーブルにいそいそと向かうと、そこには先日と負けず劣らずに肌を露出した紗恵の姿があった。

「紗恵……！」

「一也……ゴメンね、あのー」

紗恵がそう言うと、翼は改まったようにペコリと頭を下げる。

「御指名下さってありがとうございます。お隣り失礼します」

翼は冷静にそう言うと、ソファに座る紗恵の隣に腰をおろした。

「お飲みものは？」

「ウーロン割りで……」

「わかりました」

翼は、至って冷静に紗恵のドリンクを作っていく。

そんな中、紗恵はただ切なそうにうつむくだけだった。

「乾杯っ！」

翼の合図で、二人はドリンクの入ったグラスを交わす。

お互い一度ずつ口にする、すぐにテーブルにグラスを置く。

「一也、あのねっ」

「お煙草、失礼してもいいですか？」

「煙草って……あなた、一本も吸えないって……」

「失礼します」

そう言って翼は、自らくわえた煙草にそっと火を燈した。

「明菜さん、でしたよね？この間から僕にこだわっているみたいですが？」

「今は二人だけなんだから、それはやめて」

「……」

翼はもう一度煙草をくわえ煙をふくと、改まったように脚を組み替えた。

「どうしたんだよ。こんなところまで」

「あのね……私、あなたに謝りたくてー」

「もういいよ、すでに終わったことだし……」

「一也……」

「それより、あれからどうしてたんだ？今は風俗か何かで働いているみたいだが」

「気付いてたのね...」

「今の君と、こないだのお連れさんの様子や会話を見てればだいたいわかるさ。それにー」

翼は胸ポケットからあるものを取り出した。

「これ.....前に俺の知り合いのところで拾ったんだが」

翼は、一枚の社員IDらしきものを紗恵に見せた。

そこには"株アサカワカンパニー総務人事部・林"と書かれていた。

「.....！」

「それとな」

社員IDケースからは、

"ソーブランド・Pink-Princess♥明菜♥"

と書かれた一枚のピンク色の名刺が顔をのぞかせていた。

「それ.....！」

紗恵は顔を真っ青にした。

「まさか今紗恵が風俗の仕事をして、その客がまさかあの会社の社員.....とはな。あのオヤジ、どこかで見覚えがある顔だと思ったんだ」

「.....」

「紗恵も.....変わったんだな」

翼は、冷静ながらもどこか寂しそうにつぶやいた。

「そうよ、私も変わった。一也も変わった。みんな変わった。お金や権力が、色んなものを変えちゃったのよね」

「.....」

切なそうにつぶやく紗恵に対し、翼は押し黙っていた。

「翼さん、そろそろ」

「ああ、わかった。.....じゃあ、俺行かなきゃ」

「うん.....。私もすぐに帰るよ」

「悪いな、来てくれたのに」

「ううん。あ、一也」

「何だ？」

「ホスト、いつまで続けるの？」

「.....さあな」

翼は背中越しにそう言うと、すぐに紗恵の元から歩き去っていった。

『あたしがこんなになっちゃったように.....あの時の素直で元気な一也は、もういないんだね』

紗恵の頬を伝う一筋の涙が、去っていく翼の背中を陽炎のように滲ませていた。

「お疲れ様っしたあ！！！」

【Club Pegasus】は、盛況のまま今日の営業を終えた。

しかし、店中のホスト達の中心に立つ天馬の表情は、いつになく険しいものだった。

「社長、何かあったのか？」

「さあ。でも、何かすげーキレてる感じだよな」

ホスト達がざわつく中、そこに佐伯もやってくる。

「みんな静かに。今から社長から大事な話がある。社長、ではお願いします」

佐伯に促され、天馬はひと呼吸おいた後、意を決したように口を開いた。

「こんなことは、俺の口からはみんなに言いたくないんだが.....あえて言わせてもらおう。知ってる奴もいるかもしれんが、今歌舞伎町の一部で、ある恐ろしい薬が流れている。それが原因で、俺や翔悟が前にいた【Unicornis】は摘発された」

天馬の言葉に、店のホストたちはざわめき始める。

『"St.Alice"のことだ……！』

翼がそう確信する中、天馬は続けた。

「何で今この話をみんなの前でするかと言うとな……」

天馬は一度ため息をつき先を続けた。

「今日……流輝のポケットから、ソレが見つかったからだ」

「なっ！？そういえば、流輝のやついねえや」

「まさか流輝が……。そうなんですか社長！？」

「落ち着けっ！！流輝は今のところ謹慎をさせているが、薬物をやった形跡はない。以前一度噂に持ち上がったこともあることだが……」

天馬は抑えた怒りをその瞳に表してはさらに続けた。

「流輝の件でハッキリした。この店の人間の中に、薬を流している犯人がいるってことだ」

「何だって！？社長……それって」

翔悟が驚愕した表情で言葉を漏らした。

「マジかよ……！？」

「そんな……」

光星に由宇も、その事実に対して驚きを隠せずにいた。

「こんな風にみんなを疑うようなことは言いたくなかった。だが、流輝のロッカーにあった服にそれを出来るのは、俺達の中の誰かしかいない」

苦渋に充ちた天馬の表情に、事情を深く知る翼の胸の内は、こらえきれない想いで押し潰されそうだった。

しかし、その時だった。

「ようっ」

エントランスの方から、一人の聞き慣れない男の声がする。

全員がそこを振り返ると、そこには高級スーツを見事なまでに綺麗に着こなしている一人のホストの姿があった。

「聖！」

「聖さん……??」

天馬と翔悟、そして光星・由宇までもが、聖と呼ばれたその人物の姿を見て驚きの表情を見せる。

「取り込み中に悪いな、天馬」

「聖、お前何しに来た？」

「何しにって、そんな怖い顔すんなよ天馬。さて」

"聖"と呼ばれた男は、周りを見渡し、その視界の焦点を**No.1**の席に座る翼にあてた。

そして、ゆっくりと翼のもとへと近づいていく。

翼も、そして違う角度から見ている羽月も、その彼がただ者ではないことは雰囲気を感じ取っていた。

「なあ、あの人って誰だ？社長にタメ口だけど」

「バカ、知らないのか？あの人【Unicornis】の"天城 聖<テンジョウ ヒジリ>"。【Unicornis】の不動の**No.1**で、現役時代の天馬さんと唯一**No.1**を張り合ってた天才ホストだよ！」

「社長と張り合ってた！？そんな人がどうして……」

そんな中、聖はピタリと翼の前で足を止める。

すると、ニヤリと笑いながら口を開いた。

「君が**No.1**の翼くんかい？」

「はい。あなたは？」

「俺は【Unicornis】の聖……天城 聖だ。よろしく」

そう言って、聖は翼に右手を差し出した。

「翼です、よろしくお願ひします」

それに応えるように、翼も立ち上がって右手を差し出すと、二人は握手を交わしながら視線をぶつけ合った。

翼と聖……

**No.1** ホスト同士がついに対峙したこの瞬間が、

今から始まる激しい戦いの末のあの悲しい結末に続く入り口だとは、この時誰も思わなかった。

第 2 4 章へ

握手を交わした翼と聖は、数秒ほど互いに見合っていた。  
不敵に笑みを見せる聖に反し、翼はただ黙って彼の様子を伺っていた。

『この人、ただ者じゃない』

翼はホストとしての本能でそう直感した。  
しかし、そんな中先に口を開いたのは翼の方だった。

「聖さん、ですね。翼です、よろしくお願ひします」  
「よろしくっ、翼くん。へえ、思ってたより礼儀正しいんだね」  
「どうも。あのー」  
翼がそう言いかけた時だった。

「聖っ！」  
そこに天馬が大きい声で割って入ってきた。

「お前、どうゆうつもりだ？何をしに来たんだ！」  
「まあそういきり立つなよ天馬。別に俺は嫌がらせや妨害とかで来たんじゃない。噂の翼くんとやらの会いに来ただけさ。それにー」  
聖は、翼の横で驚きながら自分を見ている翔悟達に視線を向けた。

「久しぶりに可愛い後輩にも会いたかったしな」  
聖がそう言うと、翔悟は驚きを隠すように口を開いた。

「聖さん.....お久しぶりです」  
「久しぶりだな、翔悟。【Unicornis】を離れて天馬にくっついてってからは、けっこう目立ってるみてーじゃん」  
「いえ、そんな」  
その時、聖は優しげだった表情を一瞬で鋭くさせる。

「だが翔悟よ.....俺や天馬がプレイヤーとしていないからこそ、ここで**No.1**を張れてたお前が...

...今やホスト歴半年に満たない彼に負けて**No.2**か」

「ぐっ……」

聖の突き刺さるような口調に、翔悟は何も言わず顔を伏せた。

しかし、執拗に言い訳をしようとする彼に、聖はそれ以上何を言うこともなかった。

そして、その鋭い視線は由宇と光星に向けられた。

「由宇、相変わらず元気そうだな」

「聖さんも相変わらずで」

「**No.3**か。こっちに来てからもがんばってるようだな」

「ええ」

聖と由宇は、特に何があると言うわけではなく、淡々と言葉を交わす。

そして、次には横にいる光星に話し掛ける……と思いきや、彼はすぐに目をそらした。

『なっ……』

豆鉄砲を喰らったような光星は、そのまま立ちすくむ。

「聖さん……？」

光星は振り絞るように聖に声をかけるが、彼はふうとため息をつく。

「光星……お前は俺に何と言って欲しいんだ？」

「えっ」

「まあいい。どの道お前に今以上の伸びなんて誰も期待しないだろうからな。それにー」

聖は再び翼の方へと視線を向ける。

「今俺が最も興味があるのは君だよ、翼クン。天馬以外に唯一あの愛菜さんからの指名を勝ち取ったホストと言うからには会えるのを楽しみにしていたがー」

聖は一本の煙草に火を燈した。

「しかしまあ何だ、【Pegasus】のレベルもたかが知れてるな、天馬よ」

聖は煙をふきながら、呆れたように言い捨てる。

「どうゆう意味だ、聖」

天馬が冷静に聞き返すと、聖はもう一度煙をふきだしながら答える。

「あの女一人が客につけばすぐにでも**No.1**になれちまうような程度のレベルかって聞いているん

だよ。天馬、お前がいたときの【Unicornis】みたいにな」

「聖」

「俺は別にその翼クンに愛菜さんが指名客になろうがかまわんのさ。ホストの世界は結果と現状が全てだからな。ただなー」

聖は、その鋭い視線を翔悟や光星に向けた。

「仮にも一度は名店【Unicornis】を出てる奴が、ぽっと出半年そこらの奴にあっさり抜かれてるのが我慢ならねえんだよ。自分でそうは思わねえか？なあ、翔悟」

「くっ……」

翔悟は、聖の鋭すぎるまでの眼光からただうつむくだけだった。

そして、その眼光は光星に向けられる。

「光星よ」

「……何スか、聖さん」

「翔悟を抜いたその翼クンだけならともかく、由宇にまで抜かれてるとはな。どうだ？自分がいびっていたかもしれない後輩たちに抜かれてる気分は」

「聖さん、俺は」

聖は煙をふきながら見下ろすように光星に言い捨てた。

「そのうちその**No.5**の背の高い金髪クンにも抜かれるんじゃないのか？一体お前は【Pegasus】で何をやってたんだ？」

「……」

次々と鋭い言葉を浴びせる聖に、普段饒舌なあの光星が何も言い返すことができず歯を食いしばりながら黙っている。

それを横で見ていた羽月は、内心のハラハラがおさまらなかつた。

「聖！ いい加減にしろ！ お前は一体何がしたいんだ！？」

天馬がそこに割って入る。

「天馬、俺はここの現状をストレートに言ったまでだ。このままじゃ【Pegasus】はさらに上に伸びない……内心お前もそう感じてはいるんじゃないのか？」

「……」

「まあ無駄話はこれくらいでな。今日はお前にちょっと相談があつて来たんだ」

聖はそう言うと、スッとソファに腰をおろした。

「俺に相談？」

「ああ。これは【Pegasus】にとってもいいと思ってな」  
脚を組んでソファにもたれかけた聖は、改まったように口を開いた。

「単刀直入に言うわな。天馬、俺をここに置いてくれないか？」  
「なっ!？」  
思いもよらない聖の発言に、天馬を初めとする【Pegasus】の一同が驚きのあまりざわめきたつ。  
しかし、天馬や翔悟でさえも驚きを隠さない中、翼だけは冷静に彼の次の言葉を待っていた。

「聖、どうゆうことだ？詳しく聞かせろ」  
天馬が聞き返すと、聖はすぐに答えた。

「天馬もわかっているだろうが、今【Unicornis】はガサが入って営業停止を食らっている。どうなるかはわからんが、俺は恐らくもう営業するのは難しいと考えてるんだ。しかし、俺が最も心配なのはそんなことじゃない。さっきお前が話しかけていた"アリスの子"とやらのことだ。この店から妙なモノを流した奴がいたせいで、俺はホストとして動けないんでな！」

聖は天馬を鋭い目で睨みながら言い放った。

「おかげで、店はおろか俺の客足にまで影響が出てるんだよ。だったら、俺をここで仕事させてくれることぐらいななきゃ割に合わねえよな？天馬よ」  
「聖……」

「"アリスの子"のことだって手を貸すし、それに俺がここに客を呼べば売上にもなるんだ。悪い話じゃねえと思うが？」

自信満々に話す聖は、光星に視線を向けた。

「まあ、後輩いびりにのさばって売上が伸びないどっかのホストよりは俺がいた方がいいだろ」  
「……！」  
聖の嫌味があった言葉に、光星は眉を引き攣らせた。

「どうだ天馬、もちつもたれつ……俺をここに置いてみろよ。何より、俺のホストとしての実力はお前が一番わかってるはずだ」  
そう言うと、聖はスッとソファから立ち上がった。

「言いたいことはそんだけだ、邪魔したな。まあ、お互いのためにも...ちゃんと考えといてくれよな」

そう言って、聖は【Pegasus】一同の前から颯爽と姿を消していった。

「何なんだよ、あの人」

「社長の元ライバルか知らないけど、あんな横暴な人がこの店に来るなんて」

「でも、"アリスの子"って.....？」

「みんな、聞いてくれ」

ホスト達がざわめく中、天馬は意を決したように口を開いた。

ホスト達も一瞬で静まり返り、その耳を彼に傾ける。

「今から俺が話すことは、みんなのホスト生命や店の存続にも関わることだ。お客はもちろん絶対に関係のない人間に他言するな」

ホスト達がうなずいたのを確認すると、天馬は一息ついてから事の顛末を話し始めた.....

約10分後—

天馬から語られたことを耳にしたその場にいた全員が、驚きを隠せなかった。

「そんなものが.....」

天馬の横にいる普段冷静な佐伯も、今思っていることをうまく言葉にできずにいた。

事情を知る翼を除き、翔悟を初めとするホスト達全員も何一つ言葉を発することはなかった。

しかし、そんな重苦しい雰囲気在必死で破ったのは翔悟だった。

「社長、聞いてもいいですか？」

「何だ翔悟？」

「その.....星羽会って宗教の生き残りってのが、本当に俺達の中にいるんですか？」

「正直なところ、俺にもわからない。ただ、その"St.Alice"ってやつの存在で【Unicornis】がやられたって事実がある以上、俺達もみんなに話して知ってもらうしかない.....そう思ったんだ。

そしてー」

天馬は一度呼吸を調えるために息を呑んだ。

「何より、お前ら一人ひとり全員がこの【Pegasus】の大切なキャストだ。この中に"アリスの子"って奴がいると、俺は信じたくない」

経営者として事実を話さなければならない辛さを必死で噛み締めるような天馬の口調が、事情を深く知る翼にはとても痛いほど滲みていた。

いずれ知ることになったとはいえ、少なからず従業員同士の間を生じ始めている疑心暗鬼が、天馬と翼には重々しく見えてならなかった。

その中で、羽月の正体を唯一知る翼は、気付かれないように彼の様子を伺っていた。

他のホストと同じように、羽月は驚きながらおろおろとしていた。

『俺への態度の変化もだが.....あの驚きは演技しているのか？それともみんなと同じように本当に驚いてるのか.....??』

翼の中では、星羽会信徒の生き残りという意味での羽月への疑心暗鬼が、ますます深まっていた。

しかし、生き残りとはいえ本当に羽月が"St.Alice"を流している"アリスの子"なのだろうか...？天馬と同様、翼の中では信じたい相手に対して理不尽な疑いを向けてしまっていることに、苦悩を感じずにはいられなかった。

ミーティングが終わり一同が解散した後、翼は一人天馬がいる店の奥の事務所へと足を運んでい

「社長、翼です」

「おう、入れ」

「失礼します」

翼はドアを開け、事務所の中へと入っていく。

「お疲れ様です」

「今回ばかりは、俺も頭を悩ませたよ。店の責任者として、あれは正しかったのかってな」

「ええ。あ、美空ちゃんのこと伏せてくれて、ありがとうございました」

「なあに言ってんだ。あの子は何も悪くないし、女性のプライバシーを守るのは尚更当然のことだろう」

疲れていても、女性への気遣いは絶対に忘れない……天馬のそういったところに、翼はあらためて感心をしていた。

しかし、それにより翼が天馬に今話そうか迷っていた羽月の正体を留める結果となった。羽月の正体を言えば、愛菜の正体から彼女の辛い生い立ちまでをもしずれ口にしてしまうことになる。

彼女のプライバシーを考えてか、翼はそれらのことを胸の内に留めておこうと考えていた。

『それにしても……愛菜は一体どうしたんだろう？』

美空のところで別れて以来音信不通になっている愛菜への気掛かりが、翼の中での一抹の不安を時間とともに膨らませていった。

一方

羽月はひとり大久保にある、とあるマンションの一室の前にいた。

「……」

羽月は無表情のまま、その一室のインターフォンのボタンを押す。

鳴り響く電子音とともに、その部屋のドアはすぐに開いた。

「よう」

部屋のドアから顔を出したのは光星だった。

「光星さん、お疲れ様です……」

「入れや、羽月」

「はい……失礼しますう」

羽月は、小さな声でそうつぶやきながら光星が導くその部屋の中へと入っていった。

「ちきしょおおっ！！」

光星は異常なほど荒れた口調で声を上げながら、床にあるごみ箱を蹴り飛ばした。

「ちきしょおちきしょおちきしょお～何で俺がこんな惨めな思いしなくちゃなんねんだ～！！」

「光星さん、落ち着いて」

「おい羽月！」

「はい……」

「これが落ち着いていられっと思うかぁ！？翼の野郎に抜かれただけでなく由宇にまで抜かれて……そのうえお前にまで抜かれるって、全員のいる前であそこまではっきり聖さんに言われたんだぞゴラァ……」

光星は、右手に持つウィスキーのボトルの注ぎ口を度々口に運んでは、呂律の回らない口調で言い散らした。

すると光星は、別室のドアをギョロリと横目で睨み据える。

「こんなときは……ウサ晴らししねえとなあ」

フーフー息を荒げながら、光星は別室のある方へとズカズカ歩いていく。  
その様子を見ている羽月は、目をつむりながら苦しそうに顔を背けた。

『もうやめたってくれ……』

羽月は心の中で力なくそうつぶやいた。

しかしその願いは届かないのか、彼の中で悪夢とも言えるその光景は、別室の中で再び再現されようとしていた。

「イヤ……やめて……」

僅かに開いた別室のドアの向こうから、か細いまでの一人の女性の声が力無く羽月の耳に突き刺さる。

「イヤ……」

「イヤじゃねえんだよ、黙れこのホスト狂いが。おい羽月聞こえるか！？お前も来い！」  
光星の言われるがまま、羽月は声のする別室へと向かってゆっくり足を運んだ。

一歩……また一歩が、今の彼にはあまりにも重く感じられた。

「……」

無言でその部屋の中へと入る羽月の視界に映ったのは一

羽月は再び顔を背けた。

常夜灯で薄暗く照らされた部屋の中、セミダブルサイズのベッドの上では一人の全裸の女性が既に半裸になった光星の身体に覆いかぶられていた。

彼女の両腕はロープで拘束され、衣服や下着は部屋中に散乱するように無残なまでに落ちていた。

ぐしゃぐしゃに乱された巻き髪・色白く華奢なまでも豊満さを見せる抜群のスタイル……  
そして、涙を流しながら虚ろにどこかを見つめるその女性は、数日前に突然音信不通となっていた愛菜だった。

「やめて光星……」

「ああ！？気安く呼び捨てすんじゃねえ！！」

光星は、涙で濡れる愛菜の頬を強く叩いた。

それに伴い、「バシッ」という強い音が部屋に響く。

「何で、何でこんなことするの……」

力無く言葉を漏らす全裸の愛菜を見て、光星はニヤリとしながら答える。

「愛菜さんよお……あんたがそんなことを聞く必要はないんだよォ！」

光星はそう叫びながら、露になっている愛菜の乳房を右手で強く掴んだ。

「痛いっ！やめてお願い……」

愛菜の言葉も虚しく、光星はその手を彼女の下半身の方へと移した。

「はっ……何だよこのアマ。やっぱり相手が翼の野郎じゃねえとあんまし濡れねえってかよ」  
光星のまさぐる手の強さは、次第に強くなっていった。

「やめて……やめてえ……」

「まあしかしよお……性格はともかく、さすがカリスマキャバ嬢……いい身体だぜ」

光星は揺れる愛菜の乳房をベロリと舐め上げると、直ぐさま自らの下半身を彼女のそれへと沈めた。

「ヤッ……イヤあああ……！」

「いい声だな愛菜よお～！」

酒で酔ってままたまらない動きの光星が相手でも、腕を拘束され身動きがとれない愛菜は、なされ

るがまま貪りつくされていった。

そんな鬼畜のような残虐極まりない光景を、羽月はうつむきながら黙っていた。

数分後一

愛菜を相手に行為を終えた光星は、ベッドに座り込みながら煙草を吸っていた。

その脇で、光星の唾液などの液体にまみれた全裸の愛菜は、バンザイをしているかのような仰向け姿で虚ろな瞳を天井へと向けていた。

「.....」

愛菜は、何も言うことなく微動だにすることもなかった。

ただ、弱々しく息を切らせ、無理矢理ほてらされた身体の熱を冷ませるのに努めていた。

「はぁ～今日もいい味だったぜ。オイ羽月！てめーちゃんといろのかよ！」

「.....はい」

下品に言い散らすように声を上げる光星に、羽月は小さく返事をする。

「あー気持ちいいぜ。この女の身体は病み付きだなオイ」

「.....」

「羽月聞いてんのか！？」

「聞いてます.....」

「おい、お前もイケよ」

「.....はっ？」

羽月は自分の耳を疑った。

しかし、光星はすぐに口を開いた。

「お前もそのアマでイケつつったんだよ」

「な、何やて……」

「お前、この女好きなんだろ？だったら今のうちにヤツとけよ」

「そっ、光星さん……！」

意識が朦朧としながらも二人の会話を耳にしていた愛菜は、チラリと羽月のことを見た。

『羽月くんが……あたしを……？』

愛菜のそんな思いをよそに、彼らの会話は続いた。

「これは俺からの絶対命令ってやつだ。やれ羽月」

「そ、そんな」

羽月はチラリとベッドの上の愛菜に視線を向けると、彼女と目が合った瞬間すぐ背けた。

「で……」

「あっ？何だ？」

「できへんそんなこと……」

「ああ！？」

「光星さん、もうやめてやこんなこと」

羽月は、普段の明るさを全て押し殺したような声で光星に言った。

だが、起き上がった光星はその言葉を受け入れるどころか、恐ろしく歪んだ表情で羽月のもとに近づいた。

そして、羽月の襟首を掴み、ギロリと彼の顔を睨んだ。

「羽月よお……俺あ言ったよなあ？逆らったらばらすってよ、お前の正体がー」

「光星さんっ！」

「星羽会の生き残りだってなあ！！」

光星がそう言い放ったとき、愛菜は目を大きく見開いた。

「羽月くんが星羽会の……？…本当に……??」

愛菜がそうつぶやいた瞬間、光星はニヤリとしながら愛菜に言った。

「そうさ、こいつ.....羽月は今"アリス"騒動で有名な星羽会ってあぶね一宗教の生き残りなんだよ！愛菜さん、あんたと同じでな！」

光星のその言葉を聞いた瞬間、羽月は目を丸くして二人を見比べた。

「何やて？愛菜さんが.....星羽会の.....！？」

「そうさ羽月！あの女にもそうゆう生い立ちがあんのさ！」

「光星さん.....何で、何でそのことを知ってるんや？」

「それはな.....これよ」

光星は、透明な液体が入った一つの小ビンを取り出した。

「何やそれ？」

羽月が問いかけると、光星は狂ったような笑みを浮かべながら答えた。

「今流行りの....."St.Alice"ってやつさ！」

「なっ！」

「.....！」

それを聞いた羽月と愛菜は、一瞬で表情を蒼白色へと変えた。

「光星さんそれは！」

「ちょっといただいたのさ....."アリスの子"て謎の人物に。おかげでいい気分だぜ」

「そ、そんな.....」

羽月は、恐ろしい悪魔でも見るような目で光星を見た。

彼の口調や目付きが普段と比べて尋常ではないことは薄々と気付いていたものの、彼の心はありえないような恐怖に徐々に襲われ始めていた。

「羽月、あの女をやれ！」

「い、嫌や.....。やっぱりこんなのー」

その時、光星の拳は直ぐさま羽月の顔面を鈍い音とともに捉えていた。

「うがっ！」

声を上げると同時に、羽月は部屋の床にバタンと倒れ込む。

「羽月くんっ！やめて光星……！」

愛菜は小さい声で叫ぶも、もはや狂い始めた光星の耳には届いていなかった。

「羽月、ヤれ」

ドスを効かせた光星の声の前に、羽月はゆっくりと立ち上がった。

「嫌や……」

「あっ？」

「俺、自分のことばらされんのが怖くて怖くて、ずっと光星さんの言うこと聞いとったけど……  
それだけは嫌や」

「羽月」

「愛菜さんが目の前でこんなになつとるのに何もせんと見とった俺が今更言うことちゃうけど…  
…俺、やっぱり愛菜さんも翼くんも大切やから、それは……」

羽月がそう言うのと、うっすら目付きを細めた光星が彼にゆっくり……ゆっくり歩み寄る。

「うがあっ！」

光星が羽月のみぞおちや顔を踏み蹴り始める。

その度に、羽月の痛みに充ちた悲鳴が部屋中に響き渡る。

「俺に逆らう気か羽月よお！星羽会の生き残りのくせによお！」

光星は止まることなく、倒れる羽月を蹴り続けた。

しかしその時だった。

「やめてっ！」

愛菜が最後の力を振り絞ったかのように、悲痛な叫びをぶつけた。

「お願い……やめて。私ならいいから……羽月くんともするから……お願い、彼をいたぶるのは  
、もうやめて……！」

愛菜は涙を流しながら光星に訴えかけた。

光星も蹴る足を止め、長い髪の毛を掻き分けながら細い目で彼女を見ている。

「ゲホッ……ゲホッ……」

口から少量の吐血をしながら、羽月はよろりと倒れた身体の上体のみを起こした。

「愛菜……さん」

「羽月くん、私を抱きなさい……」

「でも……」

「光星、言うこと聞くから……これ以上彼をいたぶるのはやめて……」

力無い愛菜の言葉に、光星はニヤリと笑った。

「じゃあわかったな、ヤれ羽月！」

10分後—

光星に服を剥ぎ取られた羽月は、涙を流しながらその裸の長身の正面をベッドの上の愛菜へと向けていた。

向かい合う裸の愛菜も、その瞳から涙を溢れさせながら彼のことを受け入れた。

ただ無言で互いの身体を絡め合う二人は、

互いが十年前に生き別れた肉親だとは知ることもなく

虚しく傷つけ合うだけの行為を、その身体で繰り返した。

その光景を、光星は酒を浴びながら、心行くまでの醜い笑いを上げながら観賞に浸り続けた。

そんなあまりにも狂いすぎた夜の宴は、

互いの涙で身体を濡らす、果てた裸の姉弟の倒れた姿で終焉を迎えた。

『愛菜サン、翼クン……ホンマニ……ゴメンナサイ……』

第25章へ

翌日の午後一

翼は、手に持った自らのケータイをただじっと見つめていた。

『愛菜、何かあったんだろうか』

あれから何度となく連絡しても彼女からの応答が無いことに、翼は不安と疑問を抱き始めていた。

「いくら何でも、おかしいよな。そうだ」

次第に愛菜の音信不通を怪しくさえ思い始めていた翼は、一つの考えを思いついた。すると、すぐにケータイを操作し通話へと入っていく。

「あっ、社長ですか？おはようございます、翼です。今日の出勤を少し遅らせていただきたいんですが、いいでしょうか？実はちょっと……」

翼は、電話にて天馬にあることを頼み始めた。

一方一

悪夢のような夜が明けた光星の自宅マンションでは、ベッドの手摺りに腕を繋がれた全裸の愛菜と羽月が、弱りながら横たえていた。

そんな二人を嘲り笑いながら、光星は出勤の準備へと勤しんでいた。

「たくよお、昨日は派手に遊びすぎたから頭痛いぜ」  
ブツブツとそう言いながら、長い黒髪を掻き分ける。

「光星さん……」

羽月が力無いかすれた声で言った。

「ああん？何だよてめえよお」

光星が面倒臭そうに羽月を睨むと、彼は鉛のように重たく感じるその身体を何とか起こした。

「何で……何でこんなことすんねん。俺、光星さんの言うことちゃんと聞いてきたやんか……」  
羽月がそう言うと、光星は「ハァ」とため息をつきながら答える。

「俺はな、お前らみたいな星羽会の奴らが嫌いなんだ」

「えっ??」

「聞こえねえのか？俺はおまえら糞信教の人間が嫌いだったんだよ」  
光星は、鋭い目付きで睨みながら羽月に言い放った。

「何で、何でやねん。何でそこまで星羽会を憎むんや？それに……何で**"St.Alice"**を??」

「……」

羽月が声からがらに問いただしても、光星はそれ以上何も答えなかった。

「ん？」

その時、光星は自分の足元に一枚の写真が落ちていることに気がついた。

「何だ、この古そうな写真は？ガキが二人写ってるけどよ」

光星は写真を拾い、それを不思議そうに見つめた。

そのことに気付いた羽月は、ハッと目を大きく開いた。

「光星さん、それは……！」

羽月が慌てながら言うと、光星は、その写真が彼のものだということにニヤリとしながら気付いた。

「何だ、コレお前のか。こんなボロい写真を何で持ってんだあ？」

「お願いや、それだけは返して欲しいんや！」

「ふーん」

光星は写真をあらためてじっと見つめた。

しかし、その最中に意識を失っていると思われた愛菜も、二人のやり取りをひそかに見ていた。

『あの写真！何で？何で羽月くんが……??』

愛菜が心の中でそう呟く中、光星は写真をジャケットの内ポケットにしまい込んだ。

「なっ、光星さんそれ返してやっ！」

「うるせんだよ星羽会の生き残りがっ！へっへ……面白そうだから俺が預かっつくぜ。じゃあ、俺は店に行くからな。変なマネするんじゃないぞ、わかったな」

光星はそう言い捨てると、拘束された羽月たちのいる部屋の中から姿を消していった。

「くそっ……何でや、何であんなことするんや」

羽月は目に涙を溜め、その悔しさやもどかしさを重くのしかかる沈黙へとぶつけた。そんな彼を、となりにいる愛菜は、視線を悟られないように静かに見つめていた。

一方

午後7時をまわった頃、翼は歌舞伎町のとあるビルの前にいた。

「たしか、ここの7Fだな」

翼は、直ぐさまそのビルのエレベーターへと乗り込み、目的である7Fへと上がっていった。

到着すると、翼は黒と白を貴重とした気品に充ちた扉を目の前にしていた。

「【Club Mirror】……ここか」

すると、扉は自動的に右へとゆっくりと開いていった。

「いらっしゃいませ、お客様」

開いたドアの奥から、すかさず黒服らしき男が出て、翼を迎える。

「あの……一人なんですが、今は大丈夫ですか？」

「はい、ただいま席の方がまだ空いておりますので、すぐにご案内致します」

翼は直ぐさま愛菜のことを黒服に尋ねようと思ったが、それだけでは失礼と思わずは客として【Mirror】の店内へと入ることにした。

黒服に席を案内されると、翼は黒色のソファへと腰をおろした。

『久しぶりのキャバクラだな。会社の接待以来か』

翼はそんなことを考えながら、渡されたおしぼりを手にしつつ辺りを軽く見渡した。

そこは、【Club Mirror】という名前の通り、壁が一面鏡ばりにされた、【Pegasus】とは違う意味で現実とは掛け離れたような不思議な空気間を漂わせていた。

一見会社の経営者や重役とも思われるような客層には、見事なまでにドレスアップしたキャスト達が笑顔とスタイルを武器に接客に勤しんでいる。

それらの雰囲気からとれる完璧さが、同じ水商売に携わる翼には、そのレベルやクオリティの高さが肌で感じられていた。

『愛菜、ここでNo.1を張っているの...』

翼はひっそりとそう思った。

すると、黒服の男がアイスやマドラーなどをせっせとテーブルにセットする。

「お客様、本日キャストの御指名などがありますでしょうか？」

黒服が翼に尋ねる。

「えっと、愛菜さんて人に会いたくてきたんですが、今日は出勤されてますか？」

翼がそう答えると、黒服は一瞬険しそうな顔を見せる。

「申し訳ありません。愛菜さんは、本日こちらに出勤されていません。他のキャストもおりますので、そちらでー」

「お休みなんですか？」

翼が黒服の言葉を遮ると、彼は翼の全身をサッと見渡す。

翼の容姿を見て明らかに「ホストである」と半ば認識した黒服は、あらためて口を開いた。

「お客様、大変失礼ですが愛菜さんとはお知り合いか何かで？」

「はい、昔からの友人で。あの、愛菜さんと何日も連絡が途絶えているので、それで心配に思っ

てお伺いしました。あの、彼女は今こちらには？」

「.....少々お待ち下さいますか」

翼の言葉を聞き、黒服はその場からスタスタと去っていった。

『愛菜.....』

そう考えながら俯いている翼を、黒服は離れたところから店長と彼のことを見ていた。

「店長、あのお客様ホストですよ」

「ああ、そこまで派手ではないが間違いないだろうな」

「営業かもしれませんし、帰っていただきましょうか？」

「うーむ.....」

二人がそう話していると、そこにスラリと背の高い、ホワイトのドレスに身を包んだ一人のキャストがやってくる。

「店長、あたしをあの人の所につけてくれませんか？」

「凜(リン)が？」

凜と呼ばれた一人のキャストは、まっすぐ翼を見つめた。

「店長、いいですよ？」

「うんわかった。凜、頼むな。どうやら愛菜指名みたいなんだが」

「はい」

凜は、フワツとしたその巻き髪をなびかせながら、黒服に連れられ翼のもとへと向かった。彼女が自分のところに近づいていることに、翼も気付く。

「ご紹介します、凜さんです」

黒服が翼に対して紹介をすると、凜はニコリとほほ笑んだ。

「はじめまして、凜です。お隣り失礼してもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

「じゃあ、失礼しますね」

翼が凜を隣に促すと、彼女はゆっくりとソファに腰をおろした。

そして、黒服が去ったのを確認すると、凜は翼に話し掛けた。

「はじめまして。【Pegasus】の翼さんですよ」

「はい。何で僕のことを？」

翼が聞き返すと、凜は小声で再び話し始めた。

「愛菜さんのことで、ここにいらしたんですよ？私もって言うかお店もですが、ここ数日間愛菜さんが行方不明なのをとっても心配していたんです。家電はもちろん、ケータイに連絡しても出ないし……」

「愛菜、こちらへの出勤にも出てないんですか？」

「はい。あの仕事にプロ意識の高い愛菜さんが無断欠勤するなんて、私達には考えられないことなんです。ましてや愛菜さん、うちのNo.1だし」

凜は一変して、不安げそうに翼に言った。

「そうだったんですか」

翼はため息と同時にそうつぶやく。

そんな彼を見てか、凜は再び口を開いた。

「やっぱり、聞いていた通りの人ですね」

「えっ？」

「翼さんは忙しくて気付いてなかったかもだけど、あたし【Pegasus】では羽月くんの指名客なんです」

「羽月の……？」

翼は、思いもよらない話に驚く。

凜は続けた。

「はい。あたし人見知りだから、初めて【Pegasus】に遊びに行ったとき、ホスト初めてのあたしに、とっても優しく気さくに接してくれたのが羽月くんでしたあ。あの子、ちょっとおっちょこちょいだけど、根はとっても純粋で」

凜はどこか切なそうに笑うと、再び続けた。

「羽月くん、ついこないだも言ってましたよ。翼くんはとってもいい人や～って。だから、あたしも愛菜さんが指名してるあなたには、興味があったんです。あの人や羽月くんが認める人だっことが、今は何となくわかる気がします」

「そうですか、羽月のやつが……」

その時翼は、最近の羽月の態度の異変について思い出していた。

羽月の自分への直接の態度と第三者へ話している自分のことの話の内容で明らかな差異があることに、翼は沸き上がる違和感を抑えられなかった。

「すみません、せっかく来てくれたのに力になれなくて」  
凜は、【Mirror】店内から帰ろうとする翼に申し訳なさそうに言った。

「いえ、こちらこそありがとうございました。羽月のこと、これからもよろしくお願いします」  
そう言って店を出ようとした翼の視界に、壁にかけられた一枚の写真が映る。

『これは……』

飾られたその写真を見ると、そこには漆黒のドレスに身を纏った、愛菜にも勝るとも劣らぬほどの美しい一人のキャストの姿が写っていた。

微塵も笑うことなく、一切の漆黒に充ちた瞳のその彼女に、翼はいつしか吸い込まれるように見入っていた。

「凜さん、この人は？」  
翼が尋ねると、凜はふと切なげな表情をして答えた。

「前にうちのお店で愛菜さんに負けないくらいすごい人気だった女の子です。もう亡くなってしまったんですが、"明衣"さんっていうんです。ファンだったお客さんの希望もあって、ここに写真だけ飾ってるんです」

「そうだったんですか」  
翼は、あらためて"明衣"という名前の少女の写真を見つめた。

『この人が明衣さん……愛菜が教会で言っていた』

どこまでも続くような"彼女"の瞳の深い闇に、翼はまるで自らを映す本当の"鏡"でも見ているか

のような不思議な感覚を覚えていた。

時間は20時半過ぎー

【Mirror】を後にした翼は、【Pegasus】へと遅れての出勤をしていた。

「社長、おはようございます。すみません、お時間いただいてしまって」

「おう、お客さんが待ってるぞ。【Mirror】の方はどうだった？」

「いえ、愛菜は店にも出てないらしいです」

「そうか……。それと翼、お前羽月のこと知らないか？あいつ今日無断欠勤で、連絡しても音信不通なんだ」

「いえ、俺は何も聞いてませんが……??」

「一体あいつにも何があったんだ。とにかく、お前はフロアの接客に行け。俺はもうちょっとあたってみる」

天馬にそう促され、翼は指名客の待つテーブルへと足速に向かった。

「翼おそーい！」

少し待ちくたびれた感の梨麻が、頬を膨らましながら翼に詰め寄る。

「ゴメン梨麻、ちょっと用事が長引いちゃって！」

翼が申し訳なさに言うと、梨麻は表情をニカッと笑顔に変える。

「じゃあ、今日も飲もうっ！」

翼と梨麻は、互いのグラスを交わし笑顔で酒を口に運んでいった。

しかし、愛菜に続き羽月までが音信不通になった今、彼の心中は穏やかなものではなかった。

そして、それから15分たってのことだった。

「ガシャーン」という激しい音が、店内のどこかからか響き渡った。  
それと同時に、女性の悲鳴らしき声が雑じっている。

「何だ!？」  
何事かと反応した翼は、すぐに立ち上がり音のした方へと向かった。

「翼くん」  
小走りで移動する翼に、由宇が声をかける。  
「由宇さん、この音は一体？」  
「多分奥の方の卓だね」  
その時だった。

「キャー!!!」  
女性客の悲鳴が、さらに店内にいるすべての人間を凍り付けさせようとしていた。  
「行こう」  
由宇に促され、翼は足速にその悲鳴とざわめきのたっているところへと向かっていった。

「なっ!？」  
足を止め絶句した翼が目にしたのは、ひっくり返ったヘルプ椅子やテーブル・散乱したアイスや割れたグラスではなかった。  
倒れたテーブルや椅子を尻目に、光星がヘルプのホスト一人の襟首を締め上げていた。

「こっ、光星さん……やめてください……」  
「うるせえんだよてめえ」  
光星はヘルプホストをものすごい形相で睨みながら、ドスの効いた声を放った。

「キャーッ!!!」  
「な、何なのよおコレエ!」  
その周囲にいる女性客たちが、怖々と光星達の方を見つめている。  
その中には、光星の指名客である果穂の姿もあった。

「ちょっと光星、どうしちゃったのよお！」

果穂がそう言うと、光星は彼女の方を振り返りギョロリと睨みつけた。

「うるせえっ！！」

「ちょ……光星……！？」

荒れた光星の態度に、果穂の瞳にうっすらと涙が浮かび上がる。

すると、そこに佐伯と翔悟も駆け付ける。

「お客様、大丈夫でしょうか！？光星、お前何をやってるんだ！！」

佐伯がそう言いながら近づくと、その瞬間、光星は彼の腹部に強烈な足蹴りを入れる。

「ぐあっ！」

佐伯は腹を抑えながら床へと倒れてしまった。

「キャー——！！」

「イヤアァァ！！」

果穂をはじめ、その周囲にいる女性客たちの悲鳴が再び上がる。

そこへ、たまりかねた翼と翔悟が割って入る。

「光星さん、あなた何を！」

「光星、お前何てことしてんだよ！！」

翼と翔悟が同時に叫ぶと、光星は二人を交互に睨みゆっくりと口を開いた。

「翼あああ！てか、翔悟さん……あんたもこいつの片を持つってかあああ」

「！？何言ってんだよお前。どうしちゃったんだよ光星お前！」

「うるせえええ！！」

すると、光星は目の前で訴えかけるように翔悟を突き飛ばした。

「うわあああっ！」

翔悟は左肩から床へと激しく激突するように倒れ込む。

「翔悟さんっ！」

由宇が倒れ込む翔悟を抱き起こす。

「痛っ……！！」

翔悟は激しく生じた痛みを堪えるように左肩を右手で抑えた。

「翔悟さん、まさか……！」

「あの野郎、本気でやりやがって。どうゆうつもりだ！」

翔悟は苦渋の表情を浮かべながら、まるで突然現れた悪魔のように豹変した光星を睨んだ。

その光星は、その悪魔のような視線を目の前に立ちはだかる翼へと向けていた。

「光星さん、あんたどうしてしまったんだ！ここはホストクラブ、お客様の女性たちが楽しく過ごす場所だろう！」

周囲が騒然唖然とする中翼が鋭い目付きでそう言い放つと、光星はニヤリと不敵な笑いを浮かべた。

「何がおかしいんだ？」

「翼アァ…お前も偉くなったよなあ」

「？」

「あの失態ばかり繰り返してたクズホストのお前がよォォォ……今や**No.1**だもんなあオイオイオイ」

「……光星さん、あんたどうしちゃったんだ……？」

「うるせえよ」

「あんたは確かに嫌な性格だけど、ホストの仕事はちゃんとかなしていた！なのに、果穂さんたちがいる前で、突然どうゆうつもりなんだ！！」

「果穂オォォ？」

すると、光星はソファから自分のことを恐る恐る見ている果穂の方に目をやった。

「光星……」

果穂は涙声でつぶやいた。

「果穂ちゃん……！」

その光景を、離れたフロアから騒ぎを聞き付けやってきたやってきた梨麻達他の女性客やホスト達も息を呑みながら見ていた。

するとその時だった。

光星は突然果穂に飛び掛かり、彼女の首を締めにかかった。

「キャアアァー！！」

周囲が再び悲鳴を上げる中、光星の手はみるみるうちに果穂の首にめり込んでいく。

「あっ……」

「一々うるせえんだよこの風俗嬢がよオオオ」

「やめるんだ！！」

翼は、果穂の首を絞める光星を背後から羽交い締めにした。

途端に、光星の絡み付いた手は彼女の首から思ったより軽い力でスッと離れた。

「かはっ……ゲホッ……」

苦しげに激しく咳込む果穂。

そこにたまり兼ねた梨麻が駆け寄る。

「果穂ちゃん！」

「ゲホッ……梨麻……」

「果穂ちゃん、大丈夫…？」

「梨麻……あたしい……」

いがみ合っていたはずの果穂と梨麻は、お互い涙を浮かべながら抱き合った。

「ちくしょオオオ話せエエエ！」

獣のように暴れ狂う光星により、羽交い締めしていた翼は吹き飛ばされた。

「ぐっ！」

翼は仰向けに倒れるが、すぐに上体を起こす。

「翼くん、大丈夫か？」

「由宇さん……ええ俺は何とか。だけど翔悟さんや佐伯さんは…」

翼と由宇は、床に膝をついて苦しんでいる翔悟と佐伯を交互に見つめた。

二人とも回復しつつあるものの、未だ復活は望めていない状態なのは誰の目から見ても明らかだった。

「んっ？」

その時、翼は光星のジャケットからひらひらと落ちていく一枚の何かを目にする。

『これは……』

翼は、床に落ちたそれをすぐに手に取った。

それを目にした光星は、その表情をギョッとさせる。

翼は、光星を睨みながらゆっくりとその場に立ち上がった。

「光星さん、何であんたがコレを持ってるんだ!？」

「……うっ」

翼がそう問いつめるも、光星は突然黙り込み何も答えようとはしなかった。

するとその瞬間、光星は床に転がっている円柱状のヘルプ椅子を翼へと目掛けて投げ付けた。

「うわっ！」

椅子はガードした翼の腕へと直撃する。

その瞬間、光星はエントランスの方へと凄まじい勢いで駆けていった。

「しまった！」

翼はそうつぶやくと、右手に持ったそれを見つめた。

「翼くん、その写真は？」

由宇がふと翼に尋ねる。

「これ、羽月が大切にしていた写真なんです。あいつが絶対肌身離さずずっと持っていたこれを何故これをあの人が」

その時、翼の中にある一つの恐ろしい予感が沸き上がった。

『今日は羽月も音信不通で来ていない……。まさか!』

「どうしたんだ、翼くん!？」

「由宇さん、どうゆうわけかは知りませんが、羽月は今光星さんのところにいるかもしれない！ずっと肌身離さず大切に持っていたこの写真を、あいつが手放すはずがないんだ！」  
すると、翼は写真をジャケットの内ポケットに入れる。

「翼くん、どうするつもりだ？」

「由宇さん、俺は光星さんを追います。お客様が楽しんでる空間を壊したあいつを、俺は絶対に許せない。それにー」

「それに？」

「あいつを連れ戻さなきゃ」

翼はそうささやくと、寄り添い合っている梨麻と果穂のところへと歩み寄った。

「梨麻ちゃん……果穂さん、大丈夫ですか？」

「翼くん……」

翼が優しく声を掛けると、二人はゆっくりと頷いた。

「よかった……。こんなことになってしまって、本当に申し訳ありません。ホストの代表としてお詫びします。梨麻ちゃん、果穂さんと一緒にいてあげて」

すると翼は、すぐに立ち上がり周囲に向かい、

「お客様方、大変騒がせてしまいまして、誠に申し訳ありませんでした」

と言い、深々と頭を下げた。

それを見てか、翔悟や由宇達他のホスト達も頭を下げ、謝罪の言葉を女性客へと発していった。

「佐伯さん、大丈夫ですか？」

「翼……。何とか大丈夫だ」

「社長は今は？」

「天城さんに呼ばれて今はタイミング悪く出てるんだ。どうした？」

「光星さんの自宅住所を教えてください。そこに今羽月もいるかもしれないんです！」

「……事情はよくわからんが、今さっき用意しておいた」

佐伯は一枚のメモ用紙を翼へと手渡した。

「それが光星の住所だ。お客様には言っておくから、みんなの代わりに行ってこい！社長にも連絡しておく」

「佐伯さん、ありがとうございます」

翼はメモを受け取り、エントランスへと走っていった。

「翼っ！」

エントランスに行こうとする翼に翔悟が声をかける。

「翔悟さん」

「何か事情はよくわからんけどよ……あいつのこと、一発くらいぶん殴ってこいよな」

「翔悟さん……その分店とお客様を由宇さん達と一緒に頼みます」

「へっ、えらそーに言いやがって」

翼と翔悟はフツと笑い合った。

「じゃあ、ちょっと行ってきます！」

去っていく翼の背中を、翔悟はじっと見つめていた。

『あいつ……ほんとに最初とは比べものにならんほど成長したんだな……』

そんな思いを抱き、翔悟は去っていく翼の背中を見守っていた。

翼は走った。

光星の逃げる先へ。

羽月と愛菜が囚われている一つの場所へ。

自分が長い間ひた隠しにしていた心の中の熱いものが

彼をひたすら前へと動かしていた。

しかし、この時翼は気付いていなかった。

これら一連の騒動こそが、"アリスの子"が仕組んだものだということに。

そして、この後待ち受ける先で起こる凄惨な結末を

コノ時、誰モガ予測スルコトハナカッタ。

第26章へ

「はあ……はあ……」

【Pegasus】を出た翼は走り続けていた。

暴れた光星の逃げる先へ。

そこに、姿をくらました愛菜と羽月がいると信じて。

ただ心の奥底にある何かを求めながら、翼は必死で走り続けた。

『愛菜……羽月……』

二人のことを考えているその時、翼のスーツのポケットの中のケータイが振動し始めた。

「はいっ」

翼は着信元を確認することなく、その電話に応答する。

◆「翼か？俺だ、天馬だ！」

スピーカーから聞こえてくる着信元の声の主は天馬だった。

それを確認してか、翼の心の中が少しずつ落ち着いていくかのようにホッとしていく。

◇「社長、実はー」

◆「佐伯や翔悟たちから事情は聞いた。店に帰ったら、中があんなに荒れてたから何事かと思ったが.....まさか光星のやつがな」

◇「ええ」

◆「翼、お前今どこにいる？」

◇「職安通りを渡ったところです。光星さんの自宅の大久保のマンションまではもう少しかと」

◆「そうか。翼、お前まさか一人で行くつもりか？」

◇「.....はい」

◆「俺も聞いてる限りの推測だが、今の光星が何でああゆう状態になったか.....お前もわかっー」

◇「"St.Alice"...ですよね」

◆「そうだ。恐らく、あそこまで店を荒らすような破壊衝動に駆り立ててるのも、その薬の作用の一つだろう。お前はそんな状態の光星を相手にする気なのか！？」

◇「行って無事で済むとは思っていません.....。ただ、彼は羽月の大切な写真を持っていた」

◆「羽月のため.....か？」

◇「.....」

翼はここでしばらく沈黙を続ける。

◇「.....わかりません。ですが、もし光星さんが"St.Alice"を服用したのは、俺にも何か原因があるような気がしたんです。だからー」

◆「わかった。こっちは何とか持ち直したから、もう少ししたら後で俺も向かう」

◇「わかりました。社長、警察への連絡は？」

◆「とにかく、光星と話して全てが決着してからだ」

◇「はいっ！」

翼と天馬は、通話を切った。

すると、大久保の中を走っている翼の目の前に一際高いマンションが立ちはだかる。

「グラファール大久保.....ここだっ！」

するとその時、マンションのエントランスでヨタヨタと歩いている一人の長髪の男らしき黒い影の存在を翼は捉えた。

「あれは！」

身体をよろめかせながらオートロックを解錠しているのは、先程【Pegasus】の店内で暴れ狂っていた光星だった。

動揺しているのか、手をブルブル震わせながらオートロック解錠のボタンを押している。

「おっ」

パスワードが一致したのか、エントランスの自動ドアはゆっくりと左右に開いた。

光星に気付かれないようそれを陰から確認した翼は、彼が自動ドアの奥に入っていくのを確認すると、直ぐさまその後を追跡した。

「よしっ……ん？」

ゆっくりと気付かれないように忍び足でエントランスに入った翼は、自動ドアが早くも閉まり始めていることに気付く。

「待てっ！閉まるの早過ぎる！」

翼はその忍び足を急激に加速させ、間もなく閉まりかける自動ドアの奥に向かって全力疾走をしていった。

『間に合えっ！』

頭の中をそれ一色にして、翼は閉ざされる扉にホームベースに入る野球選手のように前から滑り込むように飛び込んでいった。

くるりと前方回転しながら翼は自動ドアの境を越え、ボタンと床に転げるように着地した。

「イテテテ」

尻もちをついた臀部を軽く撫でながら、翼はゆっくりと立ち上がる。

「エレベーター、エレベーターは？」

辺りを確認すると、エレベーターの階層サインの表示は、すでに2Fから3Fに上がっていると

ころだった。

「光星さんの自宅は9F……早く行かなきゃ！」

翼は焦る気持ちを何とか抑えるようにエレベーターが再び1Fへと戻ってくるのを待つことにした。

本当は非常階段で駆け登ってすぐにでも近づきたい気持ちが強かったが、9Fまでの距離と体力の消耗を考え、唇を噛みながらじっと冷静さを保つように努めた。

何より、この後何が起こるか分からないことを想像するだけで、無駄な体力消費はしてはいけな

いー  
翼は本能的にそう思っていた。

一方、追われていることを知らずにマンションへと帰ってきた光星は一

自宅のドアを開け、慌てながらそのまま中へと入っていった。

「はあ、はあ……ちきしょう翼の野郎があああ」

激しく息を切らせながら、彼はよたよたと部屋の中へと入っていった。

そして、すぐに別室へと入っていく。

「はあ……はあ……」

ガチャリとドアを開け入ってきた疲れ果てている光星の姿に、部屋の中で拘束されている全裸の愛菜と羽月は気付いた。

「光星さん、どないしたんや……？」

羽月が小さい声で尋ねると、光星はギロリと彼を睨みつける。

「な……」

「……？」

「ななななな」

「……！？」

「なななななんでもねえよ」

すでに呂律の回っていない光星を、羽月と愛菜は険しい表情で見つめた。

「光星あなたー」

愛菜が余力を振り絞るように口を開く。

「"St.Alice"を、どれだけ服用したの……？」

「ふ、ふ、ふ、ふざけんな」

愛菜が問い掛けても、光星は震えながら強がった答えをするだけだった。

「と、と、と、とにかくよお、【Pegasus】の奴らにばれちゃったらしくてよおおお」

「な、何やて？」

「お、お、お、俺ももう終わりだあああ。だからー」

すると、光星はズボンのポケットからスッとキラリと光る何かを取り出した。

それを目にした瞬間、弱りきった羽月と愛菜の表情はさらに蒼白へと化した。

「口封じがてら、おまえらにやここで死んでもらうぜえええ」

思ったより冷静に話す光星のその右手には、鋭利な形をした一本のナイフが握られていた。

「ちょ、ちょっと待ってや光星さん！何でそうなんねん！」

羽月がそう訴えかけるも、光星はニヤリとしながら黙々と動けない二人の方へと、一步一步ゆっくりと近づいていく。

ギシッ……ギシッ……と軋むフローリング床の音が、ありえないほどの恐怖に襲われる二人にとって、死へのカウントダウンのように迫っていた。

「光星やめて……」

「光星さん、冗談やろ！？」

愛菜と羽月が声を震わせながらそう言うと、光星は再びニヤリとしながら足を止める。

「冗談なんかじゃねえよおおお。俺はお前ら星羽会のクズどもをおもちゃみてえになぶった後に、ぶっ殺してやってみたかったんだよおお」

顔は笑っていても全く笑っていないそのどす黒い彼の瞳に、羽月と愛菜は彼が本気であることを察知せずにはいられなかった。

「何でや、何で俺らにこんな酷いことすんねん！俺らが何かあんたにしたんか！？」

「お前らに直接の私怨はねえええ。だがなあああ、俺は星羽会の奴らが憎くてたまんねんだよおお」

「何て……星羽会とあんたの間に何があったんや」

「お前に答える筋合いなんかねえんだよおお！」

「うわあっ！」

すると、光星は羽月顔を踏み付けるように足蹴にした。

羽月の顔に、苦渋の色が浮かぶ。

「やめて！こんなことはもうー」

愛菜がそう言うと、光星は今度は愛菜に対してその視線を向けた。

そして、露になっている彼女の乳房をわしづかみする。

「キャァァア！」

「この女……いい味だったがあああ……殺す前に切り取っちゃうか」

光星は、愛菜の胸を悪魔のような目付きで見下ろしながら、もはや人間とは思えない恐ろしい言葉をつぶやく。

「や、やめ……て……」

もはや抵抗する気力も体力もないのか、愛菜はただ恐怖に怯えながら涙を流すことしかできなかった。

「やめてや光星さん！もうやめてえや！」

「うるせえええ！すぐに一緒のところに送ってやるからよおおお、天国で二人で好き放題やりまくれやあああ！！」

光星は、逆手に持ったギラリと光るナイフの鋭い刃の矛先を、ついに愛菜の身体に向ける。

薄暗い部屋の中でもわかる刃の輝きは、恐怖におののく彼女の白く華奢な身体を今に貫こうとしていた。

「やめろおおおー！！！」

羽月が心からの絶望を叫んだ。

その時だった。

振り下ろされるはずだったナイフは、振り上げたところで動かずに止まっていた。

羽月と愛菜はもちろん、それはナイフを持つ光星すらも不思議さを隠せなかった。

「なっ？」

光星はナイフを持つ右手の手首の違和感と背後の人の気配に気づき、そこを振り返った。

「なっ……！」

手に持ったナイフが振り下ろされないのは当然だった。

何故なら、スーツ姿の一人の人物が光星の手首を掴んでいたからだった。

手首を握るその力は不思議と強かったのか、凶暴な光星が動かないほど強固なものだった。

「うおっ！」

気付いたときには光星は突き飛ばされ、床に「バタン」と転がり込んでいた。

「なあああっ！」

光星はすぐにムクリと起き上がると、自分を突き飛ばした人物を睨み据えた。

一方、羽月と愛菜は涙を流しながらその人物のことを見つめていた。

「翼……くん……」

弱々しい羽月の声に、どこか僅かな明るさが戻る。

「ツバサァァ！」

一方突き飛ばされた光星は、すぐに後ろを振り返りギロリと睨みつけながら、猛獣のような唸り声を発した。

そんな部屋の中の光景を、駆け付けた翼は冷静に見渡した。

『……』

転がっている家具や酒瓶、

散乱している衣服、

そして、ベッドの上で拘束されている全裸の愛菜と羽月。

その常識とは一切言い難い、まるで地獄絵図のようなそこは、冷静さを必死で保つ翼の心を恐ろしい衝動で揺さぶっていた。

「翼……イヤァっ……」

愛菜は、今の自分の姿を目にされ、涙を流すその顔を背ける。

「……」

翼は何も言わず、下をうつむきながら愛菜たちのいるところに近づいていった。すると、おもむろに床に落ちてあるタオルを拾い上げ、自らのジャケットを脱ぐ。タオルを羽月にかけ、ジャケットを愛菜にかけた。

「翼あ……」

「翼くん……」

愛菜と羽月は、泣き声でつぶやく二人を見た。

「二人とも、大丈夫か？」

翼がそう言うと二人はゆっくりとうなずいたが、裸体に見える傷やアザがそうではないことを物語っていた。

「おいツバサァ！」

翼の背後から光星が怒鳴り散らすと、翼はスッと立ち上がり彼の方を見る。そして、ゆっくりと彼の方へと足を運びながら語りかける。

「光星さん……これは一体どうゆうことだ？」

「ああ！？てめえ、誰に向かってんな口をー」

「どうゆうことかって聞いてんだ！！」

翼の激しい感情を込めた一言が、部屋の中を支配する。

『翼くんが、怒っとる……』

初めて見る翼の激しい怒りに、羽月……そして愛菜は目をまるくしていた。

「答えろ、何で二人にこんなことをした！」

翼がそう問いただすと、光星はその口をニヤリとしながら答えた。

「そいつらが俺の大嫌いな星羽会の人間だからさ」

「星羽会の？」

「そうさ。以前に東京を中心に日本を破滅させようとした、アブネエ宗教の生き残りだ！！」

「.....。だから何だ？じゃあこんな惨いことをしてるあんたは何なんだ！！愛菜と羽月があんたに一体何をした！？」

「うるせえ！！ポッと出の糞ホストがよおおお」

「俺のことは何を言っても憎んでもかまわない、だけど、どうしてだ！特に羽月はあんたにも他のみんなにも素直にしていたはずだ！」

翼が叫ぶようにそう言うと、光星はその恐ろしい視線をベッドの愛菜と羽月に移した。

「ああ、確かにその二人は俺と直接の私怨があるわけじゃない」

「じゃあ何でだ!？」

光星は右手に握ったナイフの切っ先を、二人へとゆっくりと向けた。

「俺の親や兄弟が……星羽会の人間に皆殺しにされたからだ！」

思わず飛び出た光星の一言に、翼・愛菜・羽月の3人は驚きを隠せなかった。

「何だって!？」

「よく聞けよ糞ども。俺はな、ガキのときに星羽会の奴らに家族を殺され、一人死ぬような思いで生きてきたんだ。消滅しても今も能々と生き残ってるっていう僅かな星羽会の奴らに復讐してやるためにな!!」

「復讐だと……!？」

その際、光星は徐々に翼との距離を縮めていた。

「そうだ……今も歌舞伎町に生きてるかもしれない生き残りをいたぶってやるためだ……こんな風にな！」

その一瞬で、光星は素早く翼につかみ掛かった。

「うわっ！」

猛獣の如く突進してくる光星に、翼は床に組み敷かれた。

そして、すぐにナイフを握った右の拳で翼の顔を殴打した。

何度も、何度も、光星は翼の顔から腹部までを激しく殴り続けた。

「ぐあっ！」

「翼ァっ！」

愛菜の悲鳴にも似た声上がる。

「どうだ翼アァァ！いてえか？いてえだろおよおお！」

「ふざけるな！」

すると、翼は光星の右腕を掴み、左横へと投げ飛ばした。

「いでえ！」

光星が床に転がると、翼はすぐに立ち上がり彼の胸倉をつかみ掛かった。

「ただ星羽会……それだけでこんな虐待みたいな行為を繰り返したってのか！？」

「ああ、そうだ！そして国は、親戚は、いや人間は誰も俺を助けようとはしなかった！！だから、俺一人がやらなきゃいけない。生き残りが歌舞伎町にいる以上、歌舞伎町でホストをしてりゃいつか生き残りとも遭うかもしれねえ……俺にとってホストってのは、そいつらゴミを見つけるための手段だったんだ！！」

「だから誰にも心を許さず、他人に高圧的に出てたのかよ」

「ああそうだ！！俺以外のもんは敵と思わなきゃな、俺は生きていけなかったんだ！！」

光星は再び翼の左頬を殴った。

しかし、翼はびくともしなかったように、すぐに光星を睨みつける。

「でもだからって……店や、一緒にやってきた社長や翔悟さんたちまで裏切るのかっ！！」

今度は翼が光星の顔に握った拳をぶつけた。

「ぐああっ！」

光星はナイフを落とし、両手で顔面を覆った。

顔を隠す指の隙間から、ポタポタと鼻血が流れ落ちる。

「どんな理由や生い立ちがあろうと……」

翼は、痛がる光星の胸倉をつかみ、激しく鋭い視線を彼にぶつける。

「あんたみたいな理不尽に人を傷つける奴は、俺は絶対に許さない！！」

怒りの限りの叫びを発しながら、翼は光星の顔を殴り続けた。

2発、3発、4発……10発……

翼はまるで理性をなくしたかのように、鼻血が溢れ出す彼の顔面を捉える拳は止まることをしなかった。

翼の拳と光星の歪んだ顔が激突する「ゴッ」という鈍い音が、同じ部屋にいる愛菜たちにもいやがおうでも聞こえていた。

「翼、もうやめてえ！」

「翼くん、もうええ！光星さん死んでまう！」

二人の振り絞ったような叫びが届いたのか、翼は殴り続けるその血まみれの手をピタリと止めた。

「ハア……ハア……」

激しく息を切らす翼は、半ばのびている光星を床へと放り投げるようにたたき付けた。そして、ゆっくりと愛菜たちのいるベッドへと足を向ける。

「今、解いてやるからな」

翼は落ちていたタオルで拳に付着した血を拭き取ると、まずは愛菜の身体を腕を縛り付けているロープをゆっくりと解いた。

固く縛られたロープが外れた途端、愛菜はガクリとしながら翼にもたれかけた。

「愛菜、大丈夫かい？」

「翼あ……！」

愛菜は抱き着いた翼の胸で子供のように泣きじゃくった。

「怖かった……すごい怖かった……」

「もう大丈夫だ……早く帰ろう、他のみんなも心配してる」

翼は愛菜をなだめると、その視線をとなりにいる羽月に移した。

「羽月、君も解かなきゃな」

そう言って、翼は羽月の腕を拘束するロープを解き始めた。

「翼くん……俺……」

「話は後だ、今はここを出るぞ」

「そやけど……」

「話は後でゆっくりできるだろ？だからー」

不思議と翼の言葉はそこで途切れた。

すると彼の身体は、ゆっくりと横へと倒れていった。

「翼くん？」

羽月が声をかけた翼は、頭からうっすらと血を流していた。

「キャアアア！！」

愛菜の悲鳴の矛先は、その彼の背後へと向けられていた。

「この野郎おおお！」

そこには、ガラス製の分厚い灰皿を手に持った顔面血まみれの光星が、鬼に等しい形相で立ちはだかっていた。

「光星さん……」

羽月は声をつまらせながらつぶやいた。

「お前ら……全員皆殺しにしてやるううあ！！」

しかし、光星が灰皿を振りかざしたとき、倒れたはずの翼が起き上がり彼につかみ掛かった。

「やめろっ！もういい加減にするんだっ！！」

翼は額から血を流しながらも、必死で光星に抗った。

しかし、痛みとダメージのせいとか、先程の力の半分も出せず、光星を突き飛ばすにも至ることはできなかった。

それでも翼は必死で光星に食らいついた。

「どけえ翼アアア！！」

「どくのは、あんたの方だ！」

翼は、最後の力を振り絞るように、光星に体ごと突進していった。

「ぐおあああお！！」

光星は鈍い狂声とともに、床へと転がっていった。

「はあ……はあ……！」

怪我をしながら無理に突っ込んだ翼も、体力の激しい消耗により著しく息を切らす。

しかしその時だった。

転がったところにたまたま落ちていたナイフを拾った光星は、そのまま翼へと向かって突撃してきた。

「なっ!？」

ギラリと光るナイフの切っ先は、容赦なく翼を目掛けてくる。

「死ねや翼ァァ!!」

光星の凶刃が、「グチャ」という音とともに一瞬で翼を捉える。

「うわあああ!!」

「ちィィィっ...!!」

光星の右手に持ったナイフの先は、翼の左肩を一直線に突き刺していた。

翼の白いシャツが、真っ赤な鮮血でジワリジワリと織物のように染まっていく。

「翼あっ！！」

「翼くんっっ！！」

愛菜と羽月が悲鳴にも似た声で彼の名を呼んだ。

「もう少しで殺せるとこだったのによおお……」

「光星……あんた……」

「何だ、ついに呼び捨てか！？」

光星は、突き刺さったままの横向きの刃を、無理矢理縦向きになるように振り始めた。

「ぐわあああああ！！！」

翼の痛々しいまでの悲痛な声が部屋を支配する。

「痛てえか！痛えよなあハハハハハハー！！！」

光星は、翼の腹部に蹴りを入れながらも突き刺さった刃をさらにグリグリと掻き回していく。

「あ……ぐっああ……」

刃の突き刺さる傷口からは、夥しい赤い絵の具が流れ出していく。

「翼よおおお……お前さえ現れなきゃよ……俺は唯一成り上がったホストとしてもこんなに惨めな思いをすることはなかったんだ！！」

「ハア……ハア……何だって……」

「星羽会のせいで散々ガキの頃から惨めに生きてきて、唯一ホストが俺の温床だったのによ……それをてめえがぶち壊したんだアアア！！」

「へっ……」

「何がおかしいィィィ！？」

「その辛さに耐え切れなくなって……"**St.Alice**"に手を染めたってのかよあんた……」

「気付いてたのかよ……ああそうだ。俺は"**St.Alice**"ってやつを使った！！おかげでそこらのシャブなんかよりいい気分だぜエエエ」

「ハア……ハア……あんた……アリスの子から……！？」

「そうさ.....星羽会の奴の言うことなんざ聞く気になれなかったが、そいつに言われたんだ.....  
。『言うことを聞いてくれれば、最高の快樂と百億の金はあなたのものだ』ってなァァァ」  
「何だ.....と.....？」

翼は、痛みを忘れたかのように言葉を失った。

「なに.....それ.....」  
愛菜もガクリと肩を落とす。

しかし、光星の暴走は止まってはくれるはずもなかった。  
翼の肩から「グシャリ」とナイフを抜いた光星は、彼を蹴飛ばし床に仰向けにさせた。

「ぐァァァっ！！」  
痛がる翼に、ゆっくり...ゆっくりと血まみれの凶刃を手にした悪魔の影が忍び寄る。

『くっ.....くそっ！』

体力を消耗し激しい左肩の痛みに堪える翼には、もはや逃げる余力は残っていなかった。

「イヤ.....やめて光星！」  
愛菜の叫びも、もはや虚しく空を切るだけだった。。

「まずはお前が死ねや.....翼ァァァァァァ！！！」

光星のナイフがついに翼の心臓にめがけて振り下ろされた。

その時だった。

『えっ……？』

不思議と翼にそれ以上の痛みはなかった。

何故ならその瞬間、何者かが彼をかばうように四つん這いになり覆っていたからだった。

「翼くん、大丈夫かいな？」

ひょろりと長い身長に金髪、そして訛り……

一瞬でダラリと翼の身体にもたれかけてきたその人物は、羽月だった。

「羽月……？」

ズルリともたれてきた彼の背中には、光星が振るいに振るっていた刃の切っ先が、刀身の見えな  
いほど深々と突き刺さっていた。

「羽月……！」

翼はそう言いながら、彼を腕で抱えた。

愛菜は口を抑えながら言葉を失い固まっている。

光星は、突然の出来事で茫然としたのかナイフを手放し、床でペタリとすくんでいる。

「ハア……あ……」

羽月は苦しそうに声を切らした。

「羽月、しっかりしろ！」

翼は抱えている羽月に語りかけた。

「ハア……ハア……翼くん」

「何だ？」

「ゴメンなホンマ……」

「えっ？」

「俺……翼くん裏切ってもうた……。光星さんが、悪いことしてんに……正体ばらす言われんの  
怖くて怖くて……愛菜さんがひどいめあっても……何もできんかったんや……」

「羽月……」

「最低やろ俺……そればかりか……」

「しゃべるな！」

「愛菜さんにまで……。俺、ホストとしても人としても最低や……」

羽月は涙を流しながら、悲痛な思いを翼にぶつけた。

それを翼はうなずきながら受け止める。

「翼くん……」

「何だ？」

「俺……翼くんに許してもらえるなんて思えへんけど……」

「……」

「こんな俺でも……大好きな友達守ること……できたんやから……お姉ちゃん……『強くなつたね』って……いつか褒めてくれるやろか……」

「ああ、もちろんだ……！」

『お前の姉さんは、すぐそこに……！！』

今にも喉の奥から飛び出そうなその言葉を、翼は必死で自らの胸に押さえ込んだ。

すると、涙顔の羽月はニッコリといつもの明るい笑顔を見せた。

「翼くん……」

「何だ、羽月？」

「おおきに、大好きやでえ……」

その時、「ゲホッ」と多量の血液を口から吐きながら、羽月は翼の腕の中にゆっくりと自らの頭を沈めていった。

「羽月？おい、羽月！？」

翼は必死で彼の名前を呼んだ。

しかし、

彼は動くことなく、目を閉じたまま、そのつぶらな瞳を見せようとはしなかった。

「おい、羽月！目を覚ませ！」

「羽月イイイイイイーー！！！」

翼の狂おしいまでの叫びが、虚しく……そして儚く、深夜の静寂な部屋の中を支配した。

羽月の背中では、

突き刺さる刃の根元から溢れ出る多量の鮮血が、

ぼんやりと浮かぶ"マザー・エレメント"を覆い隠すように

優しく.....優しく、流れていった。

第27章へ

「羽月！しっかりしろ、羽月！！」

自らの腕の中で瞳を閉じた羽月を、翼は何度となく揺さぶった。

しかし、その声もむなしく、彼が起き上がり元気な顔を見せるはずもなかった。

それは、羽月の背中に深々と突き刺さった凶刃と、その根元から溢れ出る血液の量が何より証明していた。

「羽月……何で、何で俺をかばって……」

動かない羽月にささやきかける翼を、ベッドの上の愛菜は口を手で覆い隠しながら涙を流していた。

「羽月くん……あなた……」

愛菜の虫の息のような言葉は、血の臭いをちらつかせるその重苦しすぎる空間には届いてるはずもなくー

一方の光星は、思わず羽月を刺してしまった衝撃からか、ペタリと床にへたりこんだまま動かなかった。

「あ……お、おお……おれは……」

震えた声でつぶやきながら、光星はその血にまみれた手の指先を翼と羽月に向けた。

そして、ガク然としながらガタガタと震えを増し始めていく。

その時だった。

部屋の入り口のドアが、「ドン」強い音を鳴らし、「バタバタ」と複数の人間が駆ける足音が翼たちのいる床を伝った。

「翼っ！」

部屋のドアが開ききると同時に、翼たちの視界にはスーツ姿をした三人の人影が浮かび上がる。

息を切れ切れに駆け付けたのは、天馬・翔悟・由宇の三人だった。

「なっ……」

その薄暗い部屋の中でさえ、その悪魔の宴とも言わんばかりの光景と、むせ返る血の臭いは、天馬たちから一瞬でその先の言葉を奪っていた。

明らかに現実とは理解しがたいその惨事場に、まず何を言って良いのかー

何をすれば良いのかー

さすがの天馬ですら、それには多少の時間を要するに至った。

しかし、それも光星が次の行動に出るまでの話だった。

「……しゃちょ……う」

おぼつかない子供のような口調で、光星はつぶやいた。

「光星……おまえ……何で……」

怒りなのか、それとも悲しみなのか……

両方が入り交じったような天馬の声が、部屋にひっそりと響いた。

「光星……お前どうしたって言うんだ……。何でこんなことに……」

天馬がそう語りかけると、光星はその鼻血にまみれた顔を横に背けた。

「光星……」

「光星さん……」

天馬の後ろにいる翔悟と由宇も、力無い声でささやきかけた。

しかし、彼は顔を背けたまま何も発しようとはしなかった。

「うっ」

「？」

「うっ」

「光星??」

「うわあああ！」

一瞬の出来事だった。

気付いたときには、光星はドアもとで茫然と立ちすくむ天馬たちを掻き分けるように跳ね退けていた。

「うわっ！」

「光星えっ！」

「うおああああ！！」

床に夥しい血痕を残しながら、光星は部屋から飛び出す獣のように走りだしていった。

「光星……あいつ！」

翔悟が追いかけてようとしたその時だった。

「待つんだ翔悟っ！」

後を追うように部屋を飛び出そうとした翔悟を天馬が止めた。

「社長……でもあいつー」

「気持ちはわかるが……今は部屋を見ろ」

天馬と由宇、そして翔悟はあらためて惨劇の舞台と化した部屋の中を見渡した。

「今は……あの三人を助けなきゃだろ……！お前と由宇は翼たちを頼む」

天馬は自らのジャケットを脱ぎながら、愛菜のもとへと歩み寄った。

「愛菜、大丈夫か？」

天馬はそう言いながら愛菜の肩にジャケットをかける。

「うっ……えっ……、天馬……わたし…」

「今は何も言わなくていい。とにかく、みんな病院へ行くんだ。特にー」

天馬はそう言いながら後ろを振り返った。

「おい、羽月！大丈夫か！？」

「こりゃひどい……早く病院に連れてかなきゃ！」

翔悟と由宇は、背中にナイフが突き刺さった羽月の姿を見ては、驚きたいのを必死で抑えていた。

「羽月……羽月……！」

気を失うような左肩の激痛と精神的ショックに身体をよろめかせながら、翼はピクリとも動こうとしない羽月の名前をただ呼び続けていた。

2時間後ー

天馬たちの冷静な機転により、翼・愛菜・羽月の三人は救急車によって西総合病院へと搬送された。

特に、背中をひと突きにされた羽月の重傷は相当なもので、即救急隊員による応急処置が施された後、彼は病院到着と同時に集中治療室へと運ばれていった。

「羽月……」

幸い奇跡的に傷が浅く、早くに治療処置を終えることができた翼は、ひとり包帯で左腕を吊っている姿で集中治療室の外で俯きながら座り込んでいた。

「翼」

そんな彼に、天馬は普段より優しい口調で歩み寄る。

「社長……俺は……」

「……お前は何も悪くないだろう」

天馬は、落ち込む翼の肩をポンと叩きながら、彼の隣に腰をおろした。

「翼、お前こそ大丈夫か？傷もそうだが、仕事で少しは酒を飲んでもいたんだぞ？」

「俺は……大丈夫です」

「そうか」

「愛菜は？」

「精神的なショックが強すぎたみたいでな。今は薬飲んで眠ってるそうだ……」

「そうですか……。光星さんは？」

「……さあな。あいつのことで先に帰した翔悟と由宇からは何も連絡ないからな……」

「そうっすか……」

それっきり、翼と天馬は深夜の病院の重苦しい雰囲気の流れられるように、しばらく一言も発さなかった。

しかし、それも羽月がいる集中治療室のドアが開くまでのことだった。

それを気付くと、翼と天馬は同時と言っていいほどのタイミングで立ち上がった。

「羽月……羽月……！」

翼は、医師たちとともに中からタンカーで運ばれてきた羽月に慌てて駆け寄った。

「先生、羽月……彼はどうなんですか!？」

翼が医師に尋ねると、青い手術着姿の医師は軽いため息をつきながら答えた。

「幸い奇跡的に心臓には負傷はありませんでしたが……出血とその他の外傷も酷く、それらのショックなどの影響で心拍数が安定していません。今夜が、峠だと思って下さい」

医師が翼と天馬にそう告げると同時に、羽月はすぐに病室へと運ばれていった。

「そんな……」

翼はガクリと床に崩れ落ちた。

同じナイフで突き刺された自分の左肩の痛みが遠い昔の思い出になるくらい、彼の心を凄まじいまでのショックが襲っていた。

翼と天馬は、そのまま眠ることなく、会話をすることもなく、ただひたすら重く長い時間の流れに身を任せていた。

.....

.....

.....

ただ黙って俯く翼と天馬の瞳にも、病室のブラインドのすき間からの朝日が差し込んでいた。

「翼、起きてるか？」

「はい」

「お前も軽くとはいえ刺されてるんだ、少し休め」

「社長こそ.....ずっと寝てないんじゃないですか？」

機械と点滴のに繋がれたベッドの上の羽月をじっと見つめながら、二人はそんな会話を繰り返した。

羽月がすぐにでも起き出して、いつもの元気な姿を見せるんじゃないかー

心の中でわずかにあふれるそんな期待が、二人の目をずっと彼から放さなかった。

そして、ずっと長い時間口を閉ざしていた翼がついにその重い口を開いた。

「俺が悪いんだ……」

翼はまず、その一言をつぶやいた。

「どうしたんだ、翼？」

同じく口を閉ざしていた天馬がすぐに言葉を返す。

「俺が愛菜や羽月の異変にすぐに気付いて対応してれば……あの時美空ちゃんのところから愛菜を一人にしなきゃ、こんなことには……」

「翼よ、そんなに自分を責めるな。お前は何も悪いことをしてないじゃないか」

「でも……」

「しっかりしろ、翼！」

天馬は突然立ち上がり、激しい瞳で翼を見つめた。

「社長……」

「お前は羽月や他のホストたちがめざすウチの**No.1**で、カリスマキャバ嬢愛菜の担当なんだぞ！もっとしゃんとしてろ！じゃなきゃ……二人が目を覚ました時に、どの面下げるつもりだ！？」

「社長……」

「お前も、俺達も、どんなに辛くても……あいつら二人が戻ってきたときには笑顔で元気に迎えてやるんだ。それがホストってもんだろうが！」

「……はい」

「俺達は、今はどんと構えている……それしかできないんだ」

突き刺さるような天馬の言葉に刺激され、翼は再び羽月のことを見つめた。

『羽月……必ず、必ず戻ってこい……』

それからさらに時間は流れ、時刻は16時を回ろうとしていた。

その間、翼と天馬は一睡もせず食事もとらず、ただずっと寝たままの羽月を看取っていた。

いつか心拍計のカウントが『0』になるんじゃないかという恐れを抱いたまま、二人は日の傾き始めた昼下がりを過ごしていた。

「羽月……」

翼と天馬は、事あるごとに彼のその名を口にしていた。

しかし、その時だった。

「うっ……」

「っ!？」

翼と天馬はほぼ同時に立ち上がった。

二人が見つめるその先には、わずかに声を漏らす羽月の姿がしっかりとあった。

「うう……」

「羽月？羽月……!？」

うめき声のようなものが羽月の口から漏れるたびに、翼は彼の名を呼び続けた。

すると、次第に彼のまぶたは、ゆっくり……ゆっくりと眩しさに堪えながら開き始めた。

「羽月……お前……」

天馬もため息を零しながら声をかける。

それに応じて、羽月はその視線をゆっくりと翼たちへと向けていた。

「翼くん……社長……」

「羽月…大丈夫か？」

翼が羽月の右手を軽くにぎりしめた。

「俺……確か光星さんに……」

「ここは病院だ。お前はもう助かったんだぞ」

「助かったん……俺？」

「そうだ」

すると、羽月は天井を見上げ、すぐにもその瞳を潤ませ始めていた。

「羽月、どうした？」

翼がそう問い掛けると、羽月は涙をひとつ流しながら口を開いた。

「ゴメンな……翼くん……俺のせいや……」

「えっ？どうしたんだよ、急に」

「俺が弱っちいせいや……俺が弱いから、翼くんも愛菜さんも……社長やみんなにも迷惑ばっかかけてもうた……」

「羽月」

「俺、怖かったんや……めっちゃ怖かったんや。俺が……その……星羽会の……生き残りやから、昔みたいな目にあうのが、めっちゃ怖かったんや……」

「昔みたいに？」

羽月は鼻水をすすりながら続けた。

「俺、家族がいなくなったあの事件の後も、施設でも『凶悪信者の生き残り』ってことで虐められながら過ごしてきたんや……。何でや何でやって、辛くて何度死のうと思ったかわからなかった……」

「羽月……」

翼と天馬は、そのまま羽月の言葉に対して耳を澄ました。

「中学のときな.....学校でも施設でも虐めがすごいエスカレートしてな.....。俺、何か嫌になって施設も飛び出していったんや.....」

遡ること6年前—

星羽会の信徒の生き残りである星宮直人は、当時"仕方なく"引き取られていた京都のある児童養護施設の中でも迫害されながら生活していた。

そして、中学校のクラスにても、差別的な虐めを繰り返し強いられていた。

それは日に日に内容もエスカレートしていき、ついに彼の運命を決定づける事件が起こった。

「もう、やめて.....やめてえや.....」

「やかましいわ、この凶悪信者がっ！」

直人を放課後の薄暗い理科室で取り囲む十人のうちの一人が、彼の腹部を蹴りながら言い捨てた。

「痛いわ.....もうかんにんしてや.....。お願いや.....」

「なあなあ、コイツ"危険物"のくせにまだ何か言っとるでえ？」

「気に入らんなあ」

「いい加減、俺らで"退治"した方がええんちゃうん？」

「そやなあ〜」

直人を取り囲む生徒たちは、ニヤニヤしながら一斉に彼につかみ掛かった。

「な、何すんねん！」

直人の言葉も虚しく、生徒たちは彼の学生服をすべて剥ぎ取り始めた。

「やめて！お願いだからやめてやあ！」

懇願する直人の悲鳴のような言葉も、彼らにはうすら笑いのネタにしかなくなっていなかった。

下着だけにされた直人は、身動きがとれないように腕や足をおさえられていた。

「何で……何でこんなことばっかすんねん……」

「うるさいわ、アホっ」

主格である生徒の一人が、言い捨てながら直人の左頬を殴打する。

「ぐっ……」

「こうでもせんと、また何かやらかすかわからんからなあ。なあみんな？」

「そうやそうや！何でお前みたいのが、平気で学校来れるんや！」

すると生徒たちは次々と直人の顔や腹部、手足に至るあらゆる箇所を蹴りだした。

「痛い……もうやめてえや……」

「黙らんかい！このクズっ！」

生徒の一人が直人の腹部に強烈な蹴りを入れる。

「ぶええっ……」

すると、直人の口から少量の嘔吐物が出される。

「何や、きったないわぁ！」

「臭いんじゃボケェ」

床で倒れる直人を見下ろしながら、生徒たちは彼の手足をもぎるように踏み付け続けた。あまりの苦痛に堪える直人の目からは、次々と涙が零れだしていた。

「ん、何やコレ？」

主格の生徒が、直人の背中に何かを見つける。

「何やコイツ、背中に羽根みたいな形したアザがあるでえ」

「うわっ、何やねんコレ。気持ち悪いわぁ」

直人の背中に浮き出ている、羽根の形をしたもの一

それこそが、星羽会幹部信徒の血を引く何よりの証である『マザー・エレメント』であった。生徒たちは、全員それを気味の悪いものを見る目で凝視していた。

「なあ、俺ええこと思い付いたわ」

「何なん？」

そう言って、主格の生徒はポケットからあるものを取り出した。

「これ、コイツに試さへん？」

「何や、その茶色い瓶？」

「硫酸や。ホンマに人の肌が焼けるんか、コイツで理科の実験しようや」

「おっ、ええなそれ。だから今日の『ゲーム』は理科室やったんやな」

「そやそや。コイツに人権なんかないんやし。そうや、この変なアザみたいのにかけてみるわ」

生徒たちは、ガラガラと笑い出すと、氷のように冷たく細い目を倒れる直人に一斉に注いだ。それに恐ろしいまでの悪意を感じ取った直人は、目を大きく開きながら後ずさった。

「ひっ……」

「オイオイ、逃げるなよ星宮クン。せっかく君の存在価値価値の無い体を使って理科の勉強をしようとしてるんだからさあ」

「や、やめてや……頼むからもうやめてやあ……！」

命ごいをするかのように、下着姿の直人は涙と鼻水で顔を濡らしながら彼らに訴えた。

それと同時に、彼の身体を唯一覆う下着が、異臭とともにじんわりと水気を帯び始めていた。

「何やコイツ、シヨンベンもらしとんでえ！きったないわあ」

「最悪やな」

「こら、実験早めるしかないな」

「はよ硫酸かけてまえ」

直人を囲む彼らの口から飛び出る一言一言が、一人床で失禁する彼にとっては、まるで漫画やテレビゲームに出てくるような悪魔の儀式と等しく思えた。

「おい、動くなや！」

「はよ実験せなあなあ♪」

主格の生徒は、硫酸の瓶の蓋を開け、それを持った右手をついに直人に向け始めた。

「ホンマ……ホンマにやめてえ！！」

直人は、涙の限り叫びながら手足をバタバタと動かした。

「おいコラ、勝手に暴れー」

その時だった。

暴れた直人の足が、硫酸を持った主格の生徒の足に強く当たり、彼はバランスを崩していった。

「わっ」

一瞬驚きながらよろめいたときには、すでに彼の手に硫酸の瓶がないことに気がついた。

「あれっ」

「あっ」

硫酸の瓶の在りかー

それは、左大腿を押さえながら必死で悶えている直人の姿が、それを目にした全員の目にハッキリと映っていた。

「うぎゃああああー！！！」

断末魔のような叫びが、理科室の中を一瞬で駆け巡った。

「うっ……うぎっ……！」

硫酸の零れた左大腿を、直人は必死で素手でおさえながら呻いていた。

「やばっ！マジかかってもうたで！」

「みんな、逃げるでえ！」

その場にゲーム感覚でいた生徒たちは、何も見なかったかのように直人ひとりを残して理科室から走り去っていった。

たったひとり激しい苦痛とともに残された直人は、異臭に囲まれながら、止まることのない涙とともにその場でもがき続けていた。

その翌朝一

理科室に巡回に来た教職員によって気絶した直人は発見され、直ぐさま病院へと運ばれた。

『理科室の薬品が何故使われたのか』

という議題で職員会議にかけられたが、星羽会の生き残りである直人のことが大々的に外に漏れることを恐れた学校は、この事実を隠蔽するかの如く校外への露呈を禁止した。

学校も施設側犯人を探すことはせず、

もちろん、犯人である生徒たちも自らの罪を告白することなく

事実は闇の中へと葬られた。

唯一理不尽な暴力を受け、心と左大腿に大きな傷痕を残した直人のことを察する人間は、誰一人としていなかった。

「うっ……お姉ちゃん……お姉ちゃん……」

直人は、冷たい病院のベッドで孤独に堪えながらやり場のない涙を流し続けていた。

しかし、見舞いにすら来ることのない学校や施設のその杜撰な対応に不信感を抱いた病院側は、直人の状態を含めて児童相談所へと連絡をした。

事情を聞き付けた児童相談所の間人は、傷ついた直人を助けるために、学校と施設を徹底的に糾弾した。

直人の素性は伏せられたものの、苛烈かつ残酷な虐めを隠蔽したとして、学校とはマスコミにも糾弾され、

犯人の生徒たちは、全員警察にて取り調べを受けることとなった。

「もう、施設に戻りたくない」という直人の意見を尊重し、彼の身柄は施設から児童相談所を介して、里子を募るある一人の老人のもとへと預けられることになった。

病院を退院し、学校には行かず一人老人の家で新しい生活を始めた直人だったが、心に刻まれた傷はとても深く、ふさぎ込んだ毎日を送っていた。

「直人、直人」

老人が、畳の上で寝そべる直人に声をかける。

「.....何や？」

「学校、いかへんのか？」

「.....もうあんなところ行きとうないわ.....」

「そうか。じゃあわしの仕事手伝わんかい」

「仕事？」

「そや、畑の芋掘りや。中学生が何もせんで、身体なまるで？」

老人は、半分無理矢理に渋る直人のことを庭の畑へと連れ出していった。

「なあ、じいちゃん」

「何や？」

「何で、俺のこと引き取ったんや？」

「.....何でそんなこと聞くんや？」

「だって.....」

直人は、すぐに口をつぐんだ。

しかし、老人はすぐに笑顔で答えた。

「新しい家族が欲しかった.....。それじゃあかんか？」

「新しい.....家族？」

「そや。ほれ、見てみい」老人は、手に持った大きなじゃがいもを直人に見せた。

「お前が星羽会だか何かはわしにとってはどうでもええ。ただ、わしと一緒に元気に暮らしていけたらそれでええやないか。さっ、いくぞ」

「あっ.....」

老人はそう言うと、すぐにじゃがいもを積んだ籠を持って家へと戻っていった。

「ほうっ、今年のじゃがいもはいい出来やな」

老人は喜びながら、皿に盛ったホイルの中身をつついていた。

「食ってみい」

老人は、バターをつけた蒸したじゃがいもを直人に差し出した。

「.....うまい.....」

「うまいか？」

「めっちゃうまいわ.....！」

「何や、そんなええ顔で笑えるんやないか直人」

「じいちゃん.....」

「お前の生い立ちがどうか、わしにはそんなん関係あらへん。いつか、別れたお姉さんにも、

このジャガバター食べさしたれや。それまで、わしが責任持って守ったるからな」

老人は、優しい笑顔で直人にそう囁いた。

「……うん。おおきに、ありがとう……」

直人は、涙と鼻水をこぼしながら、熱々のじゃがいもを頬張っていった。

いつか必ず、生き別れたたった一人の姉・茜に再会できる日を夢見てー

話を聞き終えた翼と天馬は、ただずっと羽月を見つめていた。

すると、すぐに羽月は口を開いた。

「俺、ずっと誰かに認めてもらいたくて……でも、星羽会の経歴あるから普通に人と接するのが怖くてしゃあなかった……。だからー」

「ホストを始めた……そうだな？」

羽月の言葉を天馬がつないだ。

「そうや……。俺みたいなのでも、実力主義のホストの世界なら名前や経歴も隠して生きていける……。ましてや、姉ちゃんが歌舞伎町にいるって聞いたときは……もう行くしかないと思ったんや」

「そうだったのか……」

翼は、羽月の言葉に納得したかのようにうなずいた。

「でも……ついには【Pegasus】までが星羽会の騒動に巻き込まれてもうて……そしたら何故か

光星さんに正体ばれて脅されて……もう、どうしようもなかったんや……」

羽月は涙を流しながら、その悲痛な胸の内を打ち明けた。

「社長……」

「何だ、羽月？」

「俺……もう店にはいませんよね？」

「お前……」

「星羽会のことがあったら店にも迷惑かけてまうし……もう、ホストすることできへんよねえ……」

羽月が泣きながらそうつぶやいた時、天馬は真っすぐに彼を見つめ、再び口を開いた。

「羽月、お前今本気でそう思ってんのか？本気でそうしたいのか？」

「えっ」

「自分を試したくて、姉さんに会いたくて、だからホストになりて歌舞伎町まで出てきたんじゃないのか？」

「社長……」

「俺が知ってるのは……信じているのは、星羽会とか何かでクヨクヨしている"直人"じゃない。いつも元気でお客さんたちを楽しませている【Pegasus】の大切なホスト・羽月なんだ！」

「社長……俺、店にいてもいいんですか？こんなやつがいても……俺……」

羽月が泣きじゃくりながらそう言うと、天馬は微かに笑いながら首を縦に振った。

「社長として俺からの命令だ。とっとと傷を治して、一日も早く店に戻ってこい！俺も、翼も、翔悟たちも、そしてお前を慕ってるお客さんたちも、みんなお前を待ってるからな」

天馬がそう言うと、羽月は泣き虫な子供のように顔を真っ赤にしながら涙を流していた。

「ありがとうございます……。おおきに……。ありがとうございますう……。うっ……。えっ……」

「羽月」

翼が口を開いた。

「何や、翼くん……」

「いや、何て言うか……その……」

「えっ？」

「.....めんな」

「えっ??」

「俺のために、こんなになってしまっ.....ごめんな.....」

翼が頭を下げながらそう言うと、羽月はニッコリと満面の笑みをのぞかせる。

「気にせんでええって、翼くん。俺ら、友達やん」

「羽月.....」

「大好きな友達を守るんは、男として当然やでえ」

羽月はニカッとしながら、翼に優しくそう言った。

元気な中にどこか淋しさを隠した、いつもの笑顔で。

「羽月.....」

「んっ？」

「ありがとう.....な.....」

翼は、どこか恥ずかしそうにフッと笑顔を見せながら言った。

「初めて見たわ.....翼くんのそんな顔」

翼と羽月は見つめ合いながら、互いに見せたことのないどこか清々しい素直な表情を見せていた。

病室へと差し込む沈みかけの夕日が、傷ついた心をついに通わせた二人のホストを、優しく.....優しく照らしていた。

「奇跡だ……！」

日も沈んで外の暗さが感じられ始めた中、病室での羽月の検診をしていた医師は驚いていた。

「先生、彼の容態はどうなんです？」

天馬が問い掛けると、医師は首を縦にゆっくり振ってから答えた。

「今は通常どおりに生活や仕事をするのは不可能ですが、辛うじて神経等へのダメージはありませんし、日を追っていけば傷も塞がり起き上がるようになりますよ」

「そうですか！ありがとうございます」

天馬と翼は、医師へペコリと頭を下げると、ベッドで横になっている羽月に目をやった。

「よかったな、羽月」

「おおきにな翼くん。社長も俺なんかのために、すみません」

仰向けの羽月は、頭を下げて謝るかのようには首を僅かに動かした。

「俺達や店のことは心配するな。お前のお客さんたちには、滑って骨折したとか適当に理由をつけておくから」

「はい、おおきにです社長」

「じゃあ、俺は行くな。店にもちょっとは顔を出さんといかんし」

天馬は病室の椅子から重い腰を上げる。

「社長、じゃあ僕も」

翼がそう言うと、天馬は彼を見ながら首を横に振った。

「お前も休め翼。傷もあるし、そんな疲れた顔と腕吊った恰好で店に出るわけにもいかんだろう」

「はい……でもー」

「仕事したい気持ちはありがたいが、明日は定休日だし、とにかく今日と明日はゆっくり休め。社長命令だ」

「……わかりました。そうさせていただきます」

「てなわけだ。羽月、俺達はそろそろ行くから、お前は一日も早い復帰をめざして、ゆっくりするんだぞ」

「はい。社長、翼くん。ホンマ、おおきに」

羽月がそう言うと、立ち上がり一度背を向けた翼は、再び彼の方を振り向いた。

「そうだ、これ」

翼は羽月にあるものを手渡した。

「翼くん、コレ……」

「光星が、店で落としていったんだ。君の大切なものだろ？」

「よかった……よかったわあ。翼くん、ホンマおおきになあ！」

羽月は、翼から手渡された姉と写る一枚の写真を喜びながら抱きしめた。

「退院したら、また美空ちゃんところに飲みに行こうな」

「うん」

その会話を最後に、翼と天馬は長時間座っていた羽月の病室を後にすることにした。

病室を出て間もなく病院の廊下をゆっくり歩いていると、天馬はふと翼に話しかけた。

「翼、ちょっと気になってることがあるんだが」

「はい？」

「さっきの羽月のあの古びた写真のことなんだがな」

「……」

「こんなこと、俺が聞く必要もないことだと思ってるんだが……羽月のやつがずっと探してる姉さんってのはもしや？」

羽月の正体に感づいている天馬の言葉に対し、翼はゆっくりとうなずきながら答えた。

「愛菜のことです……」

「やっぱり、そうだったのか」

「社長は知ってたんですか？愛菜と羽月のこと」

「知っていたわけじゃないが、どことなくな。俺が【Unicornis】で現役のときに、珍しくかなり酔った愛菜がホロツと言ったんだ。"自分には何年も前に離ればなれになった弟が一人いる"ってな。まあ確かに姉弟だからか、雰囲気妙に似てるとは思ったが」

「それは僕も事実を知る前に何となくは思ったことありました。二人に交互に会うたびに、どこかで会ったことがある、みたいな」

「ああ。あの時に愛菜から見せてもらった写真が、さっき見たものと同じだったから、確信しな

が驚いたって感じだな。ましてや病室の名義……『星宮』なんてそうある苗字じゃないからな」

「社長……愛菜のところへは、やはり…？」

「今はそっと休ましてやろう。精神的にも相当きてただろうからな。後日、ゆっくり落ち着いたら見舞いに駆け付ければいいさ」

「わかりました」

翼と天馬はそのような会話を目を合わせずしながら、病院の入口へとたどり着いた。

「翼、とりあえず俺は一旦店に戻る。店の奴らに色々説明しなきゃだしな。とにかく、お前も今夜はゆっくり休むんだ」

「はい。お疲れ様でした」

頭を下げながら翼が見送る中、天馬は一足先のタクシーで一人新宿へと戻っていった。

「さてと、俺も帰るか」

翼はそう言いながら、病院の中でずっと長い間切っていたケータイの電源を久しぶりにONにした。

十数秒ほどでケータイの電源はつき、そこに表示されている時刻は19時を過ぎようとしていた。

「もう夏も近いからかな。まだ微妙に明るいな」

翼は薄暗いながらもまだ夕方の明るさのようなその空模様をふと見上げていた。

その時、彼のケータイが振動してメールの着信を知らせる。

翼はすぐにケータイを開き、その液晶画面に目をやる。

「あっちゃ」

翼は呆気にとられたように声を漏らした。

ケータイのメールの受信履歴には、自分の指名客からのメールが多数来ていたからだった。

タイトルや本文には、昨夜の騒動により営業中の店を突然飛び出していった翼への心配の言葉が綴られていた。

『大丈夫？』

『何があったの？』

など、自らの身を心配している指名客の言葉に、翼は胸を締め付けるような感情を覚えていた。

「早く、怪我を治して店に戻らなきゃな」

翼は、疲れた身体にも関わらず、あらためてそう心に決めた。

そして、翼は一本のメールに気がついた。

「美空ちゃんまで。1時間くらい前か」

『翼さん、まだ病院にいますか？』

美空からのメールにはそのように書かれていた。

「美空ちゃん、どうして病院にいるって……」

その時、立ちすくむ翼の後ろから、人が駆け寄ってくる足音を彼の耳は捉えた。

翼は、すぐにその方向へと振り向いた。

「美空ちゃん？」

翼の視界には、病院のエントランスへと急ごうとしている美空の姿が映っていた。

離れたタクシー乗り場にいる翼のことには気付いていないようで、彼女はそのまま病院の中へと入ろうとしていた。

「美空ちゃんっ！」

翼は彼女の名前を呼んだ。

すると、病院へ入ろうとした彼女は、自分を呼んだ彼のいる方へと息を切らしつつ振り返る。

「ハア……ハア……」

美空は、息切れをしながら走り疲れた身体を引きずるように、ゆっくりと翼のいる方へと歩いていく。

翼も、そんな彼女の方へと歩み寄っていった。

「美空ちゃん、どうしてここへ？」

『ヨカッタ、無事デ……』

翼の問いかけに、美空は切れる息をただしながら手話で答える。

『昨日ウチニ来ルカラッテ翼サン言ッテタカラ待ッテタンデスケド、メールモ無イカラ不安ニナッテ……。ソレデ、オ店ノ人ニ聞イタラココダッテ教エテクレテ』

「あ……そうだったよねゴメン、ちょっと昨日に色々あって。でも、それでわざわざここへ？」

『翼サンガ病院ニイルッテ聞イテ……。私、スゴク不安ニナッテ』

「美空ちゃん」

『デモ、ヨカッタ。翼サンガ無事デ……。私、翼サンニ何かアツタンジャナイカッテ思ッテ……』  
美空は、そのつぶらな瞳に涙を溜め、手話をスッと止めた。

そして、自分の目の前に立っている翼の方へとスッと飛び込んでいった。

「美空ちゃん……」

包帯を巻いていない翼の右腕の方へと、美空は自分の顔をピタリとくっつけていた。

「ヒッ……ヒック」と声にならない声が、翼の澄ました耳にはしっかりと響いていた。

「美空……ちゃん」

突然自分の腕もとで泣き崩れた美空の姿に、翼は驚きながらも、どこか心の糸が少しずつ解れる感覚を覚えていた。

「ごめん美空ちゃん、心配かけて」

翼は小さくも優しい声でそう囁きながら、動く右腕で美空の小さな肩を抱いた。

1 時間後一

翼は美空とともに歌舞伎町にある"楓"に移動していた。

『翼サン、何モ食ベテナインデショ？スグ何カ作りマスカラ』

美空は手話でそう言うと、どこか申し訳なさそうにすぐに調理にとりかかっていた。

「ありがとう美空ちゃん。でもいいのかい？急に今夜お店閉めちゃったりして」  
翼がそう言うと、美空は2回ほどうなづく。

しかしその時だった。

料理の香ばしい匂いのする中、カウンター席でお茶をすすっていた翼は、ふと突然恐ろしいまでの睡魔に襲われ始めていた。

『あ、あれ……??』

肘からガクリと落ちていくように、翼はカウンターのテーブルに突っ伏した。  
それに気付いた美空は、急いで翼のもとへと駆け寄った。

トントンと肩や背中を叩いても、翼は目を明けずに、そのまま寝息をたてていた。

翼は、再び夢を見ていた。

『う……ん』

『えっ？』

『そんな』

『そんなバカなっ！』

「そんなんっー！」

翼は勢いよく、仰向けになっていた上体をバツと起こしながら目覚めた。

「痛っ……」

突然体を起こしたからか、傷のある左肩に軽い痛みが走る。

「またあの夢……。何だったんだ……。何で夢に『あの人』がー」

そうつぶやきながら、翼は冷静に周りを見渡す。

「ここは……そっか、俺寝不足とかがたたって寝ちゃったのか」

常夜灯のついた部屋の中、上着を脱いだ自分の身体が真っ白いベッドの上にあることで、翼はようやく自分の状態を把握し始めていた。

「ん？」

その時翼は、自分が身体を乗せているベッドに寄り掛かりながら寝息をたてている美空の姿を発見した。

『美空ちゃん。もしかしてここまで俺を連れてきてくれたのか』

美空も相当心配疲れをしていたのか、翼が目を覚ましたことに気付かないまま眠りこけている。

「えっと、今は何時……んっ？」

辺りを見回すと、翼は自分が今まで眠っていたベッド脇の小さい棚の上に何かがあることに気付いた。

薄暗い中顔を近づけてみると、そこには円いトレンチの上におにぎりが二つと湯呑みが手紙と一緒にぽつんと添えられていた。

翼は、まずその手紙に手を差し延べ、それに目を通した。

－翼さん

怪我は大丈夫ですか？

急にカウンターで寝てしまったので、びっくりしました。

お腹は空いているかもしれないと思ったので、おにぎりを二つ作りました。

起きて、食欲があったらでいいので、よかったら食べて下さいね。

それと、夕方病院では突然泣きついてしまって、すいませんでした。

翼さんが病院にいるって聞いて、とても平静じゃいられなくて。

こんなことはおこがましいかもしれませんが、私にできることがあれば、何でも言って下さい。

美空－

「美空ちゃん……」

読み終えた手紙を片手に、翼はあらためて深い眠りについている美空を見つめた。

彼女の瞳から頬にかけては、うっすら濡れた痕跡も見てとれた。

『俺のために……？』

心の中でそうつぶやきながら、空腹を感じていた翼は置いてあるおにぎりの一つに手をのぼした

。

サララップに包まれた綺麗な三角形のおにぎりは、まだうっすらと残った温かさを彼の手に伝えていた。

翼は、包まれたサランラップを一つ一つ解くようにゆっくり開き、露になったおにぎりを見つめる。

そして、口に運びパクリと頬張っていった。

「……うまい」

翼は思わずそうつぶやいた。

一口……また一口と食べていくうちに、彼の中ではどこか遠くに置き忘れてきたような、懐かしいものが込み上げていた。

そんな彼の瞳から、一筋の涙が零れだしていくのには、そう長い時間はいらなかった。

「何で……」

翼はグッと手を握りしめた。

「何で、何でこんなに優しくしてくれるんだよ……」

ポタリ、またポタリと、翼の目からは大粒の涙が次々と零れ落ちていた。

それと同時に彼自らの脳裏に浮かんだのは、数ヶ月前に帰省したときに母親が持たそうとしたおにぎりを無残にも踏み潰した、冷酷な自分の姿だった。

『もう誓ったのに。人は絶対信じない……お金と自分しか信じないって決めたはずなのに……』

目の前にいる美空の優しさ

そして、自分の身を犠牲にしてまで凶刃から守ってくれた羽月の友情

この一日で、自分の中で一気に起こったことが、長い間封じ込んでいた翼の奥底にある感情を激しく揺さぶっていた。

そんな翼の背中を、トントンと優しく叩いたのは美空だった。

「み、美空ちゃん」

『ドウシタノ?』

「な……何でもないよ」

『何デモナクナイ』

「ホントに、何でもないんだ……何でも……」

それ以上は、溢れる涙が邪魔をして言葉にならなかった。

しかし、うなだれている翼の頭を、美空は子供をあやすように優しい手つきで撫でていた。

『なっ……??』

翼は涙だが止まらない中で、そんな彼女の行動に驚いていた。  
しかし彼は、その撫でる手を振り払うかのように頭を退ける。

『……』

美空は寂しそうな表情で、翼を見つめた。

『ドウシテ?』

美空の手話を横目で確認すると、翼は重い口を開いた。

「美空ちゃん、俺ね……ホントは美空ちゃんが慕ってくれるような、いい人間なんかじゃないんだ」

『……??』

「自分のことしか考えずに、ガキのようにすねてるくだらない男なんだよ……。美空ちゃんみたいないい子が、俺なんかに関わっちゃいけないんだ」

翼は、肩を落としながら自らのいきさつを美空に語り始めた。

会社員だった時のこと……

紗恵とのこと……

家族との確執のこと……

ホストを始めたこと……

そして、自らの心の内のこと……

翼は、洗いざらい自らのことをそばにいる美空へと告白した。

美空は、真剣な表情でそれらに対してずっと耳を澄ましていた。

「だからね……俺、こんなやつなんだ。最低だろ、どんな事情があれど会社で傷害起こしたり、彼女守れなかったり、病気の母親にひどい仕打ちしたり」

『……』

「あげく今やってるのがホストだもんな……。笑えるだろ？」

『……』

「所詮俺は、次男坊のお坊ちゃま……いや、それにすらなりきれなかった、タダのクズなんだよ……！だから羽月をあんな目にー」

その先を言おうとしたときだった。

気がつくのと、美空はすっかり涙顔の翼をギュッと包み込むように抱きしめていた。

「えっ？」

突然のことに翼が驚いていると、美空は『違う、そんなことない』と囁きかけるかのように、首を何度となく横に振った。

「どうして……何で……」

翼が何度問い掛けても、美空は再びゆっくりと首を横に振っていく。

そして、彼を抱きしめていた手で、手話を始めた。

『翼サンハ、ソナ人ジャナイ』

『翼サンハ、チョコヲ可愛ガツテクレルシ、コノ間飲ミ逃ゲサレタトキモ、一番ニ助けテクレタ  
勇気ノアル人』

『ソレニ、オ母サンガ亡クナッテ辛クテタマラナカッタ私ヲ必死デ励マシテクレタ優シイ人』

『ソシテ、トテモ思イヤリノアル人……』

「俺に思いやりなんて」

『アナタハ気付イテイナイワ。何ダカンダ言ッテモ、必ズ人ノコトヲ考エテルモン。羽月サンノコトダッテ』

「.....」

『翼サン、ズット一人デ抱エテ.....辛カッタデスヨネ』

気がつくとき美空は、手話を描くその手に、何滴もの涙を落としていた。  
声を失った彼女の精一杯の『泣き声』が、翼の耳には確かに響いていた。

「美空ちゃん、何で俺なんかのためにこんな.....」

『アナタガ人ヲ信ジタクナクテモ、ドウ生キテモイイ.....。デモ、コレ以上自分デ自分ヲ傷ツケナイデ.....。お願い.....』

「美空.....ちゃん」

『アナタハモウ、十分スギルクライ傷ツイタンダカラ.....モウ自分ニ優シクナッテ下サイ』

—もう、自分にも優しくして—

その言葉を受け止めたとき、心に溜まっていたしこりのようなものが一気に流れ出たのか

翼は、無意識のうちに美空の胸の中で顔を埋めていた。

子供のように泣きながら、長い間心に溜めていたしこりを多量の涙に変えながら、翼は身も心も美空という名前の少女に全てを預けようとしていた。

「.....うっ.....ううっ.....」

泣きじゃくる翼の頭を、美空は子守唄を口ずさむ母親のように、頭を撫でながら宥めていた。

「辛かった.....。怖かった.....。人と接するのも、人に蔑まれるのも、裏切られるのも傷つけられるのも.....。自分から大切な人がいなくなるのも.....みんな怖かった。怖くてたまらなかつた.....」

『ウン』

「だからもう自分しか信じれなかつた。もう傷つくのが怖いから、自分とお金なら裏切らない

から、人を憎めば傷つかないから.....」

『ウン』

「でも.....何より一番自分を裏切ってたのは臆病な自分自身だった」

『翼サン.....』

「ねえ美空ちゃん」

『?』

俺.....もっと自分を楽にしているのかな？

人を.....好きになっても、いいのかなあ.....？

涙で潤んだ翼の素直な言葉は、優しい笑顔の美空の首をゆっくりと縦に振らせた。

それを確認してさらに心のリミッターが外れたのか、翼は動かせる右腕で美空に抱き着き、息を激しく切らせるように泣き続けた。

クールなホスト『翼』ではない  
【Club Pegasus】のNo.1ホストでもない

素直な一人の青年『浅川一也』の本来のさらけ出された裸の姿がそこにあった。

「何で、何でそんなに優しいんだよ……！」  
美空は、そんな『彼』のことを、ただずっと見守るように優しく両手で包み込んでいた。

翌朝一

カーテンから差し込む朝日とともに、翼は目を覚ました。

「ん……」  
昨夜のことがあってか、多量の涙で渴いた頬のパサパサ感に気付く。  
そして何より、自分が美空の膝を枕にして眠っていたことに驚いていた。

「あっ」  
翼はバツと起き上がると、おもむろに美空のことを見上げた。  
美空は「おはよ」と口で言うと、ニッコリと微笑んだ。

「もしかして……ずっとこうしてたの？」  
翼が膝枕のことを問い掛けると、美空は顔を赤らめながらベッドをおりようとしていた。

すると、やはり脚がしびれていたのか、美空の身体は無言のままベッドから転げ落ちる。

「あっ！」

翼は、慌てて右腕と胴体を使い彼女を抱き起こす。

「大丈夫かいっ！？」

翼がそう言うと、美空は笑いながら舌を出した。

「まったく、心配したぞ」

ため息をつきながら、翼もフッと微笑んだ。

そんな二人が互いの唇を自然と重ね合わすまで、そんな時間は要さなかった。

『今、朝ごはん作ルカラ、テレビデモ見テテネ☆』

美空は楽しそうにそう言うと、キッチンの方へと歩いていった。

翼はすっきりした柔らかい笑顔で軽いため息をつきながら、テレビのリモコンに手を差し延べる。

何となくチャンネルをまわしていると、翼はリモコンを持つ手を一瞬で硬直させる。

『なっ、何だって！？』

翼は驚きながら画面に映るニュースに見入っていた。

リモコンを落とした音で何かと思ったのか、美空もキッチンから戻ってくる。

『どうしたの？』と言わんばかりに尋ねてくる美空に気付かないほど、翼はその画面にくぎづけになっていた。

新宿区某所にて発見された、一人の20代男性の刺殺死体のニュース。

その画面の片隅に被害者として映る長髪をなびかせたの男性の顔。

【Club Pegasus】でも一際存在感を出していた見覚えのあるその男とは、

一昨日の"あの時"以来行方不明となっていた光星だった。

「光星さんが……殺された!？」

第29章へ

『ドウシタノ？』

美空の手話による問い掛けにも、翼は反応できずに、光星の死亡を伝えるテレビ画面へとくぎづけになっていた。

「そんな……！まさかあの人が」

翼はそうつぶやきながら、放送されているニュース内容を一言一句聞き漏らさないよう努めていた。

『まさか、アリスの子！？』

翼の脳裏を、まずその名前がよぎった。

光星の"St.Alice"の使用がバレ、口封じのために彼を殺害した……

翼は恐怖を感じつつも、そんなもっともらしい推測を頭の中で浮かべていた。

そんな彼の肩に、美空は不安げな表情で手を置いていた。

我にかえたように、翼は彼女の方を見る。

「ゴメン、急にこんなニュースが流れたもんだからさ」

『コノ人私モ見タコトアル。確カ、同ジオ店ノ人デショウ？』

「ああ」

翼は、【Pegasus】に入店してまだ間もない頃からの光星とのことを思い返していた。

ヘルプのときに無理に飲まされたこと……

店の外で殴られたこと……

ナンバー争いをしたこと……

そして、二日前のあの事件のこと……

今までに起きたことのすべてが、このニュースにより飽和した夢か何かのようになる感覚さえ覚えていた。

休日が明けた、次の日の夕方ー

翼は、包帯で吊った腕を引きずるかのようになり、【Pegasus】へと向かっていた。

例のニュースが流れた昨日の昼間、翼は天馬のケータイへと電話をしたが、無論社長である彼の耳にその情報が入っていないはずはなかった。

翼は焦る気持ちを必死でおさえながら、店のあるビルのエレベーターで4Fへと上がっていた。

「社長！」

エントランスを通り、突然そう言いながら登場した翼の姿に、ミーティングをしていた【Pegasus】の一同は、一斉に驚きの表情を示していた。

「翼！」

「翼さん、その腕……！？」

ざわめくその言葉の中を掻き分けながら、翼は天馬のもとへと近づいていった。

「翼、お前はまだ休んでなきゃだめだろう！」

天馬の心配をよそに、翼は彼に問いただした。

「社長、今はそんなことより、あのニュースは」

「光星のこと……だな」

「ええ」

「今、ミーティングでそのことについて話してたところだ。ニュースでウチの名前まで出た以上、正直芳しい状況ではないのは確かだ……」

天馬は、タバコを手にとりすぐに火を燈す。

山盛りになっている吸い殻だらけの灰皿が、今の彼の心境を切実に語っているようにすら思えた。

。

「社長、もしかして客足にまで？」

翼がそう聞くと、天馬は煙を吐きながら答える。

「この間の光星が店で起こした暴動。そして今回の事件……俺のところにも、すごいほどの連絡がよこされた。掲示板サイトの書き込みも、炎上している状態になっちまってるらしいからな」

「そんな！お客さんの反応は……！？」

「……」

天馬はそれ以上は語らなかった。

「翼」

代わりに答えるかのように、翔悟が口を開いた。

「翔悟さん」

「別に社長もお前に店に来るなど言ってるわけじゃないんだ。今のお前はとにもかくにも休むべきだ」

「でも」

「とにかく、影響があるかは今日の営業を見てからだ。お前は一日も早く包帯が取れるようになれ」

翔悟の言葉に、翼はしばらく考え込んだ末にコクリと頷いた。

「翼くん」

今度は由宇が翼に話し掛ける。

「店を心配している君の気持ちは十分にわかる。だが、今はこらえて怪我の回復に専念するんだ。お客さんや羽月くんのためにも」

「由宇さん」

「僕だって正直なところは不安でいっぱいさ。No.1ホストである君が不在の上に、光星さんがあんな風に刺し殺されてしまったんだからな……」

「……わかりました」

「翼っ」

天馬が再び重い口を開いた。

「社長？」

「すまないな、怪我で療養しなければいけないお前にわざわざ心配させてしまって」

「いえ」

「とにかく、店の営業がどうかは後日お前のところにもちゃんと連絡する。それと……」

「はい」

「わかってると思うが、羽月や愛菜には今は店のことは絶対に言うな。精神的に不安定な今は、二人には何も知らずゆっくりしてもらった方がいい」

「わかりました。じゃあ、俺は失礼します」

翼は、大勢のホスト達が見送る中【**Club Pegasus**】を後にした。

「……」

翼の帰り道を辿る足は遅かった。

怪我をしてるからでも、疲れがまだ残っているからでもない。

ただ、例のニュースや店のことが気掛かりで仕方なかった。

そんな彼が、一人でいるのを拒み美空のもとへ訪れるのは、そう不思議なことではなかった。

『オカエリナサイッ』

"楓"の扉を開けて、まだ客足のない店内から翼を迎えたのは、かわいらしい笑顔の美空が描く手話だった。

いらっしゃいませではなく、"お帰りなさい"

その言葉の変化が、今の彼には妙に心地よいものだった。

今まで孤独感に浸るのが普通に等しかった翼には、まるで温かいもう一つの家族ができたような感覚を与えていた。

そんな人間として何気ない日常のような空間が、ホスト『翼』のプレッシャーや苦悩から彼を解放するには十分だった。

そう、彼は美空という名の少女と一緒にいるだけで、元の『浅川一也』という名前の素直な青年の素顔を、少しずつだが確実に取り戻していたのだった。

人の心からの優しさと温もり.....

それが、今の彼に唯一の安らぐ時間を与えていた。

それから数日の間――

気がつくやうに、翼は半ば同棲のやうに美空と寄り添っていた。

怪我を理由に店を休むやうに義務づけられていた彼には、過去に疲れていた心を解きほぐすやうな時間だった。

また、美空も自分の空気のような『声』と孤独な心を理解してくれる翼に、日がたつにつれ、さらに惹かれていった。

そんな二人が今まで見せたことのないやうな笑顔をさらけ出すのは、もはや時間の問題だった。

「よし.....」

翼は、左腕に巻かれていた包帯をくるくるっと解いていた。

「何とかいけるかな」

翼は左腕を肩を支点にゆっくり動かしていく。

「うん」

『ドウデスカ？』

「無理には動かさないけど……」

翼は最後にそう言うと、ほほ笑みながら美空にウインクをする。

美空もそれを見てか、心配そうにしながらもホッとため息をついた。

「今日から仕事に行ける！」

『大丈夫？ホントニ』

「ああ」

『……』

それ以降、美空は手話をすることもなく押し黙る。

「どうしたんだい？」

翼がそう問い掛けると、美空は何でもないと言うように首を横に振った。

「とにかく店に行ってくるな。社長に呼ばれたんだ」

翼は自分を見送る美空にそう告げ、小走りで【Pegasus】のある方へと向かっていった。

翼が今日【Pegasus】に来るよう頼まれたのは、この一日前の夜にかかってきた佐伯からの電話だった。

例の光星の殺傷事件に加え、翼と羽月の欠勤を原因としてか、【Club Pegasus】への客足が半分以下に途絶えてしまっているとのことだった。

今や常時稼働している翔悟や由宇の指名客すら店へのコンタクトを拒み始め、今までにない閑古鳥がなく状態に、今まさに店全体が危機を感じずにはいられなかった。

「わかりました、必ず行きます」

これまでにはなかった【Pegasus】のピンチに、翼はいてもたってもいられなかった。

そんな翼が、多少の痛みをかかえつつ【Pegasus】に近づいたときには、店のあるビルの前にひしめくカメラやマイクを持つマスコミの団体の姿があった。

そんな彼らが、店に近づいていた翼の存在に気付くには、そう時間はいらなかった。

「あっ、あなた……【Club Pegasus】のNo.1の方ですよね!？」

一人の男性記者が大きい声でそう言うと、十数人ほどのマスコミ団体が一斉にマイクやカメラを翼へとめがけた。

それと同時に、凄まじいまでのフラッシュが翼の姿を照らす。

「どうなんですかNo.1として、この事件をどう思ってるんですか!？」

記者たちが詰め寄りながらも、翼は一切それらに応じることなくエレベーターの方へと向かっていった。

「……」

4Fにあるエレベーターが1Fへと戻ってくるまでのフラッシュをたかれるこの僅かな時間すら、今の翼にはとても永く感じられていた。

チーンという音とともにドアが開いたエレベーターにすぐに取り込み、そそくさとそれを閉じるまで質問とフラッシュの嵐は止まることはなかった。

『ここまでマスコミが騒いでるなんて』

翼は、上のフロアに向かい上昇するエレベーターの中で、並々ならぬ【Pegasus】の現状に気がかざるを得なかった。

そしてそれは、店に到着した瞬間さらなる確信へと変わっていくこととなる。

「おはようございますー」

翼が【Pegasus】のエントランスを通りホールに入っていくと、そこからは言い合いの怒声が響いてきた。

しかし、その怒声は翼のあいさつをきっかけに一旦止まっていく。

「翼……」

「翼さん……！」

店中のホストたちが、一斉に包帯の無い翼の姿に目を注ぐ。

「翼、お前怪我は？」

翔悟が問い掛けると、翼は「大丈夫です」と言わんばかりに大きくうなずく。

しかし、翼がもっと気にしていたのは、ホストたちのいる真ん中で怒鳴る天馬と言い争っていた一人の人物だった。

その人物は、翼の方を振り向くやニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「よう、翼くん！」

「聖さん、でしたよね」

「何だ、俺のことをちゃんと覚えてくれてたなんて嬉しいねえ」

薄いグレーのスーツに身を包んでいる聖は、楽しげに翼へと話し掛ける。

そんな彼に、翼は逆に問い掛けていった。

「聖さん、何故あなたがここに？それにー」

翼は、聖のすぐ横にいる天馬に視線を移した。

「社長に何を言ったんです？」

翼の問いに、聖は軽くフゥとため息をつきながら答えた。

「何をもって人聞き悪いなー。単刀直入に言うとね、前にも天馬に話した通りさ。俺の予測通り、この店は"St.Alice"絡みの騒動で客足がパツタリ減ってしまったから、俺が何とかしてやろうって言ってたんだよ」

「何とか？」

翼は苛立ちを覚え始めた。

「そう、君がいなかったこの数日の間は、常に毎日満卓であるこの店が茶を引いてる状態になってしまってるわけさ。それを俺がどうにかしてやろうと、"とある条件"を言ったら、天馬に思いきり怒られてね」

聖のどこか見下すような口調に周りが抱く苛立ちを感じながらも、翼は冷静に彼の言葉を聞き続けた。

「ある条件とは何です？」

「ヘッヘー、それはねー」

天馬や翔悟たちの眉間に寄せたシワが、さらにその苛立ちを深く形作る。

「【Pegasus】の経営を俺に任せてくれないか……ってね、そう言ったんだ」

「なっ、何ですって!？」

聖のシンプルなまでの要点を絞った発言で、翼はそのまま言葉を失った。

そんな彼の表情を見てか、聖はニヤリとしながら続けた。

「ああ、一つ言っておくけど今すぐってわけじゃないよ？あと1ヶ月、様子を見るつもりさ。ある条件付きでね」

「条件？」

「ああ」

すると、聖はおもむろにタバコに火をつける。

そして煙をふくと同時に、その先の言葉を発した。

「俺が、ここの**No.1**になったら……つまり、君に売上で勝ったらってことさ」

「売上で？」

「ああ。待ってる俺の客にちょっと声をかければ、暇になってるこの店もちよっとは潤うだろうしな。実際売上はこの店にもプラスになるんだ。いや……プラスどころか、俺の売上を超える奴が他にいるかどうか」

聖はそう言いながら、周囲のホスト達を見回す。

翔悟をはじめ、ホスト達は苦渋の色をその顔に浮かべながらも、押し黙っていた。

「ま、他のホストは置いといて……翼クン。俺と勝負してみる気はないか？他の奴らはともかく、天馬に続きあの愛菜さんを射止めたホストだ。それなりの勝負をできると思うんだが？」

「……」

「別に俺はここにいなくてもいいんだぜ？俺を欲しがってるホストクラブは、他に腐るほどあるからな。……まあ、そうなったら、ここは経営的にやばいだろうがな…」

「……」

「そして、翼クン……君に俺と勝負する度胸と力があればの話だが？」

「……」

一方的に言い放つ聖に対し、翼は冷静さを保ちながら黙っていた。  
そして、横にいる天馬に視線を向け、口を開く。

「社長」

「何だ、翼？」

「社長はどうゆう風にお考えなんですか？聖さんの意見を」

「.....経営を譲る気はさらさらでないが、経営者としては聖の案を飲まざるを得ない。今の【Pegasus】を救うには、それしかないだろうからな」

天馬も冷静にそう言った。

聖は口をニヤリとさせるも、翼はさらに続けた。

「社長、ならば店を存続させるためにも、聖さんのことを受け入れましょう。俺が彼と戦います」

「なっ!？」

翼の言葉に翔悟が割って入る。

「翼っ！お前自分が何を言っているか、わかってるのか！？この人はなあ、【Unicornis】の不動のNo.1を張る歌舞伎町でもトップの実力者だぞ！？社長と張り合うまでのような人なんだぞ！？」

「翔悟さん、そんなのやってみなけりゃー」

「確かにお前はNo.1だ.....愛菜さんや他の客の指名もとって、俺なんかをとっくに追い越しちゃうくらいにな。でも、今回ばかりはいくらお前でも相手が悪すぎる！」

「翔悟さん.....俺はー」

「これはお前一人のことで済む問題じゃあー」

翔悟が翼にそう言いかけた時だった。

「翔悟おっ!!」

翔悟はビクリと肩をひそめた。

彼を思いきり一喝したのは、天馬だった。

「社長お?!」

「今のNo.1は翼だ。決めさせてやれ」

「で、でも！」

そこに聖がさらに割って入る。

「翔悟よお……俺も**No.2**に下がったお前のつまらない意見なんか聞く気がないんだよな？俺が自分のこの耳を傾けてやる資格があるのは、その翼クンと天馬の言葉だけだ。お前がでしゃばる場所じゃねえんだよ、な？」

「ぐっ……」

「だからお前は【**Unicornis**】で**No.1**になれず、楽なここに逃げたんだろうがな」  
聖に鋭く言い捨てられ、翔悟はそれ以上口を開くことはできなかった。

「で、天馬よお。俺をここのホストとして雇うんだよなあ？そして、俺が彼に勝ったらこの店譲ってくれんだよなあ??」

「いいも何も、俺は店の衰退より翼に賭けるさ。あとはコイツの気持ち次第だが。翼、お前はあらためてどうなんだ？」

天馬からの問い掛けに、翼は首を縦に振りながら答える。

「やります俺、聖さんと勝負して……勝ってみせます」

翼のその言葉を聞いて、天馬はフッと笑みをこぼした。

「**No.1**のお前がハッキリそう断言したんだ、俺はその言葉信じるぞ」  
翼と天馬はその視線を合わせた。

『違う……今までの翼と、瞳の色や輝きがどこか違う！』

天馬は、翼のそんな変化に薄々感づき始めていた。

「ハハッ！じゃあ決まりだな天馬、翼クン。これでようやく俺の客にも顔向けができるってもんだぜ。じゃあ、来月……7月いっぱいの上の売上の総額で勝負を決める。それでいいな？」

「ああ」

「はい」

翼と天馬が了承したのを確認すると、聖は不敵な笑いをこぼしながら翼に手を差し延べる。

「あらためて、よろしく翼くん。勝負にならんかもしれないが……まあ正々堂々と戦ってくれ。また明日な」

最後に「フン」と鼻を鳴らし、聖は【Pegasus】を後にしていった。

「社長、いいんですか？」

「何だ佐伯」

「いくら翼が今No.1だと言っても、相手があの天才ホストと言われた天城聖じゃあまりにもハードルが高いと思うんですが……」

「確かに。だが、さっきの翼の目を見たか？」

「翼の目？」

「ああ。今までにないような、輝きみたいなものが宿っていやがった」

「社長」

「はっ……何からしくない発言してるのはわかってるんだが……何でかな、今はあいつのことを信じてみたくなかったのかもな」

天馬はどこか嬉しそうにタバコを口にくわえていた。

ミーティングが終わり、ホスト達は営業までの少ない時間をそれぞれに過ごしていた。

「翼」

「翼くん」

翔悟と由宇が翼に声をかける。

「翔悟さん、由宇さん」

「お前、マジで聖さんに挑むつもりか？」

「ええ」

「あの人がどんだけすごいホストか、お前わかって勝負受けたのか？あの人は、俺なんかとは比べもんにならんくらいすごい実力者だ。愛菜さんが入院してる今、勝算はあるのか？」

「正直、勝てるかどうかなんてわかりません。ただー」

「ただ？」

「ホストとして俺を育ててくれたこの店を、潰すようなことはしたくないんです。それに……」

『ここは、俺と羽月を出会わせてくれた場所だからー』

翔悟と話す中で、翼はいつも元気でここで接客していた羽月とのことを思い返していた。

「そっか」

由宇がそう言いながら、翼の右肩にポンと手を置く。

「**No.1**の君がそう言うなら、僕は何も言わない。力になれるかわからないが、陰ながら応援するよ」

「由宇さん」

「で、いいでしょ、翔悟さん？光星さんのこともあって辛いけどさ、今は翼くんを支えていこうよ」

由宇がそう言うと、翔悟は口を尖らしながら顔を背ける。

「……だけだぞ」

「えっ？」

「今回だけだぞ。納得はしてないけど社長の判断でもあるし、店が潰れるのも聖さんの下にまたつくのも嫌なだけだからな」

視線は合わせなかったものの、翔悟の遠回しな言葉は、その場にいる翼と由宇にはしっかりと伝わっていた。

「まったく、素直じゃないなあ」

由宇がため息をつきながらそう呟くも、翼の内心はどこか軽くなっていく感覚を覚えていた。

『【**Club Pegasus**】は、絶対に俺が守らなきゃ』

新たな決意をそれぞれ胸に、翼 v s 聖の

店の命運をかけた**No.1**ホスト同士の熾烈な勝負の幕が、今明けようとしていた。

第30章へ

聖との店の存続をかけた勝負を宣言してからの翌日、翼が完全復帰を果たした【Club Pegasus】は、にわかながら雰囲気を取り返し始めていた。

しかし、以前のように満卓の様子は見られず、ちらほらと空席が目立つことも事実だった。

翼をはじめ、【Pegasus】の一同はこの状態を何とか回復しようと努めてはいたが、『謎の薬物』と『殺人』のキーワードが絡んでか、店への客足は芳しいものではなかった。

「くそっ、こっちもダメか」

ケータイを睨みながら翔悟がつぶやく。

「翔悟さん、どう？」

「難しいな、こりゃ」

翔悟と由宇は深くため息をつく。

「何とか翼くんが復帰してくれたから入ってるけど、彼のお客さんだって躊躇してる人もいるはずだしね……」

「ああ。だが由宇よ」

「えっ？」

「何であんなことしちゃったんだろうな……あいつ」

「翔悟さん」

「俺、許せねえよ。あいつをあんな風にしちゃった"Alice"ってもんがよ」

「……」

由宇の目に映る悩ましげな翔悟が思うのは、先日事件の当事者となった光星のことだった。

翔悟と光星は、【Unicornis】時代から共に切磋琢磨してきた間柄だけに、その間柄を知る由宇は何も言うことはなかった。

「翔悟さん、光星さんのことは僕も悔しいよ。でも、今はお店のことを考えようよ。一番つらいのは社長なんだし」

「ああ、そうだな」

「それに、今日からでしょ？ 聖さんが出勤してくるのって」

「ああ」

時間は午後7時を過ぎていたが、あれだけ大口を叩いていた聖が出勤してくる様子は未だなかった。

翔悟と由宇は、それにも目をやっていた。

『このまま来なければいい』

翔悟たちの頭の中では、そんな言葉すら浮かんでいた。

一方、フロアで接客している翼はというとー

「もう、心配したよ～。翼が怪我したとか聞いたからさあ、あたしてつきり光星と同じ事件に巻き込まれたのかって……」

「ああ、心配かけてゴメン。事件があったときにタイミング悪くなった感じで、俺は自分のドジで転んだだけだからさ！」

「それならいいけどさ……ってよくもないか。でも、ホント翼が何事もなくてよかった」

「ありがとう、千春ちゃん」

「でもさこの店、やっぱりお客さん減っちゃったんだね」

「うん……まあ、あんだけマスコミとかもたきつけてきたしね。でも大丈夫、【Pegasus】はこれからもいつも通～り楽しいトコだから！」

「だよね！てか、あたしは【Pegasus】ってよりも、翼に会えればいいんだよね☆」

翼はとにかく女性客の不安を取り除きつつ普段通り楽しんでもらうことに……

そして自分が**No.1**なんだという責任感が、他のホスト達への見本ともなるように必死で接客に努めていた。

とにかく、やるしかないー

そんな姿勢が、窮地に陥っていた【Club Pegasus】全体の調子を、少しずつではあるが元に戻そうとしていた。

しかし、そんな中一組の新規の女性客が来店することとなる。

「いらっしゃいませえ！！」

ホストたちが元気よく迎える中、エントランスから入ってきたのは、自信満々な聖に連れられた一人の白いドレスを身に包んだ美しいホステス風の女性だった。

そこへ、佐伯が早速駆け付ける。

「いらっしゃいませお客様。当店は初めてでございますか？」

佐伯がそう言うと、その女性客はニコリとしながら答える。

「ええ。私、彼に連れられてここに来ました」

彼女は、聖に腕を組みながらにこやかに店内を見渡す。

「へえ～。いいお店ね。【Unicornis】より綺麗なんじゃない？」

「かな？まあ、近々俺のものになるからな…。あ、佐伯さん……電話で話しといた席にご案内しますね」

そう言うと、聖と女性客はフロアの方へと優雅に歩いていった。

「聖の奴め、いきなり彼女を連れてきたか」

佐伯一人となったエントランスに、天馬が現れる。

「彼女？社長、聖さんがお連れになったあの人は？」

「歌舞伎町の人間でも、お水の世界じゃ知ってる人間は知ってる、六本木の大家だ」

「六本木??では彼女は」

「ああ」

天馬は、ひと呼吸置きながら答えた。

「彼女の名前は【華月 結奈<カツキ ユウナ>】。六本木のある店で最高のカリスマホステスと呼ばれる人物だ」

天馬がそう言う中、聖は結奈とともにソファへと腰をおろす。

「おーい、そのの」

聖はおもむろに、フロアに立っている一人のホストをヘルプとして呼んだ。

「は、はい」

ホストが聖と結奈の座る前に駆け付けると、聖はパチンと指を鳴らしながら彼に言った。

「とりあえず、ゴールドな」

「えっ？」

「ゴールドだよゴールド、ドンペリの。在庫がないわけじゃないよな？それともお前、天馬からそんなことも教えてもらってないのか？」

「あ、わかりました。すぐにー」

「コールもすぐによこせ。他の指名がないホスト全部よこしてな」

聖の見下すような言葉が、少しずつ店内をどよめきに導いていった。

「い、いきなり最初からゴールドかよ……。相変わらず派手にやらかしてくれるぜ」  
翔悟がその光景を見つめながらつぶやいた。

そして、聖の隣で優雅な笑みを浮かべる結奈の方に目を向ける。

『結奈……』

彼女を見つめながら心の中でつぶやく翔悟の表情は、次第に切なさを帯び始めていた。

「翔悟」

「しゃ、社長」

「見ると辛いかな、彼女を」

「いえ、もう昔のことですから」

翔悟は小さい声でそう言いながら、天馬のもとから離れていった。

「翔悟……」

天馬は、いつになく小さい翔悟の背中を、ただ見守るように見つめていた。

一方

翼は、何組も訪れた指名客のいるテーブルを回りに回っていた。

「翼よかったよお。何もなくて……」

梨麻は、泣きながら翼の肩へと抱き着いた。

「梨麻」

「ホントにね、心配したんだよ……。翼あの時光星さん追ってたのわかるし、あのニュース見てからもう二度と戻らないんじゃないかって思ったの」

「心配かけてゴメン。でも、俺は転んで肩を打っただけだから」

「ホントに？刺されたりしてない？」

「ああ、転んだ"打撲"はまだ痛むけど、もうお店では支障はない程度だし、俺は全っ然大丈夫だよ！」

「よかった……ホントによかった……」

梨麻が泣きじゃくる中でも、店の中では連続したシャンパンコールが次々ととどまることなく巻き起こっていた。

「あの人、今までお店では見たことないけど、だれ？」

今の今まで泣いていた梨麻も、連続するシャンパンコールにはさすがに気にせざるを得なかった。

「ああ、今日からこの店に入った聖って人だよ。【Unicornis】から移籍になった人でね」

「【Unicornis】って、前に一斉摘発になった、あの！？」

「ああ、実は俺が休んでいない間にも警察がここに来たらしいんだけどね。事情聴取だけで何とか大丈夫だったらしいけど」

『んー？』

翼はここで、一つの疑問を抱いた。

『さてよ……【Unicornis】をあんな簡単に摘発に追いやった"St.Alice"の騒動に絡んでるのに、そもそも何で今普通に営業ができてー』

その時、翼はあるコトを思い出した。

『まだ噂の段階にしろ、"St.Alice"を仕込んだアリスの使徒は、この店の中にいる……。ちょっと待て』

翼は店の中をこっそり見回した。

一見日常のように落ち着いているこの中に、『アリスの使徒』と名乗る凶悪な人物がいる……

翼は不本意ながらも、ある人物へ徐々に疑惑の目を向け始めていた。

『いや、そんなはずない……あの人が一』

「どうしたの翼？ぼーとしちゃって」  
梨麻の言葉で、翼はハッと我に返る。

「あっ、ゴメンゴメン。ちょっと頭も打っちゃったかな～なんて」  
「もう」  
翼と梨麻は、クスクスと笑い合った。

「さあ、今日は翼の復帰祝いであたしもシャンパン開けるよお〜！」  
梨麻は、それまでの悲しい表情を無理矢理ふっ切るかのように、声を上げた。

他愛のない話もあり、光星の事件で果穂が悲しみ落ち込んでいることまで、翼はいつものように親身になり接客していった。

しかし、彼の頭の片すみには、先程の一つの疑問が常にこびりつくように残っていた。

アリスの子の正体ー

謎に包まれたこの存在を、翼は気にせずにはいられなかった。

そんな中、【Club Pegasus】は何とか盛り上げをキープしつつ、この日の営業を終えていった。

「お疲れっす！！」

「お疲れ様っす！！」

【Pegasus】の一同は営業終了後の最後のミーティングを終え、各々に解散していった。

「よお翼くん、お疲れい」  
聖が翼へと話し掛ける。

「お疲れ様です、聖さん」  
翼も冷静な口調で、それに返す。

「しかしさすがだな、翼くんは」  
「えっ？」  
「今日一日見てたけど、わずか半年でここまで来ただけのことはあるよ。天馬のやつが認めるだけはあるな」と  
「どうも」  
「まっ、7月いっぱい締めまで、お互いがんばろうや」

聖は翼の左肩を軽くポンと叩くと、すでに営業終了後の店から出るためにエントランスの方へと歩いていった。

『天城……聖』

翼の視線は、その視界からいなくなるまで、聖の堂々とした後ろ姿を捉えていた。

「翼、ちょっといいか」  
天馬が翼へと声をかける。

「社長？」  
「どうだ、今日の聖を見て？」  
天馬と翼は、同時に軽く息を呑んだ。

「まだ初日なのでまだ詳しくは何を言っているのかですが、実力はとてもある人ですね」  
「そうか。実際に、お前には自信はあるか？」  
「それは何とも言えませんが……ただー」

「ただ？」

「絶対に、負けられません」

「そうか、それを聞いて俺も心強いぞ。それに……」

天馬は、一本のくわえた煙草に火をつけた。

「今日は荒れるぞ、うちは」

「えっ？どういうことですか？」

翼は慌てて聞き返した。

「今月、翼は誕生日だよな」

「え、ええ。28日ですが？」

「だったら勝機はそこだ。バースデーイベントだ」

「バースデーイベント……！」

「お前はうちの**No.1**だ。もちろんバースデーは開催するし、そうすればお前の売上もさらに跳ね上がるだろう」

「そ、そうか！それなら！」

翼が意気揚々とそう言ったが、天馬は冷静な表情を保ったままだった。

「社長？」

「だがな翼……幸か不幸か、偶然にもその日の三日前……25日は聖の誕生日だ」

「なっ…！？てことは」

「ああ。荒れるってのはそうゆうことだ。光星の件が重なって弱ってる現在のうちの店を、自分のバースデーを利用して乗っ取る気だ。今日いきなり、六本木から太客の一人を連れてきたのも、あいつなりの宣戦布告だろう」

眉間に皺を寄せた天馬は、煙をふきながらつぶやいた。

「翼……現役のときの俺は、愛菜や他のお客の力があつたのもあり、何とか聖には勝てたが……今のあいつはあの時以上の売上を出すホストに成長しているかもしれん。それでもー」

「それでも俺はあの人に勝って、この店を守ってみせます」

翼は、鋭い眼差しを向けながら天馬に言い放った。

『やっぱりだ。やっぱり今までの翼と何かが違う』

翼に対する違和感にどこか気付いていたものの、天馬はそれ以上は何も言わなかった。  
何より、今の【Pegasus】を救う唯一の勝機は、翼のバースデーイベントだということを天馬自身も理解していたからだった。

「とにかく……俺は今月のあの人の勝負、全力で挑んで勝ってみせます」

翼はそう宣言し、納得した天馬に見送られるように【Pegasus】を出た。

店からの帰り道、翼は歩きながら考え込んでいた。

『突き止めた方がいいだろうな』

何かを思い立つと、翼はそのまま美空のもとへと向かっていった。

『オカエリナサイ☆』

"楓"に戻ると、美空が明るい笑顔で翼を迎えた。

「.....」

『ドウシタノ？』

「あ.....いや」

翼は、考え込んだ末に美空に問い掛けた。

「なあ、あの時ここで無銭飲食しようとした酔っ払いいたよな。あいつの社員証、あるかな？」

『ウン。取りニ来ルンジャナイカト思ッテ、トッテオイタケド.....ドウシタノ？』

「明日、昼間にそいつの会社に行く」

『ソノ人ノ会社ヘ？ドウシテ？』

「ちょっとね、確かめたいことがあるんだ。そこの社長さんとは、顔見知りなもんでね」

翼は、『株式会社アサカワカンパニー』と表記された社員証を鋭い目付きで凝視していた。

午前10時差し掛かろうとしていた晴れた日の朝、翼は『アサカワカンパニー』の壮観なる本社ビルの前へと来ていた。

「.....久しぶりだな、ここに来るのも」

スーツをビシッと纏った翼は、大きいエントランスをくぐり抜け、受付のところまでゆっくりと何かを噛み締めるように歩いていった。

カツン.....カツンと鳴る自らの足音がいつも以上に耳に響くのは、久しぶりに対面する社長である父親への緊張感だけではなかった。

「あの」

インフォメーションに座る受付嬢二人に話し掛けると、彼女達は数秒翼のことを見つめた。

明らかに営業にも来たわけではないその風貌に、彼女達はただただ戸惑うばかりだった。

「あの.....恐れ入りますが、アポイントか何かは？どういった御用件でしょうか？」  
一人の受付嬢がそう言うと、翼は再び口を開く。

「社長に一言お伝えください。"一也"が来た.....と」

「そ、そう申されましても、ただそれだけでは社長のところにお通しするわけには—」  
受付嬢がそう答えると、隣にいる翼から見て右側のもう一人が何かに気付いたようにそこへ割って入る。

「あの.....もしかして、一也様ですか？社長の息子様の」  
彼女の言葉に、翼はゆっくりと首を縦に振った。

「ええ、そうです。以前と雰囲気は変わっているかもしれませんが、僕は"浅川一也"です。社長につないでいただけますか？ちょっと急な用事なんです」

「は、はい。すぐにおつなぎします」

受付嬢たちは、翼の正体に気がついた途端に態度を変え、社長室へのコールを開始した。

すると、すぐに通話は終わり、彼女たちは「どうぞ」と言いながら翼をエレベーターの方へと導いていった。

「ありがとうございます。突然のことで驚かせてしまってすみません」  
翼は、受付嬢二人にそう言って頭を下げると、一人社長室へと向かっていった。

「一也さん、あんなにホストっぽくなって……。今までどこで何をしていたのかしら」  
受付嬢たちは、そうつぶやきながら、翼の後ろ姿を見つめていた。

翼は上昇していくエレベーターの中で、不思議なほどの懐かしさと緊張を同時に感じていた。

あの時以来、亀裂の未だ入ったままの状態の父親と対面することは、彼の心拍を著しくしていた。

エレベーターをおり、翼は【社長室】と表示されているドアの前へと立った。  
胸の鼓動がさらに激しさを増していく中、彼は優雅な雰囲気さえ漂うドアに二回ほど握りこぶしを「コンコン」と当てる。

「どうぞ」  
閉ざされたドアの奥から、過去の悔やみと懐かしさを同時に彷彿させる声が翼の耳へと届いた。

「失礼します」  
翼は、【一也】とは名乗らず、そのままドアをゆっくり開け、社長室の中へと足を踏み入れていった。

「……」  
中には、窓から外を眺めているのか、ドアにいる翼に背を向けている背広姿の男性が立っていた。

翼は、ドアをガチャリと閉めると、その彼の方へとゆっくりと足を進めていった。  
十歩ほど歩いてソファへと差し掛かったところで、翼はその足を止める。

その後、二人の間には重い沈黙が数分ほど流れた。

お互いどう切り出すかを探り合うかのように、翼はめの前に立つ父の背中を見つめ、父はわずかに肩越しに翼を見る。

しかし、そんな重苦しく...長く感じられた沈黙は、父の言葉によって破られた。

「久しぶりだな、一也.....」

「ええ」

翼も一言のみで反応する。

「元気だったか」

「ええ...」

「ちゃんと、飯は食ってるのか」

「じゃなきゃ死んでます」

二人の背を向けたままの会話は、再びそこで一旦途切れる。

しかし、沈黙はそう長くは続かなかった。

「一也、こんな会話をするためにわざわざお前が来たわけじゃないんだろう？」  
何かを読み取ったように、父は翼へ問い掛ける。

「ええ。ホントは顔も見たくもないし、話したくもない」

翼も冷静な口調で返す。

「なら単刀直入に話の要件を切り出せ。私もそんなにヒマではないんだ」

「なら話が早い。じゃあお聞きします」

翼は緊張を抑えるようにひと呼吸おくと、改まったように再び口を開いた。

「単刀直入に聞かせていただきます。この会社、【アサカワカンパニー】と星羽会のことについてです」

翼がそう言い切った瞬間、父は何かにとっても驚いたのか、翼の方を振り向いては、まるで心臓が止まったかのように固まった。

「?どうしたんです?」

「一也お前、どうしてそんなことを!？」

「??」

「どうしてお前が星羽会のことを!？」

意味もわからず声を荒げる父に、翼はキッと鋭い視線を送った。

「関係あったんだ、ホントに？」

「一也.....お前何を」

「俺は今、歌舞伎町の一部で騒動の発端になってる"星羽会"と"St.Alice"のことを探ってるんだ。調べてたら、この【アサカワカンパニー】の名前にたどりついたんだ」

「!」

「どういうことなんです?この会社を含め数社が、"St.Alice"に関与していた事実って？」

「.....」

「この薬物の件には、俺の友人も絡んで酷いめにあわされたんだ。黙らずに教えてくださいませよね？」

「.....」

父は、息子である翼の前で、しばらくの間黙秘を続けたが、もはや言い逃れすらできない状態であることは、自らが一番よくわかっていた。

そして、父は翼の方へと身体の正面を向けた。

「私も噂で都内の一部にアリスの子が出没し『アレ』を再び流出させているなどと耳にしたが...  
...まさかそれが事実で、しかもお前が絡んでいるとはな。皮肉なものだ」

「教えて下さい。"St.Alice"と.....星羽会とこの会社に、昔一体何があったんですか?星羽会とは、そしてアリスの子とは一体何なんですか!？」

翼が問いただすと、父は何かを覚悟したかのように、ゆっくりと語りだした。

「星羽会のことだが.....そのことに触れるには、我々がしてきたことを先に話さなければならぬ  
いだろうな」

「してきたこと？」

「そうだ。一也、お前も知っているだろう。我が社の製造・流通における部門では、薬物を取り扱っていることを」

「ああ」

「そこに、薬物開発に携わっていたある一人の人物がいたのだ。彼は、天才的なその技術と海外の知識を融合させ、ひそかに我が社の中である実験を進めていた」

「実験……？まさかー」

「そうだ。"St.Alice"の前身ともなる、薬物兵器の実験だ。そしてー」

父はひと呼吸おいた。

「彼の名前はルペス・クレイアード。星羽会のマザーと呼ばれたアリス・クレイアードの実弟だ」

翼は目を疑った。

「ルペス・クレイアード……！あの"手紙"に載っていたルペスがアサカワカンパニーにいたって！？じゃあ、"St.Alice"を造って流通させたのは……！」

翼の言葉に父は目を背けながら答えた。

「そうだ。あの薬物兵器"St.Alice"は、我がアサカワカンパニーの手によって造られたのだ」

父が自分の前で語り明かし始めた衝撃的事実ー

しかし、さらなる事実が息子である翼(一也)を襲おうとしていた。

翼と父は、今にも火花が激しく飛び散りそうなその鋭い視線を再びぶつけ合った。

「では聞かせてもらえますか？アサカワカンパニーと星羽会のことを」  
翼がそう言うと、にわか俯く父は何かを覚悟したように語り始めた。

「どこから話せばいいか……。まず……。我がアサカワカンパニーは、30年前に薬品事業に手を出し始めていた。高度経済成長を過ぎ、バブルと呼ばれていたあの頃、アサカワの当時の社長は新たに薬品事業を展開することを思い付いていたんだ」

「当時の社長って」

「私の父……。もう亡くなったお前のおじいさんだ。あの方は、当時には斬新なその経営理念により、日本には無い新しい薬品開発のプロジェクトを施行していたんだ。彼は、その際に一人の天才科学者を海外から招いた。それが、ルペス・クレイアード博士だ」

父の言葉に、翼はただ息を呑みながら聞き入っていた。  
父は続けた。

「当時、前社長は正体を知らずルペスを薬品部開発プロジェクトの責任者へと任命した。彼はアメリカでの実績もさながら、どこの会社や研究所もが欲しがらる奇跡の人材だったからだ」

「……」

「だが...それこそが、ルペス...星羽会の狙いだった。当時目立っていなかったにせよ、星羽会信徒である素性を隠せたルペスにとっては、我が社の開発や研究における全ての資産が利用できる好都合なものに過ぎなかったのだ。彼は製品開発の合間に、ひそかに"**St.Alice**"の研究と開発...流通に至るまでの全てを計画していた……」

「ルペスは開発をする場所と予算のためにそんな？てか、ルペスのその計画に一体誰が気付いたんです？」

翼が問い掛けると、父は軽く咳き込みながら再び続けた。

「あの時、何も気付かずにいた私達にルペスの企みを教えてくれた一人の女性がいたんだ。彼女は自らの危険も省みずに、当時恋人として交際していた私にそのことを伝えてくれたんだ」

「恋人って……？」

「もう今や私とは30年以上になる家内……。つまりお前のお母さんのことだ」

「な、何だって!？」

思わぬ言葉に、それまで冷静さを保っていた翼は次第にその表情を驚きへと変えていった。

「どうゆうことなんですか!？どうして.....あの人.....！」

「お前や圭介には黙ってはいたが.....母さんは、星羽会信徒の家系の人間だったのだ」

「なっ!？」

翼が言葉を失う中、父はさらに続けた。

「当然私も驚きはしたがな。だが肝心なのはそこじゃないんだ。母さんは、自分の父親.....ようするにお前のもう一人のおじいさんが幹部信徒だったこともあり、ある恐ろしい計画のことを耳にしていたのだ」

「まさか.....【Mother-Project<マザー・プロジェクト>】!？」

翼が聞き返すと、父はうなずきながら続けた。

「表は善のはずだった星羽会とアリスの計画に恐ろしさを感じ始めていた母さんは、そのマザー・プロジェクトの全容を私達に教えてくれたのだ。いや、それ以上に助けを求めてきていたんだ」

「助けを？」

「星羽会代表アリスは、一部の信徒を使って"St.Alice"の実験をしようとしていたんだ」

「何だってそんなこと.....！」

「そのとおりだ。当時若く信教に馴染みの比較的少なかった母さんは、"St.Alice"を自ら服用することなく私のところへとやってきたのだ。もうすでに.....家族が全員死亡した深い悲しみを背負ってな」

「自ら服用?家族が??」

「アリスは、マザー・プロジェクトの第一段階と称した『実験』して、"St.Alice"の服用を一部の信徒に課したんだ。もちろん母さんの家族にも.....人の狂気を呼び覚まし、命を縮める、あの殺戮兵器をな!!」

話が進むたびに、父の声が強さと切なさを増していった。

翼は、それをそのまま聞き続けた。

「聞いた話だけが……母さんの家族は、母さんが見ている前で狂ったような地獄絵図の中で殺し合って死んでいったそうだ……」

「……！」

「私は**"St.Alice"**の開発と流通を食い止めるべく、社長とルペス……そして共に開発に携わっていたKK社に掛け合った」

「KKだって！？俺があの時勤めていたあの会社も**"St.Alice"**に関わっていたなんて！」

「うむ。しかし、時は遅かった。星羽会は、時間をかけて日本を中心にマザー・プロジェクトを展開し、その名の通り世界を**"母"**に帰すように破滅に導こうとしていた」

言葉を失い続ける翼を前に、父の言葉から出る事実はまだ終わらなかった。

「その後、ルペスの所業を追求した前社長と私だったが、気付いたときには彼の姿は無かった。警察でも彼の行方を追うこともかなわずな。しかし、その後ルペスは長い年月をかけ**"St.Alice"**をさらに完全なものとし、10年ほど前……それをその先駆けとして新宿の歌舞伎町に流出させた。**"St.Alice"**は、街の一部に流出し、高額な取引にさえも使われるような、狂気の薬物として世に出ることになってしまったのだ。それがお前もニュースなどで知っているであう、あの一」

「**"星羽会事件"**ですね？」

父はゆっくりうなずいた。

「そうだ。街に流出させるだけでなく、信教の行動自体に不信を抱いていた当時の信徒らを実験台とし、虐殺をしていたのだ」

『そうか……愛菜と羽月の家族はそれで……！』

翼は、以前愛菜から聞いていた家族のいきさつと、目の前にいる父からの話を照らし合わせていた。

父はさらに続けた。

「世間に恐ろしい計画が『神代』という名の人物の手によって漏れ、アリスもろとも星羽会は殲

滅されたはずだった。が……まさか、こんな事態が起きてようとはな。しかも……こんなときに！」

「こんなとき？どうゆうことですか？」

突然苦渋の表情を浮かべた父に、翼はストレートに問い掛ける。

すると、父は右手で顔をおさえながら答えた。

「よく聞け、一也……」

「何だよ急に」

「現在母さんが病気なのは知っているな？」

「ええ」

「急に病気になったことも、病状の進行が著しいのも知っているな？」

「ええ」

「あの時……お前が紗恵さんを家に連れてきたときに、母さんが不可解なほどの行動をとったことは覚えているな??」

「ええ。それが何か……？」

そう口にしたとき、翼はハッとしながら目を大きく見開いた。

「それって……まさか??」

そう口にした翼の頭の中で、恐ろしいイメージが電光石火のごとく走った。

しかし、父はすぐにイエスともノーとも答えなかったが、わずかな沈黙の後に苦しげに再び口を開いた。

「母さんは……"**St.Alice**"に冒されている」

「えっ……？」

二人の間の時間が止まったかのように、再び重い沈黙が訪れた。

しかし、それも長くは続かなかった。

「あの人が....."St.Alice"に？そんな、30年前の"実験"のときは、服用しなかったはずでは！？」

翼がそう声を上げると、父は半ば顔を臥せながら重い口を開いた。

「私もいつどのようにして使用されたのかまではわからん。ただ、母さんは何らかのタイミングで"St.Alice"を服用していたんだ.....」

「.....そんな.....」

冷静さを失い、言葉さえも翼は失っていった。

しかし、父の口から語られる事実は、まだ終わってはいなかった。

「一也.....今でもお前は母さんを憎いだろうが、母さんも星羽会と"St.Alice"に運命を狂わされた被害者なんだ。そこだけは理解してくれ」

「.....」

「それにー」

「？」

「家族が無くなった母さんには、10年前まで当時離れて住んでいた、たった一人の肉親.....兄がいたんだ」

「兄.....？初めて聞きましたが、それがどうしたんです」

「.....」

父は突然黙ってしまった。

それを不振に思った翼は、追求するように父のことを問いただした。

「どうしたんです、急に」

「.....これは"St.Alice"製造に加担した私の因果応報とも言えることなのかもしれないが.....」

「??」

「母さんを匿った私と彼女への報復だろうか。星羽会は.....アリスは.....」

父は息を呑んだ後、額から汗を垂らしながら次の言葉を放った。

「裏切り者の親族として……『みせしめ』という形で、母さんの兄夫婦を虐殺したのだ」

「虐殺!？」

「そうだ。表向きは強盗事件などとして処理されてはいるが、あれはどう見てもアリスが手を下した事として間違いないだろう。彼らには、まだ年端もいかない子供たちもいたというのに……」

「子供たち？」

「母さんの兄夫婦には、その当時15歳の娘さんと10歳の息子がいたらしい。何故か奇跡的にその子供たちは無事だったらしいが……」

翼は思わず目を見開いた。

父から出たキーワードにより、彼は以前酔った羽月がふと漏らした言葉を思い出していた。

『10年前……15歳の娘と10歳の息子……事故に見せかけた両親の虐殺……』

"翼くん、俺の両親はアサカワカンパニーの浅川って男に殺されたんや……!"

翼の中で恐ろしいまでの不安とともに、いくつもの絡みあった糸が解け、一本になろうとしていた。

そして、翼はあらたまったように父に問い掛ける。

「あの……旧姓……あの人の……オフクロの旧姓は、何て？」

「母さんの旧姓??……確かー」

父の言葉言葉に、翼は息を止めたまま聞き入っていた。

そしてー

「確か『星宮』だな」

『……星宮……！』

翼はガクリと膝をついた。

「一也、どうしたんだ!？」

父が手を差し延べると、翼は「大丈夫」とばかりに、ゆっくりと片足ずつ立ち上がり身体を起こしていった。

「一也？」

「もう……いいです」

「いい？」

「もう、十分聞かせていただきました……忙しい中、貴重な時間をすみません」

翼は、力無く最後に父にそう告げて社長室から出るドアにゆっくりと歩いていった。

「おい、一也！」

父が翼を呼び止めた。

「はい」

「お前が何を考えているかはわからんし、何をしようがこれ以上文句は言わん。だがー」

「……何です？」

「星羽会のことには、お前に関わって欲しくないんだ……。親に……あまり心配をさせるな」

背中越しの最後の父の声が、どこか潤んでいたのは翼の耳にはハッキリと伝わっていた。

「では、失礼します」

翼は、そう言って社長室を後にした。

そして、直ぐさま人事部のある場所へと向かった。

「な、何ですかあなたは！」

社員の一人に咎められつつも、翼はある人物のところへと一直線に向かっていった。  
ホスト風の翼の姿に、人事部内の職員たちが一斉に彼に注目する。

「あっ、き……貴様は！」

「その節はどうも、林さん」

すると、翼は持っていた社員IDを林の顔にたたき付けた。

「ぶっ！」

林は軽い奇声を上げると、自分を見下ろす翼をキッと睨みつける。  
しかし、翼はさらに強い眼光で睨み返ししながら、口を開いた。

「社員証にもらった名刺入れるまで風俗遊びが好きなのはともかく……ストレスで無銭飲食かますなんて言語道断なんだよ！！」

「な……き、貴様！何があってそんな！」

林がうろたえていると、周りの職員たちが慌てて彼を止める。

「林さん！こちら、社長の御子息の一也様ですよ」

職員言葉に、林はしわを寄せていた眉間を一瞬で緩め、口をあぐりと開けた。

「えっ……か、か、一也様……？」

「フン……。次あんなふざけた真似したら、承知しないからな。……みなさん、業務中失礼しました」

翼は人事部内すべてに頭を下げると、すぐにその場を後にした。

そして、受付嬢に來客証を返し、そのままアサカワカンパニー本社ビルを離れていった。

「そんな……そんな……！」

翼は小さくつぶやきながらゆっくり歩き続けた。

『オフクロが元星羽会の信徒で……愛菜たちの父親が兄弟だったなんて……』

予想外の事実、翼はぼんやりとしながら道を歩き続けていた。

ポツポツと降り注ぎ始める小雨にも気付かないほど、翼はただ一点のみを見つめてフラリと自らの身体を移動していた。

「♪♪～♪♪♪～」

その時、翼のケータイがメールの着信を知らせる。

それにハッとした翼は、久しぶりに我に返ったようにケータイを右手に取り出した。

「誰からだ？」

翼は受信メールフォルダの未読覧を確認する。

すると、その差出人名には現在入院しているはずの愛菜の名前が表示されていた。

「愛菜っ！」

翼はケータイの液晶にくぎづけになる。

彼はすぐに本分に目を通すと、すぐにケータイを折りたたみ、それまでゆっくりだった足の動きを徐々に早めていった。

『愛菜……！』

翼は、何かに引き付けられるようにある場所へと向けて走りだしていた。

約1時間後—

翼は、愛菜と羽月が現在も入院している西総合病院へとやってきた。

タクシーから急いでおりた翼は、一目散に愛菜のいる病室へと向かっていった。

「ちょっと！病院内は走らないで下さい！」

自らを注意する看護師の言葉が耳に入らないほど、翼は急いでいた。

父から聞いた信じがたい真実……そして、突然自分を呼び出した愛菜の意図……

それだけ、彼の心を様々な思いが駆り立てていた。

【星宮茜】と表記されたとある一室の前に立ち、翼は「コンコン」とドアをノックした。

「愛菜、翼だけど……入るよ」

すると、閉ざされたドアの向こうからは「ウン」と小さくか細い声が聞こえてくる。

翼はひと呼吸おくと、ゆっくりと横開きのその扉を右から左へと開けていった。

「翼……」

翼が病室に入ると、どこかやつれた感のある愛菜が小さい声で彼のことを迎えた。

時間がたち落ち着いてきたのか、ベッドを起こし上体をそこへよっ掛からせている彼女は、やつれていても独特の美しい雰囲気は漂わせていた。

いつも巻いて盛り上げていた髪の毛は、左側にスッと寄せるように下ろしている。

それが、翼には妙に新鮮なものでもあった。

「愛菜、大丈夫なのか？」

「ええ。今は少しずつだけど、落ち着いてきてるわ」

「食事、ちゃんと摂ってるの？ちょっとだけ痩せた感じがしたからさ」

「昨日あたりからは……ね。心配させちゃって、ごめんなさい」

想像以上にはきはきとした口調で話す彼女の様子に、翼はどこかホッと胸を撫で下ろしていた。

「翼ごめんね、お昼から急に呼び出してしまってた」

「いや、いいさ。俺もちょっと用事で外出していたし、愛菜のこと気になってたから。コレ、途中で愛菜が好きなクッキー買ってきたから」

「うん、ありがとう。傷……大丈夫？それに、聖とのこともあってお店も大変なんでしょ？」

「うん。でも、何とかやってるよ」

愛菜は湯呑みの中を一度口にすると、ゆっくりとニコリと笑った。

しかし、それが今の彼女にとっては精一杯の笑顔であることを、翼はひしひしと感じずにはいられなかった。

「愛菜」

翼が話を切り出した。

「話したいことって？」

「.....翼」

「うん？」

「単刀直入に聞いてもいい？ちゃんと、答えてくれる？」

「ああ」

すると、愛菜は途端に顔をうつむいた。

「メールでも言ったように、翼に聞いたかったのは.....羽月くんのこと.....」

「羽月.....？」

翼は、自分の心拍数が少しずつ上がっていることを覚え始めていた。

「この間、光星に襲われて部屋に閉じ込められてたときね.....。羽月くんが翼をかばって背中を思いきり刺されたとき.....」

「.....」

「私見たの...あの子の背中に、私と同じ"模様"があるのをー」

「.....」

「私の見間違いかと思ったけど、やっぱりそうは思えなかった。あれは、うちの家系の.....」

愛菜は言葉を一瞬詰まらせた。

その先にある言葉を翼に対し口にするのを躊躇していた。

だが、ゆっくりと...何か重たく硬い物をこじ開けるように、彼女の言葉は続いた。

「.....星羽会の信徒のある家系の証として刻まれたもの。私の背中にある同じものが.....あの子の背中には存在していたわ。そして、何より私と直人しか持っていないはずのあの写真を持っていた」

「.....」

「ねえ、翼、正直に答えて」

「うん.....」

「あの子は.....羽月くんは.....」

愛菜の話し声は、次第に潤みを帯びていた。

そして、ついにその先の言葉を発した。

「私の.....弟なんでしょ？あの子は.....ずっと離ればなれになっていた、直人なんでしょ」

よ……??」

愛菜のその言葉が投げ掛けられると、翼はしばらくしてから首を縦に振り、口を開いた。

「……そうだよ。俺を命懸けでかばって傷ついた、あいつ……羽月は……愛菜が10年間再会を夢見てた、弟さんなんだ……」

翼がそう言い切った瞬間、二人がいる病室には不思議なほど不気味な静寂が支配した。

1秒が1分に感じられるような……

また、1分が1秒にも感じられるような……

時の流れさえ狂わすような空間が、二人だけの間には存在していた。

しかし、それも愛菜が多量の涙をその瞳から流しながら、啜り泣くまでのことだった。

「うっ……ううっ……」

「……」

「うう……直人が……まさか、あの子が直人だったなんて……」

「愛菜……」

「翼は……知っていたんでしょ……？」

「うん……」

「いつから……??」

「あの教会で、愛菜に写真を見せてもらったとき。そのちょっと前に、あいつに同じ写真を見せてもらったんだ」

「そうなんだ……」

「愛菜、ごめん。隠すつもりはなかったけど、結局隠していた形になってしまって……」

翼は、啜り泣く愛菜に対してスッと頭を下げた。

しかし、そんな彼のことを愛菜は怒ることなく、穏やかに首を横に振った。

「翼は何も悪くないわ……。あなたは、お客や他のホストのプライバシーを絶対に他言しないっていうホストとしてのルールを守っていただけなもの」

「愛菜……」

「それよりもー」

愛菜は、両手で涙で濡れたその顔を覆い隠した。

「うっ……えっ……。あの子が……直人が、元気に生きていてくれた……。それだけで私は…  
…ああっ……」

「うん……」

「しかも、あの時はあんなにちっちゃくて泣き虫だったあの子が……今はあんなに明るく、大きくなっていてくれたなんて……！」

長い間探し求めていた最愛の弟の存在を確信してか、愛菜は抑え切れないくらい大きな感情を、瞳から流す無数のその涙に乗せていった。

そんな彼女を見つめる翼の胸の内は、憂いと切なさに満ち溢れていた。

自分の両親に秘められた過去が、まだ幼かった愛菜たちの運命をバラバラにしてきたことなどー

今の翼には、とても彼女に告げることはできなかった。

ただ.....

唯一の肉親の存在のために、その胸を10年もの間傷めてきた愛菜(=茜)という人間の、狂おしく  
儚い想いを乗せた"声"や"涙"が.....

翼の瞳から、一筋の涙を零していた。

第32章へ

「じゃあ、俺はそろそろ行くから」

「うん」

重い腰を持ち上げるように立ち上がった翼は、愛菜に一言そう告げて病室のドアに手をかける。

「翼っ」

「うん？」

「ありがとうね」

小さい声で礼を言う愛菜に、翼は無言で首を振った。

「じゃあ」

翼はドアを閉めた病室をそっとあとにした。

「.....」

長く続く廊下を、翼はぼんやりとしながら歩いた。

そのまま歩いていけば、自然と離れたところにある羽月の病室に着くものの、彼の足どりは遅かった。

愛菜は羽月の正体を知ったー

互いを探し続けていた姉弟の片方だけが未だ事実を知らないー

翼は、羽月に愛菜のことを伝えるべきかおおいに悩んでいた。

そして……

何より、自分が彼らと少なからず同じ血が流れていた従兄弟だったことに、動揺を隠せずにいた。

しかし、何故だろうか？

翼は、先程話していた愛菜から不思議な違和感を感じずにはいられなかった。

「あっ……」

気がつくのと、翼はいつの間にか羽月のいる病室の前にいた。

「とにかく、あいつにも会っていかなきゃだな」

翼は、どこか躊躇しながらも病室のドアへと手をかけた。

「あっ、翼くんっ！」

「よおっ」

病室に入ると、ベッドで横になっている羽月が元気に翼のことを迎えた。

そんな彼の姿を見て、翼の気分もどこか和らいでいく。

「わざわざ来てくれたんやなあ！忙しいのに、ホンマありがとう」

「いってそんなの。羽月、それから具合の方はどうだ？」

「ああ、まだちょっと痛いけど、何とか回復しとるみたいやでえ！」

「そっか」

翼は先程までと違い、どこか胸を撫で下ろすような感覚を覚えていた。

しかし、姉である愛菜の存在のことで、自分の両親が関わっていた10年前の事件について話すべきかを、彼は心の奥底から拒んでいた。

今事実を羽月に話せば、せっかく立ち直りつつある彼の心を再び乱すばかりか、自分との確執をも生じさせてしまう.....

翼は、何よりそれらを恐れていた。

自分を犠牲にしてまで守ってくれた羽月がいなくなるのが、今の翼にはとても怖かった。

「どないしたん、翼くん？ぼーっとしてんでえ？」

羽月の一言で、翼はハッと我に返る。

「あっ」

「どないしたんや？」

「あ、いや.....」

「？」

「な、何でもないよ。ちょっと疲れてるかな」

「.....そっかあ！今、聖さんとの勝負もあって大変なんやもんなあ。怪我人の俺が言うのもなんやけど、翼くん身体大事にせなあかんでえ」

「あ、ああ。そうだな.....ゴメンな、せっかく羽月のとこ来たのに疲れた顔見せて」

「ええって！俺の前では遠慮なんかせんで。あ、いや.....も久しぶりやしな」

翼と羽月は、いつものように笑い合った。

「なあ、翼くん」

「うん？」

「社長やみんな、元気にしてん？」

「ああ」

「愛菜さんは？別の部屋で入院してんやろ？」

「ああ」

「元気.....なんかな。俺、愛菜さんにも、その.....ひどいことしてもうたから」

「どうだろうな。愛菜まだ落ち着いてなくて、面会謝絶みたいな感じだからな。何とかパソコンのメールには送れてるけど」

翼はとっさに愛菜に会ったことは羽月には伏せることにした。

今羽月に愛菜のことを話せば、彼は姉に会いに行き、そして互いを混乱させてしまう恐れがあっ

たからだった。

しかし、自分が彼を騙してるのではないかという罪悪感が、翼の心から消え去ることはなかった。

10年前に彼らの両親を虐殺した原因が自分達の両親にあったと知ったら、羽月はどんなに深いショックを受けるかを、翼は想像するだけで恐怖を感じていた。

『これ以上、この姉弟を傷つけるわけにはいかない』

翼はそれを思い、これ以上羽月に事実を話すことを避けることにした。

そして、いつまでも元気に笑う羽月に呼応するかのよう、翼は本当かもわからない笑顔を見せていた。

「じゃあ、俺はそろそろ」

「そっかあ。翼くん、ホンマにおおきにな」

「ああ。早く、傷治して店出てこいよ」

「うんっ！」

翼は、そのように会話を交わすと、羽月の病室からそっと出ていった。

『羽月……』

病院のエントランスへと向かう翼の足は、やはりどこか重かった。

「とにかく、今月の勝負に勝たなきゃいけないんだよな！」

翼は、気を取り直すように帰りのタクシーへと乗り込んでいった。

1 時間後ー

自宅へと一旦戻った翼は、シャワーを浴び直し、仕事への準備を勤しんでいた。

「さてと」

高級スーツに身を包み、ヘアメイクも所持品も万全として部屋を出ようとした……その時だった。

「♪♪♪～♪♪♪～」

テーブルの上に置いておいた翼のケータイが、一つの着信を知らせる。

「社長からだ。はい、もしもし」

翼はすぐにその着信に応答する。

「社長おはようございます。はい……はい……わかりました、すぐに店に向かいます」

天馬からの電話でただごとじゃないと確信した翼は、ジャケットを羽織らず手持ちで部屋を飛び出していった。

「まったく何なんだ、アリスの子ってのは！」

翼はすぐさま再びタクシーを拾い、歌舞伎町にある【Club Pegasus】の店舗へと急いで向かっていった。

約30分後ー

【Pegasus】の店に着いた翼は、エントランスから事務所へと一直線にかけていった。

「社長！」

「おお、翼」

翼が社長室へと入ると、そこには天馬以外にも佐伯と聖の姿もあった。

翼はなるべく聖と目を合わせないように天馬のもとへと近づく。

「社長、アリスの子から電話があったって……一体どういうことなんですか？」

「ああ。単刀直入に言うと、奴は俺たちがひそかに探りを入れてることに、どうやら気付いているらしい。『あいつのようになりたくなければ、余計なことはするな』……とのことだ。ボイスチェンジャーを使って正体がわからないようにもしていた」

あいつー

それを聞いて、翼は真っ先に死体としての発見をニュースで報道された光星のことを思い浮かべた。

「ちっ！」

聖が口を鳴らした。

「たくよお……。【Unicornis】がダメになってこっちが大丈夫かと思いきや、今度はココも狙われてるってか。アリスの子ってのは、どんだけ頭イカれてんのかねえ。なあ天馬」

「聖」

「おっと、いけねえ。アリスがこの店にいる以上、下手なことは口にしねー方がいよな」

聖の発言で、その場にいる他の三人の表情がピクリと吊り上がった。

「聖さん、それはどうゆうことですか？」

「まあそういきり立つなよ翼クン。そいつの正体がハッキリしない以上、この店の中の全員が容疑者ってことさ。もちろん天馬、お前もな」

「なっ、何を言い出すんですか！社長がそんなことするはずがないじゃないですか！今このことで最も悩んでるのは社長なんですよ？それをー」

「何も断定はしていないさ。ただ、犯人の星がハッキリしない以上、アリスの子の可能性は誰にでもあるってことさ。もちろん、この俺にもね」

「……」

「気分を害したなら謝る」

聖は、翼・天馬・佐伯に対して軽く頭を下げた。

「だが、俺もこのまんま引き下がるわけじゃない。【Unicornis】に妨害を加えたアリスの子とやらの顔は拝んでみたいからな。とにかく……俺のバースデーだけは邪魔してほしくないもんだぜ」

聖はそう言い捨てると、そこからツカツカと去っていった。

「まるで、自分だけは違うみたいな言い方でしたね」

佐伯がポソリとつぶやく。

「そうだろうな。あいつはあんなやつだが、誰よりホストって仕事にプライドを持ってる奴だ。こうゆう進展のないハッキリしない事態に、イラついてるんだろう……昔からそうだった」  
天馬がため息まじりに答えると、そこに翼が質問を投げ掛ける。

「社長、いいですか」

「どうした、翼？」

「俺と聖さんの勝負はともかく、どうなるんでしょうか、この件は。俺達が何もせず黙っていても、アリスがこのまんま何もしないと考えられません」

「そうだな……。まず、奴の真の狙いが一体何なのかがわかればな」

翼はそこでピンときた。

アリスの子は一体何のためにこんなことをするのだろうか？

アリス・クレイアードと星羽会そのものが存在しない今、『アリスの子』とはアリスの『意志を

受け継いだ人物』ということになる。

一体だれが？

何のために？

翼は頭をひねったが、それ以上何か答えが返ってくるということにはなかった。

「とにかく、今日俺達にできることを精一杯やるしかない」

翼も佐伯も、今天馬が言った一言にウンとうなずくしかできなかった。

もちろん、天馬本人も……。

そして、【Club Pegasus】は今日も通常どおりの営業を開始することにした。

「今日も一日やるぞっ！！」

天馬のその力強い始まりの声が、事件でテンションの沈んでいるホスト達の背中を押すのには十分だった。

とにかくやるしかないー

天馬は、まず自分の不安げな面を従業員に出さないことに全力を注いでいた。

それが、内情を深く知る翼には、発奮となると同時に苦しさすら覚えた。

「翼くん、ちょっといいかな」

由宇が翼へと話し掛ける。

「由宇さん？」

「アリスの子のこともあるだろうけど、売上の方は……聖さんとの勝負のことは大丈夫なのかい？」

「ええ、今のところは何とか」

「ああ、僕もさっき佐伯さんから聞いてみたけど、今のところは翼くんに分があるみたいだね。でも気をつけてくれ」

「もちろん、油断なんてするつもりはありませんよ」

「そうじゃない。油断とかじゃなくて、あの聖さんのことだ。今はまだ本気を出していないだろうし、バースデーあたりにまた一つ何かかましてくるに決まってるんだ」

「太客をまだ隠してるってことですか？」

「うん。こないだ聖さんは、華月結奈ってお客さんを連れてきただろう？あの人は、あのクラスのすごい太客をあと二人は持っている。もちろんそれ以外にも太客と言えるようなお客さんも多数抱えてる。翼くんも今やたくさんのお客さんを抱えてるけど、あの人と真っ向から勝負する以上は微塵の油断もしてほしくないんだ」

「肝に命じておきます」

「ごめん、僕がこんなこと言ってもって感じなんだけどね。……ちなみに、愛菜さんの方はどうなんだい？」

「今のところは退院できる状態ではないみたいですね」

「そうか」

由宇はふと肩を落とした。

「売上のため……という言い方はしたくないけど、今は愛菜さんの力を何とか借りたいところだね」

「……」

由宇の言葉に対し、翼は何も言わなかった。

彼の言葉が現実的にもっともな意見だったとしても、今の余裕のない精神状態の愛菜に売上の話を持ち込むことなど、翼にはとてもできなかった。

そして、そんな由宇の予感は的中することとなる。

数時間が経過し、盛況のうちに終わった営業終了後の【Pegasus】では一

聖の提案により、緊急のミーティングが開かれようとしていた。

翼たちナンバー上位を含むホスト全員が、フロアに集結する。

営業後ということもあり疲れを見せる者が多数だったが、ミーティングを始める際に聖から漂うただならぬ緊張感が、それらを強引に掻き消した。

「お疲れッス！！」

「お疲れッス！」

「みんな、仕事後で疲れてるところ悪いな」

聖は、そう言うとホスト全員に対し軽く頭を下げる。

「聖、一体ミーティングだなんて突然どうしたというんだ？」

天馬が問い掛けると、聖はフッと不敵に笑いながら再び口を開いた。

「みんなも知ってる通り、今月下旬...ってもあと半月くらいだが、**No.1**の翼クンと俺のバースデーがある」

「.....」

「俺が25日、その3日後に翼クンの28日だ」

「それが、どうかしたのか？」

「まあな天馬。ここで、いきなりの俺からの提案なんだが.....」

聖は、咳をきって再び口を開いた。

「翼クンと俺のバースデーイベントを、一緒の日にするってのはどうかと思うんだ！」  
「な、何??」

突然の予想外とも言える発言に、フロア内はざわめき始める。  
すぐ横でそれを聞いていた翼や天馬も、さすがに驚きの表情を隠せなかった。

「聖、突然の意見だが.....詳しく聞かせてくれ」  
天馬が彼に話の先を促す。

「へっ.....。まあ、特に深い意味はないんだけどな。せっかく、この俺と翼クンの誕生日がこんなに近いんだ。三日間隔でいちいちイベント開くより、いっぺんにやった方が楽だろうと思ったのさ！それに.....」

「それに？」

「俺と翼クンが真っ向から勝負をキメるにゃ、まさしく絶好の舞台だと思ってな。二人のホストのバースデー頂上対決なんて、お客さんにとっても燃えるコトだろう？」

「バースデー対決か」

「ああ。でも、もちろん翼クンがよかったらの話だぜ？日にちだって、俺が翼クンの希望する日に合わせてもいい。どうだい天馬、佐伯さん？」

聖の言葉に、天馬と佐伯は黙りながら顔を見合わせる。

「俺はかまわん。それでお客さんたちが盛り上がってくれるならな」

「私も、社長に同意です」

そう言うと、二人は翼の方に目を向ける。

翔悟たち他のホストたち全員の視線.....そして、聖の挑戦的とも言うような鋭い眼差しが、翼にすべて降り注いだ。

それらを、翼はただ冷静に受け止める。

「翼、あとはお前の答えひとつだ。聖からのこの話を、お前は受けるのか？」  
天馬が問い掛けると、翼は数秒沈黙した後、コクリと首を縦に振った。

「やらせてください社長、聖さんとの合同バースデー」

翼は、何事もなかったかのように冷静に言い切った。

それを見て、聖はニヤリと笑みを浮かべる。

「さすが翼くんだ！ありがとう、俺の話にノッてくれて。正々堂々、俺らホストもお客さんも燃え尽きるような勝負をしよう！」

翼と聖の合意のもと、合同でのバースデーイベントを開催することが決定し、ミーティングに参加していたホストたちは、驚きのあまりその時の疲れをすべて忘れてしまったかのようにざわめき続けていた。

その後、ホストたちが解散した【Pegasus】の事務所には、翼・天馬・聖の3人が残っていた。

「あらためて.....ありがとうな翼くん、俺の提案を受け入れてくれてさ」

「いえ。そのほうが盛り上がるし、物事が一度に済ませていいのは俺も同じですから。それにー」

翼は言葉を一旦止めると、聖を強い視線で見つめる。

「もし聖さんのバースデーに先に"変な事件"でも起こられたら困りますからね」

「はっ？どうゆう意味かなそれは」

笑っていた聖の表情が、一瞬で強張る。

「仮にあなたとアリスの使徒が繋がっていた場合、わざと"事件"を起こされて営業そのものが危うくされたら、俺のバースデーイベント自体も消えて勝負をうやむやにすることもできますからね」

「何が言いたいのかな、翼くん」

「別に、特に深い意味は。ただ、あなたに言いたいように言われっぱなしなのもシャクだっただけです」

翼は横目で聖をとらえながら冷静に言い放った。

「.....言ってくれんじゃんよ、俺を疑うなんてさ！」

「あなたが俺達に感じてた疑心暗鬼を、そのまま俺もそっくり発言したまでです」  
それまでどこかうすら笑いすら浮かべていた聖の表情もいつの間にか真剣になり、二人は凄まじいまでの視線をぶつけ合った。

「……」

その二人のやり取りを、天馬は何も横槍を入れることなくただじっと見つめる。

「まあいいや。とりあえずさー翼くん、天馬ー」

「はい？」

「この際に何だ、聖」

「28日の合同バースデーで、俺はあんたらを完膚なきまでに叩き潰して、この【Pegasus】をいただくからな！」

まるで今まで隠していたような恐ろしい野獣のような眼光を見せつつ、聖は二人に強く言い放った。

「フッ、まあ健闘を祈るよ」

そう言い残し事務所を出ていった聖の気配が完全になくなると、翼と天馬はフッと苦笑いを零した。

「翼、お前も言うようになったな」

「言われっぱなしってのはけっこう嫌いなんです」

「聖のあんなマジな顔、久しぶりに見たな」

「俺もあんな風に疑うようにハッパかけましたが、どうやらあの人のホストの仕事にかける意気込みってのは、本気みたいですね。あの目付き、正直ゾクリとしました」

「あんだけ宣戦布告したんだ、勝算はあるのか？」

「さあ、そればかりはわかりません」

翼と天馬は、同時に煙草の火をつけながら再び苦笑いを零した。

「まあ、とにかく頼んだぞ……翼」

「はいっ」

決戦の前祝いとでもいうかのように、翼と天馬はビールを注いだ互いのグラスを「カチン」と交わした。

翌日一

翼は、西総合病院に入院している羽月のもとを訪れていた。

「翼くん、いよいよもうすぐバースデーやなあ」

「ああ」

「何や、緊張してん？」

「聖さんや社長の手前、かなり強気でいったけど……実はな」

「そっかあ。でもな、俺うれしいわ、そうやって俺にだけは弱音見せてくれんのが」

「羽月」

「相手は社長と五分を争ったほどの人やし、店の命運がかかってんやもん。だから、プレッシャーきついときは俺のトコ来て愚痴ってくれてええからな」

「……サンキュ」

患者着でも元気に笑う羽月は、見えない重圧がかかっている今の翼にとってはとても心強く思えていた。

「翼くん」

「ん？」

「何もしてあげることはできへんけど……俺は、ずっと翼くんの味方やからな！」

ずっと味方一

愛菜のことや星羽会事件のことを彼に隠している翼にとって、うれしいと同時に胸が痛む言葉だった。

「ありがとうな、羽月」

「そや！がんばれ翼くん！」

店が残るようにー  
早く退院できるようにー

互いにエールを送るように、翼と羽月は笑い合った。

そしてどんどん日にちと時間は経過しー

運命の7月28日

翼は、聖との決戦のバースデーをついに迎えた。

そして、この日に

翼たちの運命を決定づける事件が起こるなど、

この時はまだ、誰も知る由もなかった。

第33章へ

続きはこちらから⇒<http://p.booklog.jp/book/53358>

◆  
いつも当作品をご愛読いただきまして、ありがとうございます！

第32章まで無料で掲載させていただきました本作ですが、第33章よりのvol.4から有料となります。

(既存掲載分は、これまで通り無料です。)

ストーリーのクライマックスにさしかかり大変恐縮ですが、自分の大切な作品の著作権保護のためでもあります。

そして何より、本当に自分の作品を必要とくださる人たちへ感動を届けたい思いひとつでございます。

有料にする分だけ価値があるくらい、ここからは怒涛の展開が待っています。

数々の謎も解け、すべてが明かされます。

わたくしが渾身で書き上げたこの物語の最後まで、どうぞ見守っていただければと思います。

最後は、温かな感動の涙をお約束いたします。

近日中に、第33～35章までを一挙公開にさせていただきます。(第34章まで試し読み設定致します。)

どうぞ、よろしくお願い致します！

Kai Asakura

lost wing～傷ついた愛の羽根～(III)

<http://p.booklog.jp/book/52539>

つづきはこちら⇒<http://p.booklog.jp/book/53358>

著者：K a i

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kaiweblg/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52539>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52539>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ